
覆面の騎士はそうさく

中
薪葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

覆面の騎士はそうさく中

【Nコード】

N4785S

【作者名】

薪葉

【あらすじ】

キノード王国第二王子が創設した蒼鷹おおたか騎士団に所属するヴァン（偽名・性別女）は、常時顔にぐるぐると細長い布を巻いているので“覆面の騎士”と呼ばれている。

さる事情で顔を（一部には素性と性別も）隠し、あるものをそうさく中。

少々クセのある人々（腹枕好きな幼なじみ、毛フェチなオネエ、厄

介寄せ体質等）に囲まれて、訳あり騎士生活はどうなる事やら・・・
目的は果たせるのか？

魔法・恋愛・冒険ありの詰め込み小説となります。作者の人生初作品です。更新は遅いと思われます。

登場人物一覧（前書き）

ネタバレしないよう書いていますが、ちょっと障りだけネタバレしてる処もあります。嫌な方は書き上がってる話まで読んでいただいてからの方が良いかと。

名前の後に付くウルク・ノル・ソル・シャル・フォン・イル・リルというのはキノード王国での爵位（造語）です。高い順に並んでいますが単なる目安です。

登場人物が増えるたび書き足します。

登場人物一覧

ヴァンス・リル・テクトフ（偽名） 愛称 ヴァン

21歳 175cm

主人公 蒼鷹騎士団員

・いつも顔に布を巻いている為覆面の騎士と呼ばれる。面倒くさがり。

・アレクの幼なじみその3・継精者で、弱いが透視能力がある。魔法は全系統使える。

（蒼鷹騎士団）

アレクフォード・ノル・キノード 愛称 アレク

21歳 181cm 橙色を帯びた金髪 深緑の瞳

キノード王国 第二王子 将軍 騎士団長

・腹枕フェチ

マイケル・フォン・スタフィナ

25歳 182cm 白金の髪 愛嬌がある茶色い瞳

蒼鷹騎士団副団長

・アレクの幼なじみその2

ホーリーヒース・フォン・クラスタ 愛称 ヒース 24歳 177cm 黒髪 明るい翠色の瞳

第二王子付き侍従兼筆頭書官兼騎士団員（参謀） ロイスの兄

- ・右目に銀縁のモノクル
- ・アレクの幼なじみその1

ボルトツク・フォン・アップード

29歳 187cm 赤髪 琥珀色の瞳

蒼鷹騎士団員

- ・体躯がいい。“全てに愛し愛され敵を懐柔するのもお手のものと評判

グレン・フォン・ザツケイシー

27歳 170cm 金髪 青眼

蒼鷹騎士団員

- ・毛フェチなオネエ。
- ・中性的な美貌で、よく女性と間違われる。

ランスロット・フォン・クルーニ 愛称 ランス

18歳 172cm チョコレート色の髪 黒眼

蒼鷹騎士団員

- ・厄介が寄ってくる。
- ・一番下っ端。

バーボート・リル・モーリン

30歳 210cm ゴワゴワした灰髪 灰色の瞳

蒼鷹騎士団員

- ・ゴツゴツした体格。たまに方言が出る。

クラントス・フォン・スタンシー 愛称 クラン

19歳 178cm 茶髪 灰色の瞳

蒼鷹騎士団員

・スタンシー家三つ子の真ん中。右手に手袋を嵌めている。

・魔法は苦手だが剣が得意

バリニオス・フォン・スタンシー 愛称 バリー

19歳 178cm 茶髪 灰色の瞳

蒼鷹騎士団員

・スタンシー家三つ子の末っ子。左手に手袋を嵌めている。

・魔法は得意だが剣が苦手

〈騎士団関係者〉

トマス・トカラ

69歳 173cm 白髪混じりの茶髪 茶色い瞳

団舎管理人 “団員の父”

・生活の達人

マギー・トカラ

70歳 158cm 白髪混じりで赤茶の巻き髪 黒眼

トマスの妻 “団員の母”

・騎士団最強の座に君臨し、蒼鷹騎士団員の胃袋をつかんでいる。

ジェニファー・トカラ

16歳 154cm 金茶の巻き髪 茶色い瞳

トカラ夫妻の孫 “団員の妹”

・ヴァンを姉と慕う。フィリスとツエリと文通している

ルシア

11歳 145cm 黒髪 紫色の瞳

団舎の使用者？

・幼児の頃ヴァンに拾われて以来、団舎に住む。ジェニファー以外には滅多に姿を見せない。

アンナ・サニール

28歳 162cm 桃色の髪 タレ気味の茶眼

団舎使用者 ケントの母 未亡人

・服作りが趣味

ケント・サニール

8歳 138cm 金桃色の髪 黒眼

団舎使用者 アンナの息子

・年齢の割に落ち着いている。

くキノード王家く

エルノワード・ウルク・キノード 愛称 エルド

25歳 188cm 橙色を帯びた金髪 藍色の瞳
王太子 軍帥

・妻・弟等、愛する者達の苦い表情が堪らなく好き。三人の子持ち。

サーライド・ノル・キノード

18歳 180cm 橙色を帯びた金髪 薄い青の瞳

第三王子 化精研究者 ツエリの婚約者

・義姉予定のヴァンに逃走・回避能力鍛えられ中。結婚後は身分を返上し公爵と名乗る予定。

フィリス・ノル・キノード

14歳 148cm 橙色を帯びた金髪 薄い緑色の瞳

第二王女

・女性騎士団創設を目指しヴァンを口説き中。お尻フェチ

アーノルド・ノル・キノード

12歳 160cm 橙色を帯びた金髪 明るい青眼

第四王子

・絶賛成長中

（従者）

セフィー・リル・ゾリント

16歳 155cm 黒髪 黒眼

第二王女付き侍女

・フィリスを立派な淑女に育てようと奮闘中。

ロイス・フォン・クラスタ

13歳 161cm 黒髪 透明度の高い翠色の眼

第四王子付き侍従

・兄ヒースを見習い、無表情を保とうとする。いつもフィリスとアーノルドに振り回される。

〈研究所〉

ツエリノア・シャル・グラントリイ 愛称 ツエリ

17歳 154cm 全体的にミルクティー色の髪だが、様々な色が揺らめく遊色の髪が一房ある。 銀茶の瞳

ヴァンの妹 サーライドの助手兼婚約者

・継精者で能力は透視と遠視。効力の範囲は広く、水晶を通すと離れていても身近な人の様子が視える。

ドルイド・ライタム

？歳 168cm 灰色の髪 空色の眼

化精・万天研究所長

・間延びした口調、穏やかな外見に似つかず調査の為ならどんな危険地帯でも赴くアグレッシブな人。

コーマック

30歳 173cm 濃い茶髪 赤茶の瞳

元化精狩り集団頭目 現化精調査員

・頭に円が…

・継精者で能力は、両足が見事に太く立派な獅子の脚に変化する。
脚力も上がる。

〈キノード王国の人々〉

ヘレナ・リル・アシエント

23歳 170cm 金茶のふわふわした髪 碧眼

第二王女付き近衛騎士 元蒼鷹騎士団員

・魅力的な美女なので争奪戦が起こり、責任を感じ蒼鷹騎士団を退
団した。勝者のロバートとは恋仲に。

マルティナ・フォン・ゼフェール

21歳 158cm 赤茶の髪 氷のような薄青の瞳

王宮図書館司書 ヴァンの友人

・翻訳が得意。あらゆる本に精通している“書物の精”と呼ばれる。

フロイス・フォン・ジェントーニ

67歳 180cm 白金の髪 黒眼

古参貴族（御意見番）

・紳士。アレクが一方的に心の師と仰ぐ。

ロティリアーナ・ファンファン 愛称 ロティ

22歳 163cm 褐色の髪 黒眼

医局看護師

・酒豪

・毒舌癖あり

ローズマリー・フォン・リカノフ

18歳 159cm 黄土色の髪 青々とした緑の瞳

花嫁修行中（自称）

・行動派なドジっ子

・ローズマリーを携帯

↓ゲネルデイバイ帝国↓

エリ阿斯・ゲイロウ・ラバトニア

23歳 186cm 白い巻き髪 猫を思わせる金茶の眼

帝国軍第五部隊長 “皇帝の牙” “白騎士”

・帝国使者として万天討伐演習を依頼。

エンリル・ライ・カイムーノ

25歳 180cm 濃紺の髪 切れ長の黒眼

帝国軍第五部隊副隊長

・柄でもないのに年下隊長のお守り役

その他・設定（前書き）

ややこしい説明が必要なものを箇条書きにして載せています。

更に混乱したらごめんなさい。

その他・設定

↳ 化精について

なんの変鉄もなく存在していたのに、突然何かのきっかけで特有の魔力・能力・思考力を得た万物（動植物・物質）を総称して化精と呼ぶ。その際姿も少し変わる

- ・ 姿形、性格、能力は様々・変異の切っ掛けや寿命などは不明
- ・ 思考力に程度の差はあるが、意志疎通はできる
- ・ 力の強弱有り。古くから存在するほど強い傾向。
- ・ 力の強い化精の中には人の姿をとれるモノも。
- ・ 化精は何処にでも存在するが、数はそれほど多くない。
- ・ 時には気に入った人間などに自身の力を貸し与える。その力を“恩恵”と称し古くは神聖なものとして奉られていた。
- ・ 突然恩恵を止める場合もある。
- ・ 万物に宿る化精は実態がわからないので邪悪なものと判断し、排してきた国もある。

↳ “主”

化精の中でも元素等に由来する強大な力を持ち、人の姿をとれる化精を“主”と呼ぶ。

- ・ 明瞭な意思を持つ主達は人を寄せ付けず、滅多に姿を現さないがその恩恵は“魔法”という形で現れている。
- ・ 元素の魔力は属性や強弱の差こそあれ万人に与えられる。時折彼らの恩恵を強く授かる者現れる。
- ・ 魔力の源とも謂われ、利用価値のある主及び化精の調査は各国で行われている

・主達が作ったと考えられている宝具もあるが詳しく解明されていない。

↳ 継精力

先祖に化精がいる一族が受け継ぐ力の事。

・継精力を持つ者は体の何処かに印があり、様々な形で現れる。特に力の行使時に現れる場合が多い。

↳ 継精者

継精力を授かった者達。

- ・人の姿をとれるほど強力な化精の力を完全に継げるわけではない。
- ・一族の中でも発現する人は稀で現れ方も様々。
- ・元素の主らの力を継ぐ一族は少い。
- ・代を経るほど継精者は減り、力が消えていく場合もある。継精者についても詳しい事は解明されていない。
- ・国によっては異形と怖れられ、風当たりが強い。

↳ 万天

万天とは“全身が黒く、見境なく全てを破壊するモノ”の事。どんな場所にも発生し深刻な被害をもたらす。

- ・1体として同じ姿形ではなく、大きさもバラバラ
- ・生態が解明されていない
- ・前触れもなく発生したかと思えば、突然消え失せている場合もある。基本的に力業で倒す方法以外対処のしようがない。

・どの国でも邪悪なモノとされている。

・“様々な能力を持ち、古くから生きている”という共通項から化精と万天は同種のモノであると主張する国もある

・一定以上損傷し、倒されると黒い靄のようになり消えていく。

・気性は荒い

く魔法く

主の恩恵により、自然界の力を借りる。

・火、水、金、土、木、風、雷、雪、光、闇の10属性が確認されている。

・属する系統の主と相性があり、人によって使用できる魔法は異なる。全系統使える人もいれば一系統だけ突出して使える人もいる。
・一応魔力の量も鍛えれば増すが、元々の資質に左右される。

く魔具く

主が作ったとされる宝具を真似て人が開発した。魔力を注げば様々な効果を発揮する。

く蒼鷹騎士団く
おおたか

第二王子アレクフォード・ノル・キノード自らが創設した騎士団

・26名在籍 深緑の団服 創設して間もない。

・元々は第二王子付き近衛騎士から引き抜かれた為、王子の近衛も兼ねる。

・王侯貴族から庶民、化精、敵、団員に至るまで王子が認めた依頼ならどこへでも、どんな無茶な事でも遂行する。

- ・渾名は“第二王子のどこでも何でも団”通称“どこなん団”
- ・キノード王国王都キノスから北西に約50km離れた郊外の山あいに不気味な団舎を構える。
- ・常時人手不足。

〈キノード王国〉

大陸諸国の中でも長い歴史を刻む国。

- ・恵まれた気候を生かした農水産業に支えられ、魔具や宝具の研究も盛んに行われている。
- ・古くから伝わる貴重な蔵書が数多くある為、文化水準は高い。他国から学者や留学生も受け入れ広く公開し、知識を交わす

〈ゲネルディバイ帝国〉

侵略で国土を拡張、未だ争いの絶えぬ国

- ・現皇帝の代では落ち着いてきているが、各地でイザコザが絶えない。
- ・入国出来ても様々な制限や厳しい監視が付き、立入禁止地域もある。
- ・万天被害が増加中

0 話 想起（前書き）

初めまして。本当に初作品ですので至らない上に、どうなるのかわかりませんが、自分が納得できる形で完結を目指します。
よろしく願います。

0 話 想起

見渡す限り草が覆い茂る平原――

視界に広がる景色は空の碧と草の緑。時折吹く風が草を煽りさわさわと音を立て、爽やかな緑の息吹を優しく運ぶ。

そんな二色の平原の一部に黒と白がポツンとある。

黒の正体は、黒き髪に黒き衣服を身に纏った男――その瞼は閉じられ、微動だにせず横たわる。両手は腹の上で組まれ、長い両足は力なく地面に投げ出されている。

男の傍らには白く発光したものが座り、自らの両手を伸ばして男の組まれた手を包む。

そのものは、もう二度と開かない男の眼を見ながら記憶を辿っていた――

『じきに俺から離れられなくなるよ』

『・・・』

『例え俺の心臓が止まっても、キミは傍にいてくれるさ——』

「・・・面倒だな」

もう何度も思い返した横たわる男との一場面に、忌々しげにポツリと呟く。

「生きていた時からお前は面倒くさい奴だったが・・・・・・・・癩に障る」

そう言つと一つ溜め息を吐き、片手を男の手に乗せたまま体を倒した。

そのものが瞼を閉じ、念じると——手指から順に光が消えてゆき、現れた四肢は男と共にザラザラとした岩に変化してゆく。

『キミは俺の——』

「・・・本当にいつもお前は——」

光が全て消え、口元に笑みを浮かべたそのものの全身が変化すると、男の身と周囲を巻き込み大きな一枚岩が出来あがる。

やがて、一枚岩の周囲から水が溢れ出した。

水は徐々に勢いを増し、土を削り小さな湖を作りあげた——まるで岩を護るかの様に。

0 話 想起（後書き）

初投稿・・・緊張しました。

次話から主軸です。

1話

「右っすかね？足跡あるし」

「左だ。メイが血臭に反応している」

「…二手に別れた可能性もありますわよ？」

星明かりも差さぬ暗く広大な山の中腹で、揃いの団服を着た男達が話している。眼前には鬱蒼と繁った木々が立ち並び、男達の行く手を阻んでいた。

「俺が右に行くっすよ。お二人は左へどうぞ」

まず右手に一つ炎を浮かばせた青年がそう切りだした。

「何言ってるんですの。下っ端が勝手に決めないでちょうだい」

が、淡い炎を周囲に纏わせた中性的な男は即否定する。

「下っ端が一人で行く気とはな……………若い」

そして、松明を持つ体躯のいい男にはうつすら苦笑され。

「浅はか過ぎますわね。いずれ力量をわきまえず、ボロボロにされるのが目に見えるようですわ」

「違いない。骨は拾ってやるからな。…………拾える状態ならの話だが」

ポンポンと息の合った掛け合いをする二人に、青年は肩を落とす。

「……………イジメ？それとも愛っすか？……………分かりましたよ……………どうすんですか？」

「こういう時はな……………メイ、この近くにアイツの匂いはするか？」

体躯のいい男が、自らの肩に乗る丸っこい塊を撫でながら話す。

体長30cmほどで長い尻尾に長方形の耳、ヒクヒクと動く鼻。揃えた両手をちょこんと浮かばせる姿も愛らしい、どうやら“メイ”という名のチンチラに似た小動物のようだ。

メイは肩から飛び降り、周囲の匂いを嗅ぎながら左に3mほど離れた樹へ跳ねて行き、黄色い布をくわえて戻って来た。

「左に決まりだな。ヴァンが道標を残してる。布一枚ってことは、右は囷だな」

「ああ……………その手があつたんすね……………あの人も一人で行くなよなあ……………」

またも青年は溜め息を吐いた。

「何をぶつくさと。貴方が間抜けにもスツ転んでたからでしょうが」

「あれは化精が……………っつーか俺を助けてから一緒に追えばいいだろうに、あの人見捨てて行くんだもんなあ……………」

三度、しょんぼりボヤク青年の頭を体躯のいい男が撫でる。

「甘い。そんな間があつたら化精も狩人達も逃げてしまふさ。ヴァンの判断で正解だ」

「それに私達が近くにいましたからね。余程の抜けさくでもない限り、かすり傷一つ負いませんわ」

中性的な男はホホホと笑いながら青年の背をバンバン叩く。

「余程の抜けさく……」（俺の右足ちょっと切れてるの、まさかこの暗さで気づいたのか？）

「さっさと追うぞ、下っ端」「行きますわよ抜けさく」

——男達は駆け出した——

2話（前書き）

やっと主人公が登場。軽い戦闘描写があります。

表現力本当に乏しいので分かりにくい出来です…御免なさい。

俗に言う“十円〇〇”に嫌な想い出がある方はご注意ください。

2話

木々を抜けた先には崖がそびえ立ち、その下には洞穴が存在する。常ならば静かに佇むだけだが、今は武装した物々しい風情の男達が集まっていた——その数約20。時折生きものの鳴き声も漏れ聞こえてくる。

見張りが数人立つ洞穴の入り口から点々と松明が灯り、奥へと続く。その灯りを頼りに大人が三人ほど通れる細さのデコボコした路を進むと、途中壁際に運搬用の荷車が数台並ぶ難所にぶつかる。

荷車を避けつつ更に進むと、それまでの狭い路が嘘の様に大きな空間に出る。空間の中央には生きものが入った檻が数個置かれ、周りを武装集団が固う。

生きもの達——化精と呼ばれるもの達は、体を小刻みに震わせ逃げ出そうとするが、鎖に繋がれ身動きがとれず、小さく鳴き声を漏らすばかり。

武装集団は化精を殺さないよう世話しながら、狩りに行った仲間を待っている。合流次第、生きものが大人しくなる未明に出発する手筈だ。

出発準備も終え、あとは仲間が戻るだけとなった頃、入り口で見張りをしていた男が必死の形相で駆け込んで来るなり大声を上げた。

「オイ、どつかの軍人に見付かった！今外で応戦中なんだがあの覆面野郎強いんだ！応援に来てくれ！」

慌てて男達が外に出ると既に見張りの奴らは倒されていた。

剣を構える覆面野郎の足下には仲間が所持していた松明が転がり、元は黄色であろう覆面をぼんやりと橙色に照らす。

「面倒だな……お前ら熊か蝙蝠か？洞穴の中からわらわらと……」

頭部を余すところなく細布でぐるぐる巻き、口も覆われている為少し籠った低い声で覆面が言う。顔は見えないが背格好からして20歳前後だろう。170cm以上ある身長に、細めだが筋肉がついているのが伺える。

覆面の前方——つまり洞穴の入り口付近に出てきた男達が足を止め、人垣ができた。

最後に帽子を被った30歳くらいの男が出て来る。

集まっていた男達が男の顔色を伺っている事から見て、どうやらこの集団の頭目らしい。

「よう、覆面野郎。強えーじゃねえか。随分暴れてくれたみたいだな、楽しかったか？」

「別に」

頭目が皮肉げに問うと、覆面がつまらなそうに切って捨てる。

「まあそう言うなよ。こっちも楽しかねえーんだ——が、仲間の敵討ちはさせてもらう。時間はとらせねえ、もう少し付き合ってくれや」

頭目は口角をあげてわらった。

一気に男達の空気がピンと張り詰めるが、当の覆面は構えた長剣を下げ、全く緊張感のない素振りで話した。

「こいつら仲間なんだろう？化精狩りが禁止されてるのは充分承知だろうに。高値で売れるが捕まれば私財没収の上、一生禁固とかなんだぞ？割にあわん……逆境が好きなのか？頑張りやだな。真似できん」

「うるせえっ！覆面野郎、一人で来たのを後悔するんだな」
その頭目の怒りを含む一声で男達は一斉に襲いかかった。

魔法を使える者が覆面のいる方へ氷塊と炎の槍を降らせる。すると覆面は右腕をそちらに向け、魔法で渦状の強い風を発生させ吹き飛ばす——自ずと後方に控えていた十数人は地面や壁に叩きつけられ気絶した。

風から逃れた者が啞然とする間に覆面は距離を詰め、長剣で切り交わしながら時に手刀・回し蹴り・跳び蹴りと、体術も繰り出し男達の間を縫うように進み次々倒していく。

やがて残すは頭目一人となった。

「やめた」

最後の部下をねじ伏せた覆面が唐突に呟く。長剣を素早く一振りし、血を散らせ鞘に収めると頭目に向き直る。

「ああ？なんだ覆面、怖じ気づいたか？」

訝しげに顔をしかめる頭目と覆面の距離は、今やたったの数歩分しかない。

「お前ら隣国からの流れ狩り集団だろ？特徴がある。ということは、私がお前らを捕まえるとかかなり面倒臭いんだ」

「はあ？どういう事だ？」

「捕まえると隣国との書類手続きとか協議とか——面倒な手間が発生するんだ。到底一日で片付かない……」

覆面は肩をすくめ、やる気のない声で簡潔に語る。書類のやり取り、犯人の引き渡し、犯行の証明、賠償請求の如何など、とにかく面倒だと。

「……確かにめんどそうだな。で何だ？見逃してくれんのか？」

「いや。直に私の仲間がここへ来るからな。もう逃げられない……だから取り引きしないか？お前らの持つ情報を寄越せ。化精の仲買や売り捌く奴等の市場とか知ってるだろ？」

確信を持つて言い切られた問いに、頭目は顔を反らせた。

「捕らえた事を隣国には内密にして出自も消す。うちの国には捕まるが、獄で禁固されることなく過ごせるぞ？」

心持ち高くなった声で語られた内容に頭目は再び顔を戻し、覆面の眼（つばい窪み）を見やる。

「まあ、それも情報を渡してうちの国で化精調査機関の調査員として働けばの話だがな。一生禁固の上強制労働は免れるぞ？まあ似たような暮らしたろうが、少しはマシだろ……だからパパッと情報を寄越せ」

覆面は余程手続きが面倒だと思ったのか、淡々とした様子から一転饒舌に話し出す。

「……取り引きにはお粗末だな。信じるのはガキくらいだ」

頭目は顔を歪めて憎々しげに言った。

利点だけ言い募る相手など信用がならない——まして取り引きを持ちかけた理由が“面倒だから”と臆面もなく言う胡散臭い覆面野郎では。途中で反古されそうだ。

「まあな。だがそんなに悪くない話だろ？——頭にそんな円作るほど苦労してきたんだ。ここらで手を打つのもいいんじゃないか？」

どう切り抜けようかと思案していた頭目は、覆面が軽く言い放った一言にバツと手を頭に当て、ワナワナと震えだす。頭目の手は円状に広がる無毛の頭皮を押さえている。

最初に覆面が発した風で帽子が飛んでいたのだ——長髪なら気づかなかつたろうに何故わざわざ円が目立つ短髪なのだろう…。

やがてカツと顔を怒りに赤く染めた頭目は、当てていた手を下げ、ギリギリと握り締め拳を作る。覆面を強く睨み付け唸る様に威嚇すると、下らない取り引きの終わりを告げた。

「俺は獅子の血を継ぐ者だ。首輪をつける気はねえよ」

静かな怒りのこもった強い声と共に、突如男の体から光が溢れ首筋に紋様が浮かび上がる。

すると男の両足がみるみる内に太く大きくなり、毛がワサワサと増え、獣の脚に変化し始めた——

「継精者か……猪系？その割に円が出来たのか……どうせならもさもさも頭目に継げたら良かったのにな……気の毒に」

覆面が頭を見ながら全く憐れみのない声で言う。

目の前で頭目の足が立派な獣の脚に変じても動揺すらしていない様だ。

「円は関係ねえぞ…断じて今は関係ねえ。黙れ」

「ああ、隠れ円持ちはどんな世代にもいるからな。多いらしいし気にするな。頑張つて生きてきた証だ」

「うつせえ！てめえみてーな顔だけミイラ男よりましだっ」

そう声をあげると頭目が突っ込んでくる——人間とは思えない速さで。

継精力が両足に発現され、見事に大きな獅子の脚を得た男——その蹴りが覆面の横スレスレに舞う。

増した脚力、硬い蹄とスピードによりゴヒュツと風を切る音が聞こえた。

覆面はかするだけで吹っ飛ばされそうな蹴りを長剣では受けず、軽い身のこなしでその蹴りを避けながら、頭目と距離をとり反撃の隙を伺う。

頭目が焦れて宙に高く跳び上がり、体重を乗せた蹴りを頭部に叩きつけようとしたその時——覆面の手から雷が進り、頭目に命中した——

2 話（後書き）

読んでいて嫌な想い出がよみがえった方御免なさい。私も中学生の頃初めてこさえました……衝撃を受けても気にしない事しか出来なかったあの頃。今の世なら治るかはともかく何とかデキます。ありがとう。

ちなみに彼のは五百円大です。

3話 騎士団

早朝——二輪の太陽が顔を覗かせ時折鳥の羽音が聞こえる程の開けさが支配した山あいには、とある建物が見える。

キノード王国王都キノスから北西に約50km離れた郊外の山あい。そこには第二王子アレクフオード・ノル・キノード自らが創設した騎士団“蒼鷹騎士団”の本営が構えられている。
おおたか

重厚な佇まいで広い建坪。歴史を感じさせる古びた壁面、所々ひび割れ蔦が蔓延りナニかが出そうな妖しげな迫力——およそ創設間もない騎士団に似つかわしくない館である。

館を気に入った王子は軍にて將軍職に着き、只でさえ直系王族である為離れられないはずの王宮から居を移し、団員達と共に暮らしている。

所有していた一族が滅び、不気味な噂が流れ山賊の類いすらも恐れて近づかず麓にある町の者からも永らく放置された館を一部改装・増築し団舎とする。

そうして他の軍人や騎士達には“あそこで耐えられる奴等は変わり者”とある種忌避される本営が出来上がった。

実際なぜかークセある者達が多く所属する。噂が広まったのか団舎を管理する人材を募集しても集まらず、常時人手不足だ。入ってもすぐ辞めていく……給料はいいのに。

騎士団には現在26名在籍し王子の瞳にあやかった深緑の団服を

身に纏う。元々は第二王子付き近衛騎士から引き抜かれた為、王子の近衛を兼ねながら様々な依頼をこなす。

本来騎士団とは、主又は国を護りその敵を討つ為の組織。だがこの蒼鷹騎士団は何故か他の王侯貴族から庶民・化精——果ては敵に至るまで王子が認めた依頼ならどこへでも、どんな無茶な事でも遂行する騎士団である——たまに団員個人の依頼もある。

よってついたアダ名が“第二王子のどこでも何でも団”通称“どこなん団”。

実に率直で……そのままの名で呼ばれている——

その団舎の奥にある会議室。今そこでは団員数名が在室し、黒髪の男に覆面が問い詰められていた。

「何故あなたはこうも拾い物が多いんでしょうね……面倒くさがりのくせに拾ってきた数はもう両手では足りませんよ」

さらさらと真っ直ぐな黒髪、光を通す明るい翠色の瞳。右目に銀縁のモノクルをかけた彼は第二王子の侍従兼筆頭書官兼騎士団員を務める——鉄の表情筋を持つ男だ。

「ははは、成り行き成り行き。何でか逢うんだ。縁とは不思議だな」

「笑い事ではありませんよ。幼児に化精、その他諸々のうえ今度は狩人集団……もう嫌です。禁止です。拾ってくるな……」

口調はゲンナリしているが表情筋は微動だにせず。その姿は人形が怒っているかの様だ。

「まあまあ、今回は本当に拾い物です。第三王子にせつつかれていた依頼に充てられる——化精調査に使える人材には違いない」

肩にメイを乗せたまま体軀のいい男は、拾い物——覆面が捕らえた狩人集団の使い道を提案する。

覆面が頭目を気絶させた直後に合流した彼等は、事情を把握するなり覆面の案に賛成し、団舎まで連行した。

「確かに条件に当てはまりますが……どこまで使えるかわかりませんよ。隣国出身、余罪あり……それらを抹消する手続きを誰がすると思っっているのです……やってくださるのでしょうかねえ、ヴァン？」

「無理。面倒くさい……頼む」

いつ取り替えたのか茶色い布を頭部に巻いた覆面は言い切った。

騎士団の参謀役である優秀な黒髪の男に協力して貰わねば今回の件は通らない。逆に言うと、彼の承諾を得れば後はスムーズに進む。

(…さて、やるか)

覆面は唯一感情が読み取れる両目を布越しに見つめ、説得する為に口を開く。

「少々催促されていた依頼だ。第三王子も諦めかけていただろう、方々手を尽くしたらしいしな……恩を売っておけるぞ？頭目は継精者でオマケに化精付きなら使えなくても文句は出ない。」

覆面はさも当然とばかりに断言し、先ずは利点を並べる。

「狩人集団が逃げたり隣国にバレたとしても、証拠もないし被害もでない……調査先での逃亡には武器も要らないからな。多少金品は

取られるかもしれないが、たかが知れている。それにあの山近辺の住人には今回の任で感謝された。うちの不利になるような証言はしない」

次に問題点を上げ、対処方法も言い添える。一気に喋った覆面は布まみれな割に息苦しくなさそうだ。

叩けば埃が出てくる説明だが、意外と押しに弱い男に畳み掛ける――色々言ったが結局は勢いで流そうという魂胆である。

「ヴァンとランスを放せば何かあるのはいつもの事だろう？俺も居たのにすまなかったな。何とかしてやれないか」

メイを肩に乗せる“全てに愛し愛され敵を懐柔するのもお手のもの”と怪しい評判を持つ男、ボルトツクはすかさず覆面に加勢した。

「本来の任は終えていたのでしょうか？ならばすぐ戻れば良かったものを……そもそも何故こうなったのですか？」

二人の言い分に、少し心が動いたらしい彼は、事の発端を訊ねる。

覆面とボルトツクは一度視線を合わせ、言いづらそうに一呼吸置いてから答えた。

「任を終えてすぐ戻ろうとしたんだけど……その新人がまたやらかしてくれてな……」

それまで覆面の斜め横に大人しく控えていた青年はびくりと肩を揺らした……いつの間にかメイが頭に乗っている。

「ランスは凄い……化精に遭遇する確率は低いのに偶々一人離れて寄

った沢で遭うとはな」

「ランスに悪気は無かったよ、沢で狩人に追われている化精に遭うなんて誰も思わないさ……」

「私が気づいて駆け寄った時には化精に攻撃されて……避けた先に仕掛けられていた化精用の罠に引っ掛かった。思わず置いていったな……」

「俺とグレンが見つけた時には網に絡まってもがいていたよ……少し愛らしかった」

ボルトックは慈愛に満ちた笑みを浮かべている——まるで歳の離れた可愛い弟を見るかの様に。

「俺は……おれは……」

ランスは一言も言い返せない。気がつくとは彼はいつも厄介事に捲き込まれている——周りも慣れたものだ。

「そうですね。厄介寄せと拾い癖持ちを一緒にしたら自然にこうなりますね。配慮が足りませんでした……」

鉄面皮を崩さず、脱力した男は遂に折れた。

「解りました。事後手続きは私が処理しましょう。ですがヴァン、狩人集団の説得は貴女がしなさい」

「………わかった」

覆面はこれ以上の妥協は無理と悟り頷く。

話を終えすっきりとした三人とは対照的に、項垂れているランスの頭からメイはボルトックの肩に跳び移る。

「そうだグレンはどこに？」

共に行動していたグレンは団舎に到着するなり姿を消した。

「先に王子と副団長を連れて牢へ行っています。私達も行きましょう」

一同は部屋を出て地下へと足を進める。

「オッホホホホ」何故だろう、地下へと続く階段には高笑いが響いている。

「またやってるのか」

一同の胸に同じ思いが浮かぶ。

声は地下牢の一室、狩人集団の頭目を収監した牢から聞こえてくる。

守衛担当の騎士達に挨拶すれば皆一様に口元がにやけていた……この顔は――

ある予感が通り件の牢を覗くと、左手に細剣を握る中性的な男が頭目を拘束している。

「私の仕事は無くなったみたいだな」

覆面は嬉しそうに呟いた――

戦った後なのだろう。本来なら頭目は手足を枷に繋がれているはずだが、今は解放されていた。その両足は獣の足に変化し――グレンに上から押さえつけられている。

「終わったよヴァン。遅かったな」

暫し呆れていた一同にグレンとは反対側の壁に立つ男が話しかけた——その深緑の両目を覆面に向けて。

「頭目と賭けをした。グレンと戦って勝てば釈放、負ければ黙って調査員」

そう説明するのは、深緑の瞳をした男の傍らに控える白金の髪を持ち、愛嬌のある茶色い眼をした男——副団長マイケル・フォン・スタフィナ。

先程の守衛当番達はその賭けの結果を更に賭けていたらしい。にやつくわけだ。

「お礼は？腹枕一時間でいいぞ」

得意気に瞳を細める、もう成人を過ぎた男——この国の第二王子は覆面にねだった。

「なぜお前に礼せにやらなん……グレン、ありがとう。手間が省けた」

「よろしくてよ、よろしくて……この毛並みを触れましたもの……
アア……」

至福の時——グレンは毛フェチだ。故にメイの毛にも触れようと
するが、あまりにもギラついた眼で凝視されるので賢いメイは彼に
近づかない。ボルトツクの傍ならまだしも絶対に一対一にはならな
い。今もいつの間にか彼女は巢へ戻ったようだ。

頭目は何をされたのだろう……。ピクリとも動かない。団服を着てい
ても女性に見間違われるほど中性的な美貌の彼に、まさか負けると

は思わなかったのだろう。獅子の自尊心は粉碎されたかもしれない——これ以上毛が抜けねばいいな——ヴァンは少し同情した。

「この硬い手触りもイイですわね……獣らしくてよろしくてよ——」
グレンはその白い頬が摩擦で赤くなっても頬擦りを続けている。
もう誰にも止められない——「ウフフ、頭部に円こさえてる場合ではなくてよ、すぐ効く薬をあげますからね——趣味が高じて作られた研究者も舌を巻くグレンお手製発毛剤の被検体に決まったらしい——」

「ヴァン、俺が賭けを提案した。俺にも礼があっても良いだろ？ 腹枕二時間でいいぞ」

「なんで増やした。うざい、面倒くさい……町か王都のお姉様方の腹枕で手を打たないか？ 私が選り抜いた魅力的な腹部だお薦めだぞ？」

「確かに彼女達は素晴らしい。だがヴァンではない。他は飽きた……30分でいいからさ」

覆面は縁あって王子とその側近達とは幼馴染みの腐れ縁だ。何が切っ掛けだったか、弟妹にする様に一度腹枕をしてやったらお気に召したらしく——以来野山を駆け回り疲れて横になる度狙われた——味をしめた王子の腹枕係になってしまったのだ。

大分前から拒むと引くようになったが未だにねだってくる。誰の前でも見境ないので覆面の性別を知らない方々に多大な誤解を与えた。

「諦めてください王子。そんな時間はありません」

このままではいつまでも終わらないと判断した幼なじみその1、

侍従兼筆頭書官兼騎士団員ホーリーヒース・フォン・クラスタは口を開く。

「この後王宮へ登城し会議に出席。その後ゲネルディバイ帝国の使者と会談があります。遅れるなどもつての他」

やはり微塵も表情を変えずに予定を述べる。

「そんな用事もあつたか」 アレクは今日の予定を思い出し口論を止めた。

「ヴァンも行くだろ？」

「ああ。ランスもな」

「ええっ俺も？夜通しの任務で一昨日からほぼ寝てないんすよ！？何で俺……」

「下っ端だからな。何事も経験だ。行け」

ニヤリと口角を上げたマイケルはアレクに剣術を指南した老將軍の息子という縁で幼なじみその2だ。彼はランスに命じた。

「若いくせにな。これくらいで騒ぐな」

「そんなに歳変わらないでしょうがヴァンさん。」

「問答無用」

下っ端を援護する声はあがらなかった。

「ヴァンは殿下方が呼びです。愛しのツェリノア殿も招かれるそうですね。どうせ会いに行く気だったのでしょう——先ほどの狩り集団を手土産に」

覆面は無表情だが（布で見えない）——長い付き合いだからわかる微笑みを刻む気配を感じた。

「ああそうそう、グレン。狩人集団も王都の研究所に連れて行きま
すから続きはそちらでお願いします」

その声に反応したグレンは艶然と微笑む。

騎士団関係者にはそれなりに甘いヒースはその他に容赦なく無慈悲
である――

3話 騎士団（後書き）

補足… 1話でメイはチンチラに似た小動物と書きましたが歯類の方です。猫ではありません。一応補足します。表現力乏しくて申し訳ありません……

4話 団舎から王都

「ごちそうさま。今日も美味しかったよマギーさん」

「うまかったア！ごちそうさんです」

「いつも有り難う、マギーさん」

ホカホカと湯気が立ち上ぼり食欲を誘うパンプキンスープに燃え
トマ（発熱しているトマト）を使った温野菜サラダ。

メインにはハムチーズとベーコンエッグがあり、朝から大量に焼
かれたおかわり自由のふわふわパンに挟んで頂く。

デザート代わりの果物は食堂のテーブルに各種常設され好きな時
にとれる。そんなボリユームたつぷりの朝食を全て平らげ、覆面達
は作り主マギーに礼を言った。

地下にいた覆面達は王都へ移動する準備の為に一度解散し、腹ペ
こな徹夜組は果物だけでも食べようと食堂へ向かった。果物を素早
く食べ、さつさと準備の手伝いに行こうとすると“団員の母”と自
負するマギーに見つかった。

彼女は“いい仕事するには朝食で1日を使いきるエネルギーを摂
る事から！しっかり食べてからお行き！”と一同を一喝し、素早く
朝食を作ってくれたのだ――

「朝飯くらいキッチリお食べ。忙しないねえまったく」

広い食堂と調理場を隔てる壁はなく、カウンター越しに顔を見な
がら会話ができる構造になっている。覆面達は調理場に近付き、猛
然とキャベツの千切りを山のように作り出す手を止めずに、洪い顔

をして呆れ声で叱るマギーに苦笑する。

「忙しいのは信用がある証拠でしょう？有難いじゃないっすか」

「それとこれとは別だよ。まったく……食事ぐらいゆっくりとれる甲斐性あってもいいだろうに」

今年で御年70歳になるマギーはくるくるとした白混じりの赤茶髪を頭巾で抑え、奥深い黒眼でランスを見据え持論を語る。甲斐性あるいい男つてのは、いつでも余裕があるもんだ……と。

「食事時間にまで甲斐性の有無が関係するんすか？」

聞いたこともないマギーの持論だがそこは年の功。一理あるのかもしれない。首を傾げたランスは先輩騎士に意見を求める。

「するかもな」（私は聞いた事ないが……面倒だ、頷いとう）

「そんな事もあるさ」（根拠は無いがな……頑張れ下っ端）

覆面はともかくボルトツクにまで肯定されたランスは素直に信じ
た――

騎士というものは貴族出身であろうが、戦や任務中の生活で困らないように普段から自分の世話は自分でやる。少なくとも団舎生活ではそうしている。

騎士団には上下関係があるので主に新入りらが休みなく雑用をこ

なすが、この騎士団を創設した王子が“キツチリ休養を取ってこそのいい働きができる”と訓示を掲げた為管理人や生活の手助けをしてくれる使用人がいる。

戦時などの生活ノウハウは入団歓迎懇親会と言う名の元、団舎の裏手にある広大な森で“自給自足の一ヶ月！誰も助けてくれないよ”大会が行われ実体験で身につける。

先輩騎士達からの有難い攻撃・畏、野生の生き物達を相手に朝晩関係なく逃げ回り、何がなんでも生き残れという“歓迎大会”と銘打った試練が与えられる。

生活の知恵を叩き込み、入団試験では把握しきれない詳細を暴き、先輩騎士と手っ取り早い挨拶を交わす。一石三鳥を狙った面倒くさがりの発案と有能鉄面皮により実行された。

他の先輩騎士達も毎年嬉々として参加する……ストレス発散と賭け（誰が脱落しないか）の機会は逃さない。

この試練を受けた新入りらは辞めていく者もいるが、残った者達は管理人夫婦や使用人に大変感謝し、自ら率先して彼らを手伝い生活のノウハウを学ぶ。

自然と団員達は彼らに頭が上がらなくなり、特に騎士団創設時から使用人をまとめるトマスとマギー夫妻には誰も逆らえない。

経験をつんだ老夫婦ならではの説教に躡られ、元農場主トマスが作る取れたて野菜を使用し、マギーが作りだす絶品お袋の味に皆胃袋をつかまれ王子ですら逆らえない。

マギーは王子だろうが叱りつけ、蒼鷹騎士団最強の座に君臨した

おたか

「ところでランス…また服破っちまったみたいだね。前にアンナが繕い物の数断突一位だと言っていたよ。いい加減自分で繕えるようにならないとねえ……後でアンナを手伝う時にでも教えてもらいな」

注意され、ランスは慌てる。教えを乞えと言っているが要するに仕事を命じられたのだ。マギーの言う“後で”は“直ぐに”と同意語で、任務を終えたその足で取り掛からねば仕事はどんどん増えていき、休む間もなくなる。すっぱかそうものなら飯抜きの上先輩騎士から問答無用でしごかれる。

「……わかりました……」（破れ服置き場へ行ったのはついさっきなのに、何でもう知ってるんだ……ってか俺はいつ眠れるんだ？）

仕事の終わりが見えず、ガツクリと頂垂れたランスを見てくすくすとお愛らしく笑う少女がいる。彼女は金茶の巻き髪を結い上げ、簡素な機能性を重視したエプロンを付けている。

朝早くから祖母を手伝い、覆面達に給仕をしていていたマギーの孫娘“団員の妹”ジェニファーだ。

片頬に笑窪を作って笑う姿も可愛い彼女を見ながらランスは思う。（おかしい……うまい食事とジェニファーの笑顔で寝不足三日目を乗り切る力がつくはずなのに……何で疲労感が増すんだ……）

エネルギーを補給しに来たのに、更に力が抜けた気がしてならな

い。

暫くして、笑いが収まったジェニファーはエプロンポケットから手紙を取りだし覆面に差し出す。

「ヴァンお姉さま、王宮に行かれるんですね？ ツェリちゃんとフリス様に手紙を渡してもらってもいいですか？」

「いいよ」

覆面は快諾した。女の子からのお願いは面倒くさがらずに聞きたい……そのまま二人は楽しそうに会話し始める。

「ヴァン“お姉さま”って柄じゃねえよな」

頂垂れてその様子を見ていたランスは思わず呟く。覆面は下手すると自分よりも男らしいのに……

「いいじゃないか何でも。男ばかりでむさ苦しいここでは貴重な華がある光景だ……和む」

華っすかねえ……と、ブツブツ不服そうに呟くランスの肩をポンツと叩くと、ボルトツクは外へ続く廊下へと足を向けた――

覆面達が団舎から少し離れた転移門へ移動すると、トマスが護送用の馬車などを用意していた。

彼は野菜作りだけでなく団舎や家具の修復、化精・動物の世話までこなす生活の達人じいちゃんである。

経験豊富なトマスは団舎管理以外にも頼られ、度々団員から人生

相談を持ちかけられる。穏やかながらも時に厳しく的確な意見で野菜と一緒に団員達も育てる彼を皆“団員の父”と慕う。

マギーに唯一意見を言える上、それとなくフォローに回ってくれるトマスを尊敬する団員は多い……恐妻を持った場合の手本にもされている。

そんなトマスの指示に従い作業する団員達の中に、グレンの姿もある。

グレンは頭目の傍から離れず、既に朝食を済ませていたマイケルや他の団員と共に狩人集団を馬車へ詰め込む作業にあたっている。

「グレン、腹空いてないのか？」

グレンを見つけたボルトックが声をかける。地下でグレンは恍惚とした表情のまま、べったりと頭目から離れなかった。その為覆面達は先に食堂へ向かい、あとで交代しようとして一旦別れたのだ。

「大丈夫ですよ。ルシアがそこに果物とおにぎりを置いてくださったみたいなの」

グレンが長々と頭目の毛を堪能していたら、しびれを切らした団員がトマスに説得を頼んだ。グレンは観念し、頭目を自ら馬車に詰め終え一息吐いて振り返ると、目の前になぜか果物とおにぎり入りの籠が置いてあった。

周囲にいた人々の物ではなく、あたかもグレンに食べてというかの様に、一人の時を狙って置かれたその籠。

このように姿の見えない誰かから贈られる“ちょっと良い事”は

大抵覆面が拾ってきた幼児——今は少女に成長したルシアからの気遣いである。察したグレンはありがたく頂戴した。

「帰りにお菓子を買ってお供えますわ。何にしましょうかしら」

普段姿を見せない彼女にお礼をするには、食堂にある専用の椅子にお菓子を置くのが暗黙の了解になっている。

ジェニファー以外には滅多に姿を見せない彼女の嗜好はいまいちわからないが、いつの間にかお菓子は持ち去られるのでよしとしている。団員達は飽きないように様々な菓子を置く。

話を終え、各々の準備に取りかかると、王宮出仕用の服に着替えを済ませたアレクと手伝いをしていたヒースが団舎から出てきた。

アレクはキョロキョロと見回し、覆面を見つけると足早に近づいてくる。覆面の前で足を止めた彼は、唐突に話を蒸し返してきた。

「ヴァン、腹枕がダメならせめて馬に相乗りして腹に手を」却下。私は狩人集団の見張りで馬車に乗る」

「じゃ、馬車で腹」アレク……いい加減にしろ。しつこいぞ……何かあったのか？」

「……別に何も？」

わざとらしくニツコリと微笑み、アレクは誤魔化そうとする——怪しいそれに誤魔化されてやる人は少ないだろう。

普段なら流石に腹枕一つにここまで粘りはしない。粘る時は大抵

……

「兄王子にお会いするのです…ゲネルディバイ帝国使者との会談に王太子殿下も同席されます」

アレクに追い付いたヒースが教えてくれる。

「ヒース…バラすなよ」

「いずれ知れる事です」

不満げに目をすがめ、詰るアレクをヒースは軽く諷めた。

昔からアレクは兄に会う前同じ態度をとるからバレバレだというのに、情けないという自覚はあるので隠したがる。

「そうか、エルノワード殿下か……」

第二王子のアレクは王太子である兄に苦手意識を持つ。仲が悪い訳ではないが、昔からアレクのストレスは大半が兄の手によるもので……ストレス値が限界に達したアレクはその度覆面に腹枕をせがんできた。

今回も会う前からもう限界に達しそうで、腹枕を予約しておきたいのだろう。……私の腹はママタオルか？…覆面は気が抜けた。

「ヴァン、またこいつに逃亡されたら面倒だろ？頼むよ1回」

出発準備が整い、報告に来た副団長マイケルは、アレクが逃亡する度仕事すべて自分に回ってくるので覆面に懇願する。

以前いい加減面倒になって腹枕なんてやめようと、覆面がアレクに“金輪際腹枕しない宣言”をした事があった。

アレクは数日後姿を消し、覆面達が見つけた時には王都から離れた花街で艶麗な美女に囲まれ一人一人に腹枕を試していた——覆面と同行していたヒースは“王都に魅惑の腹枕隊を結成させますのでお戻りください”と無表情で言い募るが、アレクは少し顔を向けただけで起きようとしなない。

さてどうしたものか。アレクがここまで腹枕好きなのは自分にも少しだけ責任があるかもしれん——覆面が思案していると、もう一人の同行者ボルトツクが“殿下、今戻ればヴァンが思う存分腹枕をしてくれるそうですよ”と言うと、アレクは腹枕から顔を起こし覆面を見すえた。

“本当だろうか？”と確認をとるアレクに覆面は仕方なく頷いた。

“ああ。それと私が選んだ素敵腹枕美女も紹介するから戻れ”その言葉にアレクは身を起こし、帰ってから直ぐ覆面の腹枕を満喫した

そんな事があって以来ストレス値が限界を越えたり、何かの拍子にアレクはフラリと逃亡するようになった。さすがに魅惑の腹枕隊は結成されなかったので、大概花街にいるのを見つけるのは簡単だが、任務先から呼び戻されるのも面倒くさい。

(…仕方ないか…)

「わかった。あと2回借りができたらやってやる。それまで我慢し

る」

「なぜ2回！？帰ってきたら直ぐに「存外まだ元気だからな。楽しみは残しておいた方が良いらしいし」

「そんな事は——フォッフォッ、しつこい男は嫌われますぞ殿下。そこまでにしておきなさい」

アレクが更に言い募ろうとした時、準備を終えやり取りを見守っていたトマスが声をかけた。

「よし、ありがとうトマスさん——覆面はトマスに会釈するとサッサと持ち場へ逃げる。」

トマスに止められてしまつては、去っていく覆面を止められない。諦めたアレクは覆面を見送ると、マイケルから再び出発準備が整つたと報告を受け、愛馬に騎乗し転移門に触れる。

腕につけた橙色を帯びた金の腕輪が輝くと、転移門が開いた。

「ではトマス、行ってくる。留守を頼んだ」

「はい。気をつけて行ってらっしゃいませ」

一同が転移門を通り終えると、腕輪の光が消え自然に門が閉まつた——

転移門は誰にでも使えるわけではなく、王家が許可した人物にのみ鍵となる魔具——腕輪が与えられる。

転移門は世界各国に点在し、使用者が思い浮かべた転移門へ繋がる。もちろん制限が設けられている門もあり、例えば使用者が実際に触れた事がないと開かない門等がある。

そして蒼鷹騎士団一行が潜り抜けた先は王都から数km離れた場所にある転移門だった。

転移門が閉じ、念のため皆の無事を確認すると一行は王都を目指し進みだした――

大陸諸国の中でも古い歴史を刻むキノード王国王都キノス。気候に恵まれ豊かな自然の恵を受けるこの国は農水産業に支えられ、魔具や宝具の研究も盛んに行われている。

古くから伝わる貴重な蔵書が数多くある為、他国からの学者や留学生も受け入れ広く公開し、知識を交わす。

豊かな自然とその知識を奪おうと度々戦火に見舞われるが、古くから協力関係にある国々の助けもあり今まで存続してこれた。

王都には王城をはじめ古い建造物が数多く姿を残す。王宮をほぼ中心に囲うように卸売り市場や学舎、美術館などが展開し都の外れには花街も賑わう。

古い街並みと今の生活様式が入り交じり貧富の差がありながらも活気溢れる王のお膝元である――

.....

.. ふっふっふん、お・姉・様・がゝいらっしやるゝ久方ぶりに

「お会いできる〜」

都のとある研究室ではミルクティー色の真っ直ぐな髪の中に、ひと房様々な色が揺らめく遊色の髪をもち、ポツチャリした体型の女性が自作の歌を機嫌よく歌っていた。

「口ぐせは〜め・ん・ど・う〜一回〜頼むだけでは〜動かない〜
〜百回〜付きまたとえば〜面倒で〜どんな〜頼みでも〜動く〜そんな
〜可愛い〜方〜」

調子外れに歌う声は澄みわたるような高音で、残念な歌詞の割りには耳に心地よい。

「百回付きまとわれれば誰でも動く……」

同室している橙色を帯びた金髪の男が呆れ気味に言った。彼は薄い青色の両目を窓に向け遠くを見やり「もう来るんだ」と呟く。

「ええ！殿下方が招待してくださいましたの〜そろそろ行って参りますわ〜」

微妙に歌の名残で語尾が伸びながら楽しそうに言う。

「サーライド様も行きませんか？お姉様もお顔を見たいと思いますし」

「絶対行かない……あの人はお前が元気なら何でも良いハズ……さっさと行ってこい」

サーライドは眉間にシワを寄せて拒む——今日彼女が会う人物がとても苦手なので。

「フフフ〜ではゴー君と行って参ります。シーちゃんとお留守番宜しく願いますね」

その言葉に彼が頷くと、彼女はお供のゴー君——立派な角を生やしたヤギを伴い出掛けていく。

静かになつた部屋にはサーライドとヒツジのシーちゃんが残された。

………
同時刻——

王宮の片隅に小さいながら四季折々の花を咲かせる庭があり、“小人の花園”と呼ばれている。

今その庭には茶会の用意が整えられ、側には10代前半の少年少女が三人膝を突き合わせコソコソと会話をしている。

「アーノルド、準備に抜かりはなくて？」

「勿論！完璧です姉上」

彼らは今日来るお客様をもてなす為に準備を終えたところだ。

元氣よく声を弾ませる二人にガツチリ腕を掴まれ、無理やり輪に加えられた黒髪の少年は恨めしげに二人を見ている。

彼らの目的はモチロン、久しぶりに会う人々との楽しいひと時……だが、本命はその後控えた計画を実行させる事である。

「フフフッ、今回はバレずに遂行しますわよ！」
「はいっ！」

日の当たる庭に闘志みなぎる声が響いた――

5話 王都各所

「副団長、ヴァンはいいんですか？第三王子に会わなくて……いつものは？」

「愛しのツエリちゃんのが優先なんだろ。俺から馬奪ってアレク達と王宮へ行った」

「へえ〜こういう機会は逃さない人なんすけどね、珍しい…」

今三人が居るのは王宮に程近い化精研究所の応接室。狩人集団引き渡しの手続きと挨拶の為、所長を待っているのだが……急な事態に対応が遅れているのか、なかなか所長は姿を現さない。自然とボルトックが疑問を口にしたのを皮切りに会話が始まる。

「……アイツが見逃すと思うか？」

「……………」

「ランスの言う通り、いつも動く時は一石で何羽も狙う奴だぞ……何もしてないとでも？」

「確かに……そうですね。普段面倒がって動かないから、ここぞとばかりに何かしてるだろうな」

「そつすねー。仕掛けますね、あの人」

「…賭けるか？アイツが何したか」

副団長マイケルは茶目つ気たつぷりな笑みをつくり、二人に賭けを持ちかけた。

.....

サーライドは突然所長から呼び出しを受け、羊のシーちゃんに部屋を任せて所長室に向かって廊下を歩む。

研究所というだけあって廊下には少なく静かだ……時々なんと表現しがたい、様々な化精の鳴き声が聞こえる以外は。

（…イヤな予感がする。大抵急な呼び出しに良い事はない。あの研究の為なら噴火口だろうが飛び込むアホ所長だ、また何かしたんだろうな……）

冷たい廊下を踏みしめ、二階にある所長室へ向かうサーライドの顔は、さながら敵地へ攻め入る兵士の様だ。

この研究所で一番若い男性研究者である為、よく調査の同伴を命じられる。その度酷い目に遭うというのに所長はめげず、徹底的に調査する。その執念は研究者として必要なものだと思うが、生命の危機すら顧みないのは如何なものか……

サーライドは今までの調査を思いだし、歩む速度が落ちた。それでもやがて二階奥にある分厚い木製の扉を前にと一呼吸吐き、覚悟を決めて扉を叩いた。

「入ってえ」

許可の声と共にサーライドが入室すると、ゴチャゴチャした室内が見える。

執務机は書類で埋もれ、怪しげな実験器具がところ狭しと散在する部屋の中央に白衣を着た初老の男性が立つ。サーライドの顔を見るなりその人物——所長は話し始める。

「今朝、アレクフォード殿下から急使が来てねえ、やっと調査に使えるうう人材が見つかったんだって」

「はあ……それはよかった。やっと調査員が来るのですか」

サーライドはまともそうな用件にほっと息を吐く。（よかった——深海の底に潜って調査に行くからお供に付いてきてとかではなくて……）

この人物は、間延びした語り口調と穏やかな顔つきに騙されがちだが、研究の為なら何処へでも赴きどんな無茶な調査でも研究所員を道連れに断行する鬼所長だ。若いときからのその型破りなスタイルで新たな化精の実態を解明・発見した実績を買われてこの研究所の所長に就いた。

所長の座に就いて少しは収まるかと思われた彼の無茶ぶりは変わることなく……むしろ権力を得て更に酷くなった。これで実績がなければ周囲も反抗できるが彼の調査から見つかる物は多く、誰も強く止められない。

彼の調査・研究に音を上げた研究所員達が所長に泣きながら懇願し、何度も説得した結果——化精の扱いを心得、所長の無茶にも付いていける屈強な調査員を雇う事になった。だが、なかなか条件に

当てはまる人材は見つからなかったので“どこなん団”に適した調査員を集めてくれるようサーライドが依頼した。

「それでね、早速、今日連れてきてくれるんだってえ」

「急ですね……いつ頃来るのですか？」

「さっき着いたんだよ」

「……はあ？」

「今一階にゝいるからゝ一緒に面接しよう」

「………わかりました」

急な展開に驚きながらもサーライドは受諾し、所長と一階へ向かった――

………

王宮“小人の花園”からは楽しげな声が聞こえてくる。

庭の中央に設けられた茶会の席には三人座って談笑している。真っ白なレースをふんだんに使ったテーブルクロスの上に、甘い香りただよう紅茶と茶菓子が並び、各々会話しながら口に運ぶ。そんな三人を囲うように数人控え立つ。

「美味しいですわ……ツェリ義姉様がお菓子はいつも頬が落ちそうになりますわ」

「本当に美味しい、兄上が羨ましいです」

「ふふ、ありがとうございます、フィリス様、アーノルド様。作って

きた甲斐がありますわあ」

ミルクティー色の髪を揺らし、ポツチャリした体型のツエリと呼ばれた女性は持参した菓子を手には微笑んだ。その髪色と体型が相まって自身もお菓子のような雰囲気がある。

「ツエリ義姉様、私のことはフィリスとお呼びください。“様”はいりませんわ……あと半年でお兄様と結婚なさるんですもの。今から呼んでもおかしくありませんわ」

「そうですよ、僕のことアールドとお呼びください」

この国の第二王女と第四王子にお願いされ、ツエリは戸惑いぎみに頷いた。

「……はい。正式に結婚するまでには呼んで見せますわ……それまで混ざると思いますがお許しくださいませ……」

ツエリの控え目な承諾に両殿下は頷いた。

「ふふふ、ツエリ義姉様が結婚なさる頃にはヴァンを落としてみせますわ！私の女性騎士団創設にはヴァンがいなければ！ね、ヘレナ！」

「はい。フィリス様の魅力で迫ればヴァンもいずれ頷きます」

ぱっちり大きく開いた薄い緑色の瞳でフィリスに見つめられ、ヘレナと呼ばれた騎士服を着ている美女が答えた。

「姉上……まだ諦めてなかったのですね。女性騎士団創設は良いとしても、ヴァン獲得は難しいと思いますよ」

「お黙りなさいアールド。諦めたらそこで終わりです。私は自身

を磨き、お兄様以上の魅力でヴァンを落としてみせますわ、見ておいでなさい」

高らかに宣言し、扇をバサツと開き口元を隠すとフィリスはにやつと笑う。

「フィリス様、ぜひお姉さまをあの男所帯から引き離してくださいませ。そしてアレクフォード殿下からもお守りください…私も応援しますわ」

「ツエリ義姉様…私はヴァンを女性騎士団に誘いますがアレク兄様とは離しませんわ…ヴァンもお義姉様とお呼びしたいのです」

「まあツエリ様……」

意見の相違に二人は思わず視線を合わせたまま黙りこむ。

「…姉上方、当人達の気持ちを無視なさっていませんか？」

暫し続いた沈黙に、アーノルドが根本の問題点をあげた時、別方向から声がかかった。

「その通りですね。私とアレクは只の幼なじみです……それ以上でも以下でもない」

「ヴァン姉さま……!」

いつの間にか近くに来て庭の雑草を食む山羊のゴー君の頭を撫で

ている覆面に、ツエリは駆け寄り抱きついた。

「久しぶり。元気そうだなツエリ」

覆面は勢いよく飛び付いてきた妹をなんとなく受け止め、その背を優しく撫でる。

「はい！姉さまこそ新たなお怪我などされていませんか？」

「してないよ。ツエリならわかるだろ？」

その言葉にツエリのミルクティー色の髪の中でひと房紐で編まれた遊色の髪が淡く発光し、ツエリは覆面の全身を見る。

「確かに…お身体に新たな傷は見えませんか」

ツエリは継精者だ。遠視・透視能力を持ち効力は広範囲におよぶ……ので人の内臓まで見ようと思えば見える。因みに覆面もツエリ程ではないが透視能力を使えるので、覆面をしていても周りが見えている。

ツエリが覆面の傷を確認し終え満足そうに頷くと、覆面はツエリと体を離す。そして両殿下に向き直り、ゆっくり腰を曲げ頭を下げた。

「両殿下もお久しぶりです。お変わりありませんか？」

「ええ…ヴァンもちちらへお座りになって。今日こそ女性騎士団入団へ貴女を誘惑してみせますわ」

「それは楽しみですね」

にこやかに言った覆面はツエリを伴い席に着いた。

「ヘレナも久しぶり。相変わらずか？」

「ええ、この通りよ。そっちも相変わらずみたいね」

「ああ騎士団の連中も変わりないよ。まあロバートから聞いているだろうが…」

「まあね……でもあの、口数少ないんだもの、詳細までわからないの」

ヘレナは少し前まで蒼鷹騎士団おおたかに在籍していた女性騎士だ。創設時から所属し、女性騎士同士ヴァンとも息が合い二人で任務をこなす事もあったが、ヘレナの妖艶な美貌と溢れる魅力に任務そっちのけで争奪戦が起き、責任を感じたヘレナは退団した。

以前から女性騎士団創設を目論む王女に声をかけられ、今は王女の近衛騎士を務める。

争奪戦に関わった他の騎士も退団したが、争奪戦勝者——ロバートは未だ蒼鷹騎士団に在籍している。

（ヴァンとヘレナ……やっぱり素敵だわ…私も二人のような凜とした気迫を身に付けたいわ）

フィリスは二人が会話する様子をうつとり見つめる。以前式典の折りにヴァンとヘレナが剣舞を披露した事があり、その見事な舞いに感激したフィリスは以来二人を筆頭にした騎士団創設に意欲を燃やす。

（それに……あんなにキュッと上がったお尻をした女性はそうそういませんわ）

フィリスの視線は二人が話す様子から局所に移る。覆面は座って

いてわかりづらいが、先ほどの歩く姿を思いだし、自然とほほが緩み夢見るような怪しい顔で二人を眺める。

「ホンツ、フィリス様お顔に締まりがありません。お直してください」
周囲に聞こえないような細やかな声でフィリスの侍女セフィーが注意した。セフィーはフィリスの尻フェチを周囲に気取られない様にしていたが……親しい人等にはバレている。

姉の怪しい兆候を確認したアーノルドは、話を変えるため覆面に語りかけた。

「ヴァン、今日も体術を教えてくださいませんか？」
明るい青い瞳を輝かせてアーノルドが覆面に問うと、ヘレナと会話を切り覆面がアーノルドに顔を向ける。

「私でなければ後程お相手させていただきます。ボルトツクやランスも後で合流する予定ですので二人にも声をかけてみましょう」

覆面とボルトツクは王宮に來ると時間があればアーノルドとその侍従ロイスに体術を教えている。城の専属指導者による稽古に飽きたアーノルドが度々頼んでいるのだ。何故かランスもその時一緒に体術を習う。

「はい。よろしく願いします……今二人はどこに？」

「サーライド殿下のいる研究所に所用で行っております」

「ああ、そうなのですか…兄上も一緒に来てくだされば良いのに。」

「出掛ける時に声をかけたのですが、拒まれてしまいましたの」

残念そうなアーノルドとツエリの声に覆面は密かに口角を上げると声をかけた。

「さてどうでしょうね……気が変わっていらしてくださいさるかも知れませんよ」

「だいいいのですが……」

アーノルドが相槌を打ち、ツエリが覆面の顔を見つめる——覆面の下の素顔を。

「ロイス、ヒースも今頃アレクと会議に出席しているが、この後の会談が終われば合流するんだ。会っていくだろ？」

覆面の言葉に今まで微動だにせず側に控え、肩の高さで切り揃えた黒髪に透明度の高い翠色の瞳をした少年が頷いた——

………

サーライドと所長が一階応接室に入ると見知った顔が目に入った。兄の悪友で自身とも古くからの知人であるマイケルだ……傍に控える顔ぶれの中に絶対会いたくなかった人物はいなかったので少しほっとした。

「殿下、久しく御前を離れておりました無礼をお許してください。蒼鷹騎士団副団長マイケル・フォ」

「……悪ふざけはそこまででお願いしますマイケル。むず痒い……いつもの口調で構わない」

「おお、やっぱりな。では早速用件なんだがな」

「聞きました。調査員に使えるそんな人材を集めて連れてきたんでしたね…どうなんですか？使えます？」

「ああ。何せ化精狩り集団だからな」

「はあっ！？狩人ですか？」

「捕まえたてホヤホヤだ。隣国からの流れ者達でな、ヴァンが面倒がつて内緒でこっちで利用しようと拾ってきた。一応この国での面倒事はヒースが処理したからいつでも使えるぞ？」

「そついう問題ではなく…狩人集団なんて危なくて使えませんか」

「あつはつはつは。まあその辺はそちらの舵取り次第だ。こっちで交渉はしたからな、暫くは言うこと聞くぞ……それに捕まえた時里の者に気づかせず、一月で5匹も化精を生け捕りにしていた」

「生け捕り……狩る知識だけではないということですね……」

「ああ。化精の仲買業者も市場も知っていて、それなりの数こなしてたみたいだからな。化精の知識も狩る腕も確かだぜ」

「その捕らえた化精は今どこに？」

「この研究所のファームに入れておいたぜ？後で状態でも確認しとけよ」

「わかりました…しかし…」

更に洩りそうなサーライドにマイケルは最後の利点——ヒースからサーライド攻略時に必ず所長がいる前で最後に言えと命じられていた利点を述べる。

「んで、その集団の頭目がコーマックって名なんだが…猪系の継精

者なんだ」

「継精者？？本当かい？」

それまで静かに言いあいを眺めていた所長が継精者の一言に反応した。

「どこどこ？？会いたいなあ」

「一室に集団ごと詰め込んでいます。お会いになりますか？」

「会って会って」

軽やかな足取りで移動していくマイケル達に続き、言い出したら聞かない所長にうんざりしながらサーライドもその部屋に向かった。

マイケルが扉を開け所長が入室すると、その集団は皆一様に大人しく拘束されていた。

頭目と思われる頭に帽子を被った男がグレンに支えられ集団の一列前に立っている。

「へえ、こんなに数がいれば、頼もしいねえ、調査行き放題だよお」

所長が呑気な声で話す皆、ピクリとも反応しない。

続いてサーライド達が入室し、扉を閉めるとマイケルが話し始めた。

「こいつが頭目で名はコーマック。30歳。隣国で仕事がしにくくなってこっちに来たんだと」

「仕事がしにくい…？」

「…あつちじゃそれなりに敵も作ったからな、そろそろ移ろうと思
って動いたらこの様だ」

サーライドの問いにコーマックは苦々しく答えると、顔を所長に
向けた。

「お前がここの責任者か？不本意だが暫くはここで働いてやるよ…
…身を隠すのにはちょうど良さそうだからな」

「な」にを偉そうに言ってるかな。グレンに負けて賭けにも負けた
奴がなあ」

ピクリと眉間を動かしマイケルを睨んだコーマックだがそれだけ
で、言い返したりはしない。

「いいんじゃない」それくらい度胸があるほうが「ギブアンドテイ
ク」理になってるよ、よし、採用」辞めたくなったら言っ
てね」働き次第で恩賞出すから」物取らないでね」
「所長……」

あまりにも呑気な所長に呆れるが、意外と恩賞の響きに心が動い
たらしい頭目が見てとれサーライドは腹を括った——舵取り次第だ。

「では早速」君の継精力見せてよ」
「ああいいぜ」

その一言で頭目の体が発光し、首筋に紋様が現れ両足が太く大き
な獅子の脚に変化する。

現れた毛ムクジャラな両足にグレンの意識が傾き、皆の視線を集めた一瞬の隙を突き、コーマックは低く身を沈めると水平に跳び、その強力な脚力を発揮しサーライドに飛びかかった。

6話 王宮各所

王宮の執務棟会議室に続く回廊でアレクフォードは足を止めた。柱の影に身を潜めると階下を見渡し、行き交う人々を何とはなしに眺めやる。

物憂げなアレクの隣には会議に同席していたヒースが右目にかけているモノクルを曲げた人差し指の関節で押し上げ位置を直しつつ、主を監視するように控え立つ。

「長かったな……余計な体力を使った……」

会議を終えるなりアレクは誰にも呼び止められないよう早々に退室し、室外に待機していた騎士達を引き連れこれから最も憂鬱な会談場所へ向かう前に、人目に付かない此処で小休止している。

「滅多なことをおっしゃらないでください。まだ人が捌けておりません」

会議室から離れたとはいえ、王宮の廊下でボヤク主をヒースはたしなめ他に人がいないか周りを確認していると、後ろから声をかけられた。

「アレクフォード殿下」

空気を震わす洪い低音で呼ぶ声にアレクは振り向き、その人物を見て知らず頬を緩ませる。

「ジェントー二伯爵」

アレクに声をかけるのはフロイス・フォン・ジェントー二67歳。

先ほどの会議にも出席していた古参の貴族で——アレクが一方的に心の師と仰ぐ人物。

「先日の祭りではお世話になりました。誠にありがとうございます。妻もお礼をしたいと申しております」

「いえ、先日は私も楽しい時間を過ごさせて頂きました。ああいう依頼なら喜んで引き受けますよ」

「そう言つて頂けると嬉しいですね」

フツと柔らかい笑みを浮かべる紳士に対してのみ常になく丁寧な対応をする主にヒースは呆れた視線を送る。先日のジェントー二伯爵からの依頼……というか彼の領民からの依頼で“領主様ご夫婦の成婚50周年記念祭を気づかれぬよう開催する手筈及び警護”を依頼され、アレクは嬉々として受諾した。

「それにしても奇術まで嗜まれるとは、本当に殿下の騎士団にできぬことはございませんね」

「いえ。あの程度、伯爵に褒めていただける程の物ではありません」

アレクは団員達に堅苦しい芸ではなく、万民向けの奇術やら寸劇などを仕込み（奇術はほぼ力業で乗りきり）祭りで披露させ大いに盛り上げた……頼まれてもないのに。

お蔭で“どこなん団”の評判は上がったが騎士団としての格は落ちた気がする。アレクは自分の好みで依頼を請ける為様々な——本来騎士団では請けない——仕事をこなす内に団員の経験値は増した。騎士としての経験かは別として。

「恐れながら民達も殿下の温かさに触れ、すっかり心酔したようで

して。今度は我等がおもてなしさせていただきます、是非ともまた皆さんでお立ち寄りください」

「ええ、そうさせていただきます」

和やかにアレクとジェントー二伯爵が話していると、階下から人々がざわめき立つ喧騒が聞こえてくる。

「何かあったのでしょうか」

ヒースが階下に顔を覗かせると、皆一様に同じ方向に顔を向け、驚いた顔で口々に話し込む姿が見える。中にはヒツと軽い悲鳴をあげ、息をのみ道を開ける者もいた。

「何の騒ぎだ？」

アレクがヒースに尋ねると何かを発見したらしいヒースがおもむろに一点を指差す。

アレクが手摺に身を寄せその方向に目をやると、顔と膝下以外は黄色い布で巻かれ、ミノムシのように拘束された橙色を帯びた金髪を揺らす男性を二人の騎士が丁寧に運ぶ姿がある。

見間違いでなければ、自分の弟がランスロットとボルトックに運ばれている。せめてもの情けか、顔を伏せた状態でサーライドを担ぐ二人は周囲の喧騒を気にせず真っ直ぐ庭に向かっていているようだ…
…間違いない。

「ここにいましたか、団長」

階下の様子に一瞬呆然とし、次に沸き上がった笑いを噛み殺し損ね口元が引きつり微妙な顔をするアレクに、王宮仕様の口調でマイ

ケルが声をかけた。

「ヴァンの仕業か？」

「はい。責は自分に問われるから思う存分憂さ晴らしをしろと頭目をけしかけたようで」

「それで出発時は馬車に乗っていたのか…」

「まーそうみたいですな」

「…流石にやりすぎですよ…」

明らかにこの状況を愉しんでいる団のトップ二人に、全く表情を変えずにヒースが呆れた声で呟く。

「本当に楽しい団員達ですな、殿下」

その様子を見守っていたジェントー二伯爵がゆつたりと微笑み告げる——その笑みにアレクは肩をすくめて見せると苦笑を返した。

「はい。目が離せません…ヒース、後でツエリノアにサムノイラ産の花茶を贈っておいてくれ…前々から頼まれていたんだが詫びを兼ねて茶菓子も添えておくか」

「承知しました…」

「では伯爵、用事が増えたようなので失礼させていただきます。また今度ゆつくりお会いしましょう」

「ええ。お時間いただきありがとうございました」

アレクは伯爵に一礼すると歩みだす。

軍人らしく実用的に鍛えられた筋肉を纏い、姿勢正しく長い足で

歩く姿は正しく貴公子然とし見るものをひきつける。スツキリとした輪郭に高い鼻梁、深緑の瞳は細められ唇は弧を描き愉しげな笑みを刻む。

（サーライドに感謝だな…ヴァンに一つ貸しが出来る……俺も覚悟を決めるか）

弟の災難と尊敬する伯爵に癒されたいらしいアレクは腹を括り、苦手な兄と一戦交えるべく会談場所へと向かった――

……………
（何故こうなったんだ…否、あの人が義姉になる限り抜け出せないんだろうな…ツエリは傍にいて欲しい……けどあの人は嫌だ）

サーライドは王宮の庭へ運ばれながらこれまでの経緯を思い返す――

頭目コーマックが継精力を発現した瞬間サーライドは飛びかかられ押し倒された。頭目を抑えようと動きだすマイケル達の目に入ったのは黄色い布――馴染み深いそれにマイケル達はピタリと静止する。

周囲が啞然とする中、コーマックは伏せたサーライドの上腕に布を通すと、くるとサーライドを回転させ布で巻いていく。その脚力を利用して素早く転がされるのであちこちに打ち身ができてしまった…

「よしっ、こんなもんだろ」

「やりましたね！頭目」

「流石！」

「王子なんて軽いもんすね」

コーマックがサーライドを布で腕から膝下まで巻き終えると、それまで大人しく拘束されていた集団が口々に頭目を誉め称え歓声をあげる。

その様子を一瞥し、マイケルが黄色いミノムシ状態のサーライドに歩み寄るとコーマックに尋ねた。

「これは何のつもりだ？」

「察しはついてんだろ？止めなかったしな」

「まあな……」

問いの答えはマイケルが予想していた通りのものだったので肩をすくめて頷く。

「あの覆面野郎に乗ってやったんだ、責めはアイツにいくんだろ？」

団舎から研究所に向かう道中、覆面は馬車の中で見張りの任に就きコーマックに近づくと“第三王子ぐるぐる巻き計画”を持ちかけてきた――曰く“責めは私にくるから、その鬱憤晴らしたくないか？”と。

訝しげなコーマックに“王子を捕まえられるなんてこれっきりだぞ？この布を使えば私が仕向けた証拠になるしな”と更に言い含め、おもむろに黄色い布をコーマックに持たせる。

同乗している狩人集団達にも邪魔しないよう念を押すと研究所に到着する直前、コーマックに打たれた縄を弛めて出ていった。

「やったなヴァン」「やりましたわねえ」「やっぱりっすね」「あらっ？」

布で巻かれるこの国の第三王子サーライドを遠巻きに見守り、口々に感想を言う一同は誰も助け出そうとしない——所長でさえ。

「この手だったか……」

「賭けは俺の勝ちだな」

「また負けた……絶対ツェリさん経由だと思ったのに」

「酒奢れよ？」

賭けの結果にマイケルが勝ち誇り賞品を要求する。そんな団員達にコーマックは覆面からの伝言を伝える。

「成功したらこの間抜けな姿のまま王宮に連れてこいだとよ」

グレンに負け氣力を失ったかに思えた彼が先程威勢を取り戻していたのはこの事が控えていたからだろう。スツキリしたコーマックの瞳には生氣が戻り生き生きと輝いてる——そんな彼の足を大きく開いた瞳で見つめるグレンの表情も同様に。

「わかった……連れて行っても構いませんか？所長」

「うーん、面接も終わったからねーいいよー」

「……止めてくださいよ……所長」

穏やかな笑みを称えながら血も涙もない一言を放つ所長にサーライドは目を回し苦しい息の中訴えてみる……叶えられる望みは薄いと知りながら——

（確かに俺は油断していたかもしれないが普通犯罪を犯した者達を使うか？）

——今までの経緯を思い返しサーライドは担がれながらも溜め息を吐く。

「まあ殿下…そう落ち込まないでください」

「そうつすよ…あの人の罨から抜けるのは本当に大変なんすから」

「ランス…この前のは別だろ」

ランスとボルトックが一つの抵抗もせず、ぐったりして運ばれるサーライドを慰める。グレンは頭目に付き添い研究所に残った…主に毛の処方で。

（恥ずかしい…暫く王宮に来れないな）

王宮に入ってから突き刺さる周囲の視線を感じながら羞恥心でいっぱいになる——こんな事なら腹を括ってツエリに誘われた時王宮に行けば良かった…サーライドは後悔の念に包まれた。

………

「ああ、来たみたいだ」

「えっ？」

談笑していた覆面達の耳に喧騒が聞こえてくる。

「まあ、何かあったのかしら」

その喧騒はどんどん近づいて来ているのか、音が徐々に大きく響く。一同がそちらを向くと黄色い塊を担いだランスとボルトックが見えた。

「サーライド様!？」

一番に黄色い塊の正体に気づいたツエリが驚いて席を立ち、慌て

て駆け寄る。

「また逃げられなかったんですね兄上…」

「流石ですわヴァン！自らの手を使わずともお兄様を捕らえてしま
うとは」

自分達の兄が無惨な姿で現れたというのに、両殿下は心配する気
配もなく、寧ろ犯人を褒める。

「ふふつまだやってるのね？ヴァン……さすがに少し可哀想よ？」

「今回は予想できた筈だからな。抜かった殿下の手落ちだよ」

ヘレナが可笑しそうに笑って同情するが、覆面は殿下の落ち度だ
と言いのけ立ち上がり、黄色いミノムシご一行に近寄る。

「ありがとう、ランス、ボルトック。悪いな」

「いや…賭けのネタにさせてもらったからいいさ」

「酒奢ってください……」

「ああ、マイケルの一人勝ちか…私が奢っておくよ。二人にもな
「本当に？やった！！」

事前に断りもなく、覆面の犯行に巻き込まれた形の二人に詫びる。
そして覆面は柔らかい芝の上に降ろされ、ツエリに介抱されている
サーライドに向き直る。

「殿下——今回はきっちり逃げてくださるものと思っていましたよ
？」

「…もう本当にやめてください…」

憔悴し、項垂れながらもサーライドは将来の義姉に願う。

「陛下に許可は頂きましたから、続けさせていただきます」

覆面はサーライドの脇にしゃがみ込み視線を合わせると、王子の願いを断った。

7話 花園茶会

ツエリの手によりサーライドは布から解放され、茶会の席に着く。紅茶を一口啜り、甘い菓子を食べてようやく心地ついたようだ。

「もう！姉さま、やりすぎですわあ！」

サーライドの介抱を終えたツエリはプンブン膨れ、覆面の胸を大して力を込めていない拳でポスポス叩く。覆面はその責めを抵抗せずなすがまま、甘んじて受けている。

「そう怒るなツエリ。私は昔から可愛い妹を任せる人は、何をにおいても逃走・回避能力を備えた方と決めているんだ。陛下もサーライド殿下を鍛える事を認めてくだされたしな」

覆面は胸を叩かれながらツエリの頭を宥めるように優しく撫で、膨れた頬を指の背で突つつく。

端から見れば恋人に構われない男がわざと怒らせ仕掛けた馬鹿馬鹿しい痴話喧嘩か、過保護な兄が妹に怒られている様だが、二人は歴とした血の繋がる姉妹である。

「だから手加減はしません……今回はわかりやすかったと思うんですがね、殿下？」

覆面がツエリにかける声より一つ音階を下げサーライドに話しかける。

「……そうですね……ご期待に添えず申し訳ない……」
色々言いたいことはあるが、もう口答える気力すらサーライドには無かった。

「確かに陛下から許可は頂いておりますが、過ぎればお姉さまが咎められますわ！お気をつけになってくださいね」

「わかった……もう少しコソコソやるよ」

叩いていた拳を止め、正確に覆面の瞳をじっと見つめるツェリに注意され、覆面は軽く頷く。

「ツェリ…気にするのはソコなのか……」

婚約者である自身より、姉の身を心配するツェリにサーライドは虚しく問うが、哀れな彼の声は婚約者に届かなかった。

…………… — あれは4ヶ月前、サーライドとツェリノアの結婚が正式に決まり、内輪の親族だけで挨拶を兼ねた披露目の席で起きた —

内輪で人数が少ないとはいえ、王族が出席する為警備も厚く豪勢に開かれたパーティー。その日も主役の姉であるにも関わらず、覆面はドレスではなく騎士団の正装で現れた…祝い事の席仕様らしい色とりどりの斑模様の布を頭部に巻いている…鮮やか過ぎて目が痛むほどだった。

開始から時間が経ち、酔いが回り空気も和らいだ頃覆面は陛下の御前にて跪くと、請願した。

「まことに恐縮でございますが、陛下にお願い申し上げた事があります」

「どうかしたのか？改まって。お前が私に願うとは珍しいな…言うてみる」

「はい。私は昔から妹の結婚相手に求める譲れない条件がただ一つございます。その条件とは、どんな事態に陥ろうとも解決、もしくは回避し逃げた先でも生活できる能力を備えている事です」

「ふむ。サーライドにとつては厳しいな…あいつは研究以外能がない…願い事とはこの婚約の破棄か？」

「いいえ…願い事とはサーライド殿下に逃走・回避能力を身に付けていただく為私にサーライド殿下を鍛える許可を賜りたいのです」
婚約破棄の言葉に一瞬周囲が静まるが、次に覆面が発した願を聴いた国王の笑い声が静寂を破る。

「あつはつはつは…そうかそうか。いいぞ、何をしても構わん。思う存分鍛えてやれ」

日頃から研究に明け暮れ滅多に身体を動かさない第三王子にとっては良い機会だとばかりに国王は許可を与えた。

それ以来あらゆる手段で覆面はサーライドを追いつめる。お蔭で簡易的な罠なら避けられる様になったが、今度は人まで使いたしたので予想がつかずたまったものではない。

（だから関わりたくないんだ…）

結婚式までと期限付きなのが唯一の救いだが、徐々に鍛え方が容赦なくなっている…これからは更に油断できない。覆面の手に回った狩人集団が身近にいるのだから——サーライドは今後を憂いて頭が痛くなった…帰ったらコーマックとよく話し合おうと心に刻

む。

「兄上は化精の調査で危険な場所も行かれるのでしょうか？危機回避能力は必要です。僕も手伝いますから頑張りましょう！」

兄が気落ちしていると察したアーノルドが励まそうとするが、サーライドは頑張りたくはないので逆効果だ。

とはいえ、サーライドからその上司の無茶な調査っぷりを散々聞かされ心配しているアーノルドの気遣いは嬉しい……。で少し氣力が回復した。せめてこれ以上恥ずかしい姿は見せまい。

サーライドはアーノルドに頷くと、椅子にもたれ掛かっていた姿勢を正し覆面に向き直る。

「依頼していた化精調査に使える人材の件ですが……確かに彼らなら役に立ちます。ありがとうございます」

「お役にたてれば光栄です……。彼らが加わった分、調査時間が減れば鍛練の時間がとれます。お付き合いくださいね」

覆面は実に爽やかにサーライドを追いつめた。

「……化精の調査はある程度同行しますので……今以上は難しいかと……」
サーライドは明らかに視線を泳がせ、逃げ口上を述べて紅茶を啜る……。これ以上追い詰めると、流石にやり過ぎか……。覆面は今回はここらが潮時と悟り、話題を変える。

「そうですか。では今まで通りにします……。化精は未だ詳細を掴めぬものですし、調査は慎重に行われるのでしょうか……」

「はい。それはもう。ご存知の通り古き時代では神聖視され、研究するなどもっての他でしたから――」

得意分野の話振られたサーライドは嬉々として語りだす。もう鍛練の話に戻したくはないのも理由だろうが、夢中になっているものについて語る顔は生き生きとしている。

そんなサーライドとその様子を愛しそうに見つめるツエリを覆面は眺める。

この二人の結婚に不満はないが不安があった——結婚後は第三王子という高い身分と王位継承権を捨て、公爵を名乗り研究者として生きると宣言し、放任主義の国王にも認められたが、生まれを変えすることは出来ない。王族出身の研究者と貴族のお嬢様夫婦なんて世間知らずの権化でイイ鴨だ……いくら王家や実家の力があるとはいえない不安が残る。本人達に能力があるに越したことはないので覆面は王子を鍛えることにした……まあ多少可愛い妹を奪う輩に憎しみを込めてしまうのはご愛敬だ。

「化精つて不思議ですわねえ……説明されてもやはり解りませんわ」
覆面が意識を逸らしていた間、黙って兄の説明を聴いていたフィリスが早々に理解を諦めたらしい。

「……わかっていない事実の方が多いからね……仕方ないよ」
話に水をさされたサーライドはそれまでの熱に浮かされた勢いが衰え、再び椅子に深く身を預けた。

「想像以上に大変なんですネ……」
兄の説明を懸命に理解しようと聴いていたアーノルドも姉と同様らしい。

動植物や物質で特有の魔力・能力・意思を持つものを総称して“化精”と呼ぶ。

化精ごとに特徴があり、力の具現化は様々な様相をみせる。

例えば、元は何処にでもある普通のペンが突然浮き、インクに浸さずとも文字を書き綴る。今までは普通に咲いていた花木が独りで移動し言葉を伝えるなど、何かの切っ掛けで化精に变じ力を発現させる。その際姿も少し変わる。

化精は程度の差はあれど思考力を持ち、時には気に入った人間などに自身の力を貸し与える。その力を“恩恵”と称し古くは神聖なものとして奉っていた。万物に宿る化精の実態は解明されてないの
で、国によっては邪悪なものとし、排してきた国もある。

化精の中でも元素等に由来する強力な力を持ち、人の姿になれる化精を“主”と呼ぶ。

明瞭な意思を持つ“主”達は人を寄せ付けず姿を見せないが、その恩恵は“魔法”という形で現れている。属する系統の主と相性があるのか、人により使用できる魔法は異なり、全系統使える人もいれば一系統だけ突出して使える人もいる。

魔力の源とも謂われ、利用価値のある主及び化精の調査は各国で行われ“主”について記録されている書物もあるが、どこまでが真実か確かめようもないまま現在に至る。

化精は何処にでも存在するが、数はそれほど多くない。また、気に入った人間に力を貸すが、突然恩恵を止める場合もある。

棲みか・性格も様々な彼らの、寿命や発現の切っ掛けは知れず、“主”達が作ったと考えられている宝具もあるが詳しく解明されて

いない。

そんな奇妙な隣人達をサーライドは研究・調査している。

「頼もしい調査員が来てくれたから、調査も捗ると思う……所長次第だけどね。心配しなくていいよ、アーノルド」

「はい、兄上……その頼もしい調査員達はどの様な方なのですか？
弟に心配かけまいと告げた一言に思わぬ切り返しがくる。

（本当の事を話すと、また心配かけそうだが……さてどうするか）

「国境付近の山で化精狩りをしていた20人ほどの集団で、頭目は
継精者です」

思案して答えに詰まるサーライドより先に覆面が簡潔に答えた。
隠してもいずれ判ることに隠す意味はない。説明しておいた方が後
々混乱しない。

「狩人集団？……確かに調査には頼もしそうですが……」
「まあ、継精者とは珍しいですね」

案の定首を傾げ、兄に訝しげな視線を送るアーノルドの横からフ
イリスが発した言にサーライドは弁明の機会を得た。

「猪系の継精者なんだ。両足が獅子の足に変わってとても強い脚力がある……話のわかる人物でね、自分達の立場も弁えているし、上手く付き合えるよ」

継精者とは化精が先祖にいて、その力（継精力）を継ぐ者達。

人の姿をとれるほどの強い力を持つ化精の力を完全に継ぐ訳ではなく、同じ血をひく一族の中でも発現する人は稀で現れ方もまちまち。継精者は代を経るほど減っていく場合もある。継精者についても詳しい事は説明されていない。

「ふふっ大丈夫ですわアーノルド様。いざとなったら姉さま仕込みの技を駆使して見事逃げ切ってみせますわ。お任せください」
自身も継精者でサーライドの助手を務めるツェリが自信ありげに請け負った。

「はい。義姉上宜しくお願いします……では一息つけましたし、兄上もこの機に体術を磨きましよう！お願いしますヴァン、ボルトツク」

「はい。殿下」

座っているのに飽きたらしいアーノルドが立ち上がり茶会はお開きとなった。

7話 花園茶会（後書き）

一気に説明しましたがわかりづらいですよね…すみません。
化精のイメージとしては“八百万の神＋九十九神＋ α ”です。詰め込んでみました。神様ではなく身近な存在っぽくしたいのですが…
伝えられるか疑問ですね…

8話 会談と兄

―アレは黒い靄のようだった―

人々が活動し始める朝早い時間。

都の表門へ続く大路から少し離れた丘の上で、とある一行が小休止している。異国の軍服を身に着け武装した物々しい雰囲気の一行を恐れ、道行く人々は誰も丘に近寄らない。

一行は故国からの命で使節団としてこの地を訪れた。これから彼等は眼下に広がる古き都に住む王子達と面会し、故国で起きている凶事を解決するため協力を仰ぐ。

使節団の長―帝国軍第五部隊長を務めるのは、ふわふわと羽毛の様に柔らかそうな短く白い巻き髪と猫を思わせる金茶の瞳を持つ青年将校。

彼は鋭い眼差しで都を睨みながら、これから挑む任務を想う。

―この国ならば…アレらをどうにか出来るだろうか―

彼の故郷ゲネルディバイ帝国ラバトニア地方。山脈が連なり強い風が吹くその地は、強風が山肌を削って出来た路を雨水が川となつて拡げ、年月を経て大小の渓谷を造った。帝国の片隅に位置し、大きな街に道も繋がらない辺鄙な場所にある。その上、天然の要塞に護られたこの地に来る商人は少なく、物資の流通は月に一・二度しかない。

住人達は風と雨が育む山と川の恵みで生活し、時折来る商人に家

畜から取れる毛や皮を売り、長閑に暮らす。

そんな彼の故郷で今、異変が起きている。

その異変は半年前に突然起きた。溪谷の何処かより次々と湯水のように黒い化けモノが現れ、暴れはじめたのだ。

黒いモノ達は1体として同じ姿ではなく大きさもバラバラ。共通点は“全身が黒く、周りにある物を見境なく破壊する”という点のみ。

彼がその報せを聞き、軍隊を引き連れ久しぶりに生まれ故郷へ戻ると、穏やかな記憶しかないその地は様変わりしていた。美しい自然は荒らされ、野性動物の姿はどこにもない。

住人達は争い事に慣れていないが、幸い被害は少なく籠城する事で死者もださず何とか持ちこたえていた。

軍隊が一時黒いモノ達を一掃し、住人達を救出できた。だが、黒いモノ達はいくら倒しても間をおかずに出現し、近隣の街にまで現れ被害は広がるばかり。

援軍も到着したが追い付かず、軍人達は疲弊し遂には死傷者も出てしまった。

事態を把握した国の上層部も動くが、黒いモノ達が溢れる原因すら解らず、解決策は見つからない。

自国だけでは対処できないと判断した皇帝があらゆる知識を持つとされるこのキノード王国に助けを求め、現場の詳細を一番知る彼に使いを命じた。

（あの次々と現れる黒いモノ―“万天”に打てる手立てがこの国にあるのだろうか…）

―古き都を睨む彼の表情は硬く強張っていた。

「初めてお目にかかります。私はゲネルディバイ帝国軍第五部隊長
エリアス・グイロウ・ラバトニアと申します。此度の席を設けて頂
き心より深く御礼申し上げます」

会談場所―使者を迎える謁見室では異国の軍服を着たまだ20代
であるう年若い男性が、頭を下げ跪いている。

「遠路はるばるご苦労。して、貴国からの書状にしたためられてい
た件―万天討伐演習とはどういった事でしょうか」

贅を凝らした豪華な椅子に座り口を開いたのは、橙色を帯びた金
髪を揺らし藍色の瞳で使者エリアスを見下ろす第一王子エルノワ
ード。その脇には第二王子アレクフオードが控えている。

両殿下は王族の証である、まるで朝焼けの空のような橙色を帯び
た金の髪をもち、共に軍の要職に就いている為体格も良く似通って
いる―その瞳に宿す色と、浮かべる表情以外は。

「誠にお恥ずかしい事ですが、我が国では近年万天による被害が増
え看過できない状況にまで陥っております。そこで数多の知識をも
ち、万天討伐の技術にも精通していると名高い貴国の優れた知恵と
技を我が軍にご教示いただきとうございます」

「…万天被害の増加とは、さぞ心労絶えぬ事でしよう。万天は未だ詳しく生態のわからぬモノ。放置しておけば何が起こるかわからない…」

「はい。民らが不安な夜を過ごす事により、一層万天の力を強めているのかも知れませんが…早期解決の為に是非とも貴国の知恵と—
—どんなに難解な依頼でもこなされると評判高き蒼鷹騎士団おたかの胸を拝借できれば幸いに存じます」

突然蒼鷹騎士団の名を出され、アレクフォードは眉を上げた。

自分がこの会談の席に喚ばれた理由が今わかった。他国との交渉——国から国への要求に答えるなら国を代表する官吏を通すのが通例。

今回は軍関連の用向きなので元帥の地位に就く兄1人が立ち会えば充分なはず。わざわざアレクを喚ぶ意味がわからなかったが、今の発言から推測すると国としての知恵を借りる許可を王太子である兄から得て、実行部隊としてアレクフォードの騎士団に万天討伐演習を依頼したいのだろう。帝国からの書状を直接見ず、ただ兄から会談に出席するよう言われていたアレクは面喰らった。

そんなアレクを兄エルノワードは、いつも笑みを絶やさず弧を描く目を更に細め、実に愉しげに見ている。

「…貴国とは親しくさせて頂いてます。国王からも最大限の配慮を、と言付かってますので喜んでお受けしましょう」

「寛大なお言葉、誠にありがたく心より深く感謝いたします」

「いいえ…万天の生態を調べるいい機会ですから、どうぞお気になさらず。それでは子細はまた後程決めましょう。今宵は充分旅の疲れを癒して下さい」

その言葉にエリ阿斯は一礼すると退室した。

エリアスの姿が見えなくなるとエルノワードは使用人達も退室させ、サッサと逃げ出そうと気配を消し自分に背を向けているアレクフォードに声をかける。

「わかっていますね？アレクフォード」

「…何をですか、兄上」

逃亡を諦め一部の隙もないよう態勢を整えると、アレクフォードは兄の底知れない深い湖のような眼と視線を合わせる。

「先程の使者、ラバトニア卿は何か隠していました。万天が増加しているのは事実でしょうが、演習相手に軍ではなく貴方の騎士団を指名するとはおかしな話です……軍の方が数も多く優秀。“どこなん団”などと可愛いらしい名で親しまれている騎士団より適任でしょうに」

「…そうですね…」

どことなく騎士団を非難しているともとれる言だが、ここで刃向かうとニコやかな笑顔のままつらつらと理屈を交え説教されるのは目に見えているので無駄な口答えはしない。

「まあ貴方の騎士団で丁度いいのでしょう……ですが、後れをとることは許しません。軍から必要な人でも物でも貸します。必ず詳

細を暴いてきなさい」

いつもの通り爽やかな笑顔で命じられた。どんな場合でもニコやかな笑顔で難題を突きつけてくる兄の事がアレクはとても苦手だ。無表情なヒースとはまた違った迫力がある。

「皇帝の牙」と誉れ高い騎士が自ら出向き頭を下げるほどの何かが起きているのでしょう。そのつもりで充分準備しておきなさい」

「…承知しました」

硬い声でアレクフォードは承諾し、速やかに退室する。気配が消え暫くすると、エルノワードは影のように控える自分の近衛騎士に話しかけた。

「相変わらず弄り甲斐のある弟です…そうは思いませんか？」

「そうですね」

もとよりこの会談はアレクフォードのみと行うよう帝国に乞われていたのだが、それを知ったエルノワードが割り込み、同席出来るよう手配した——ゲネルディバイ帝国が何を考えアレクを指名したのか見定める為に。

本来万天はいつ何処に発生するか予測がつかず、都合よく用意できはしない。つまり演習の機会が設けられる程大量に発生している場所があるという事だ。切羽詰まった帝国は面目を保つ為に第二王子の道楽組織と見なされる騎士団を利用し、演習という共同作業中起こった不遇の事態を解決できずアレクが救援を求めたという形でキノード王国に介入させたいのだろう。あわよくばアレクを人質にできると考えて——だが、甘い。黙って首に縄をうたれるような連中ではない。

「…今回貴方の義妹はどう動きますかね？」

「彼女なら巧くやるでしょうが……手段はわかりませんね。気儘なところがありますし」

「それは面白そうですね」

笑みをこぼし立ち上がると、エルノワードも騎士を伴い退室した。

「今回はまともな内容だったな」

「ええ。いつもよりは耐えていましたね」

「震えてなかったしな」

会談場所を出たアレク一行は足早に廊下を進みながら先程の会談について話すアレクに対し、ヒースとマイケルは兄を前にしてアレクがとった行動について感想を言う。

「お前ら……からかうなよ」

「それで、いかが致しますか？只の演習で無いことは明白。軍に応援要請、騎士団員の配分、日程の取り決めなどやるべき事は山のようにあります」

アレクの愚痴をサラツと流し、ヒースはこれからやるべき仕事を口にし、指示を仰ぐ。

「兄上は暴けと言ってたな……精々見つからないよう動くしかないか」

「厄介だな……ランスを連れて来たのは失敗だったか？」

「流石に……ランスは関係ないでしょう……きっと」

厄介な出来事は皆ランスのせいだと唸るマイケルをヒースは否定

する——そこまで酷くはないはずだ。

「ラバトニア卿と言えば“白騎士”“皇帝の牙”とか字が色々あったな……情報を集め次第、騎士団全員で向かう。軍から何人か連れていくからそのつもりで。ヒースはゲネルディバイとの手続きを頼む」

「承知しました。では早速」

「ああ。そのあとヴァン達と合流して団舎へ戻り、態勢を整えたら行くぞ。マイケル、騎士団員の召集を宜しく」

「おう」

「サッサと片付けて、サーライドとツェリノアの式までに帰ってくるぞ……間に合わせないとヴァンが暴れる」

ヒースとマイケルに指示を出すと、アレクフォードは軍部の手配をする為歩みを進めた。

9話 訓練所

小人の花園では茶会がお開きとなり、一同は体術稽古の為王宮外縁にある訓練所へ移動した。

各種の武器が揃い隊別に時間を割り振り使用している訓練所では、軍兵士達が常時己の技術向上に励む。

覆面達は彼等の邪魔にならないよう隅で体術を教えることにしたが、やはり王子が気になるらしい軍人達は、ちらちらと視線を寄越してくるので残念ながら気遣いの意味はない。

覆面とボルトックが教官となり、ランス・アーノルド・ロイスに体術を指導する。

掴みかかろうとランスが覆面に両手を伸ばした瞬間、疎かになった足下を覆面が払い、体勢を崩したランスを投げ飛ばす……ランスは教わるというよりは体術をかけられる役だ。実際技をかけられた方が覚えるぞと言い含められた為に自ら申し込んだ…。

そんな彼らをフィリス達は訓練所内にある日除けされた小空間から見守っていた。なるべく目立たぬよう気配を消し、休憩用に設置してある木の長椅子にゆったり座る。

（あああん！素敵ですわ〜）膝を曲げて腰を低くした時わかるその理想的な丸み……足払いを仕掛ける瞬間力みキュツと締まって色気を増しますの……素敵ですわ〜）

離れた位置から覆面の動きを凝視しているフィリスの頬は赤く染まり、小さな口は開きっぱなしで今にも涎を垂らしそうだ。

そんなだらしのない表情の彼女に侍女セフィーが声をかけるが聞こ

えていない……思考を飛ばしている。

（どうしよう……確かにヴァン様のお尻は素晴らしいですが……フィリス様のお尻愛好に拍車をかけるだけだわ……何とかしないと）

フィリスを立派な淑女に育てようと日々努力するセフィーは悶々と悩む。

王女のお尻愛はヴァンとヘレナが切っ掛けなので今のところ女性のお尻に注目しているが、いつか男性のお尻にも熱をあげるのではとヒヤヒヤしている。

覆面に関わると必然的に鍛え抜かれた騎士団の男性と接する機会も増える為、時間の問題かもしれない。

それぞれ思考を飛ばす主従二人の横では、ぐったりした様子のサーライドがいる。始めこそアーノルドの手前、稽古に参加していたが早々に切り上げ婚約者の元へ戻った。

「ツエリ……ヴァンさんの逃走稽古、もう少し何とかならないか？」

「うーん、難しいですわ。姉さまは一度決めたらやり遂げます。合格点に至れば止めると思いますけど……度々仕掛けてくるかもしれませんわ……ねえ？ヘレナ」

「そうですね。納得するまでは続けますね……ふふっ殿下、ヴァンは無駄な事には一切動きませんよ？乗りきれば見直してくれるかも。女性の願いに応えてくれる男性は少ないものですし望みはあります」

「……努力してみます……」

華のように魅力的な笑顔で励まされては応えるしかない。意地でも逃走力を身に付けなければ、心底覆面を信用している二人の笑顔は二度と向けられなくなる——あと半年が正念場かもしれない。

一応王族として幼い頃より最低限鍛えてきたが、覆面とは旧知の仲……年上のあの人に弱点は全て把握されている。

結婚してからも長い攻防が続くならば、初手から躰いている場合ではない。戦いは始まったばかりだ——気長にやろっ、いざとなったらツェリと逃げればいい。

そう腹を括ったサーライドだが、先程から送られているムサイ男達の鋭い視線に気付いていない。男ばかりの訓練所で、見せつけるかの様に華やかな女性達に囲まれているサーライドを大多数が恨めしげに刺々しく見ているのに。いくら王子といえど空気を読めないと余計な敵を作る——覆面に手を貸す者がまた増えた。

「こちらにいらしたのですね」

「まあ、マルティナ！」

「こんにちはツェリ。ヴァンがこちらに來ていると耳にしたのだけど」

「あちらにいますわ、呼んできますね！」

お姉さまと高い声で呼びながらツェリが覆面に手を振る。その呼び声を聞き覆面が休憩所へ歩き出した。

呼び声に応じた覆面を軍人達は訝しげに首を傾げて見やる。「男だろ?」「いや女らしいぞ?」などと疑問を口に出している。

「ヴァン、頼まれていた本持ってきたわ」

「ありがとうマルティナ。流石に早いな」

「どういたしまして…面白かったわ」

覆面に本を渡し、淡々と話す眼鏡をかけた女性は司書のマルティナ・フォン・ゼフェール嬢。赤茶の長い髪をキツチリ隙なく編み込み、後で一纏めに固めている。氷に似た薄青色の瞳は、覆面の誉め言葉にも動じず極端に瞬きも少ない。

「異国の本を読むのは楽しいもの。もつと持ってきてね…」

細く小さな声で覆面に願う内容は楽しげなのに、とても儚げである。

「ああ。楽しみにしてくれて私も嬉しいよ」

「お姉さま、何の本です？」

「これは“万天”について書かれた本らしいんだが…古語で記されていてな。マルティナに訳して貰ったんだ」

「万天ですか…」

内容を訊いたツェリがふと、隣のサーライドを見ると目が興味津々に輝いている。

「万天についてとは、何かありましたか？」

「いえ……この前依頼で討伐したので少し気になって」

万天とは“全身が黒く、見境なく全てを破壊するモノ”の事。どんな場所にも発生し深刻な被害をもたらす。

前触れもなく発生したかと思えば、突然消え失せている場合もある。基本的に力業で倒す方法以外対処のしようがない。

永く神聖視されていた化精に対し万天はどの国でも邪悪なモノとされている。“様々な能力を持ち、古くから生きている”という共通項から化精と万天は同種のモノであると主張する国もあるが、同種であるか否か確定できるほど生態が解明されていない。

その為化精と万天の調査は同じ機関が研究している。

万天は一定以上損傷し、倒されると黒い靄のようになり消えていく為遺骸も残らず、生け捕り出来ても荒い気性のため暴れ続け、自ら損傷を増やし消えていく。

化精以上に謎が多く、厄介なモノ達で、どの国でも悩みの種である。

化精と万天を同種と見なす国では化精の血を引く継精者も、いつか万天の様に狂いだすかもしれないと怖れられ風当たりが強い。

「化精と万天をどう思われます？サーライド殿下。同種の可能性は？」

「何とも言えません……キノード王国の古い資料に化精と万天が混合されて記されているものもあります」

「化精も万天も解明されていない事ばかりですもの。研究し甲斐がありますわ。サーライド様、調査研究頑張りましょうね！」

「……そうだな」

難題に挑むパートナーの息は合っているようだ。微笑んで見つめ合う婚約者同士が醸し出す甘い雰囲気包まれ和やかな空気になる……少々気恥ずかしくて居た堪れない。

「では、私はこれで失礼します。仕事を抜けてきましたので……」

「そうか、ありがとうマルティナ。また今度ゆっくり話そう」

覆面に頷き、一礼するとマルティナは訓練所を出ていった。

「ヴァンさんは今までも異国の本を彼女に？」

「はい。彼女は大の本好きで、書物の精と渾名されるほど様々な本を知っています。語学にも長けているので、よく翻訳や調べものを頼んでいます。そのお礼といってはなんですが、任務で赴いた地で調達した珍しい本を贈ると喜んでくれますね」

「…その本少し見せていただいても？」

「どうぞ……私はもう少し鍛練して来ます」

“鍛練”の声をハッキリ発音し、本を手渡すとアーノルド達の元へ去っていく。

——終始無言だったフィリスは、会話の間中自分の欲望と戦っていた。

手を伸ばせば触れられる距離にある覆面の尻を目で追い必死に我慢していたが、堪えられずそろりと手を伸ばそうとして、察したセフィーに手を抑えられた——

暫し覆面から受け取った本をパラパラと読むサーライドは驚いたように目を見開いた。

この本は万天と化精の発生について記された異国のもの——異国の古語で内容を記され、サーライドでも知らぬ記述がある為自身もいつか読みたいと思っていた本だが、入手も訳も難しくほぼ諦めていたというのに。

（あの人はどうやって手に入れたんだ？それにこの訳が正しいとし

たら…古語と専門用語に精通するマルティナ嬢の知識も相当なものだ）

サーライドはまた一つ義姉になる人の底知れなさを実感した。

（それにしても万天を倒して、ちょっと気になったただけではここまですぐ調べない筈…あの人本当は何を調べてるんだ？）

思考回路に意識を沈ませ本に集中していると、訓練所が俄に騒がしくなった。

「まあ……アレクフォード殿下」

ツエリが訓練所の入り口に立ち、此方を窺っているアレクフォードに気づく。

アレクはマイケルを従え中へ入ってくると、將軍の登場に訓練の手を止めていた軍人達に片手をあげ、気にせず訓練を続けるよう合図を送る。

「アレク兄様？」

意識を飛ばしていたフィリスも流石に周囲の異変に気付き、近付いてくる兄を発見して声をあげた。

「久しぶりだなツエリノア、サーライド……さっきは災難だったみたいだな？」

「…忘れてください。次こそ避けて見せます」

アレクは休憩所に着くなり、フィリスの頭を撫で、サーライドを愉快そうにからかう。

「兄上は会談に出席されていたと聞きましたが…」

「ああ。先程終えた…ゲネルディバイ帝国と万天討伐演習をする事になった」

「万天討伐演習？」

「ゲネルディバイ帝国では万天被害が増加しているらしくてな、うちの知恵と技術を学びたいと言って来た。日程も急かされている…うちの騎士団をご指名だ」

「…国軍ではなく騎士団に？」

「そうだ。序でに色々調べてくるから楽しみにしてろ」

アレクはまるで旅行にでも行くかのような口ぶりで楽しげに話す。

（…兄上は何でもない事の様に軽く言っているが、急かされる程急務という事は…只の演習ではないのだろうな…）

「兄上…最新の調査資料が研究所に有りますので、帰りにお渡しします」

「ああ、助かる」

「ではまた暫く姉さまにお会いできないのですね…」

二人のやり取りを聴いていたツエリノアが淋しそうに呟いた。万天討伐と聴いて姉の身を案じているのだろう。いつも朗らかな顔を強張らせ不安そうな顔をしている。

「万天討伐は何度も請け負ってきたから大丈夫さ。二人の結婚式迄には片付けるから準備に集中しろよ？ヴァンは俺に任せておけ」

経験からくる自信を滲ませ優しく声をかけたアレクをツエリはキツと睨み、大声を上げた。

「任せろですって？…アレクフォード殿下！」

「何だっ？」

「私は視ておりましたよ？いい加減、姉さまに腹枕をせがむのはお止めください！もう子供では無いのです」

「…視てたのか…」

ツエリノアの遠視能力は水晶を通すと力が増幅され、離れていても親しい人の様子が視える。この力でツエリは二人の様子を度々監視していた。

視えるだけで音声は聞こえないが、腹枕をせがむ様子は見慣れているため嫌でもわかる。

「最近はしてないんだぞ？腹枕」

「そのままずっとなさらないでください。姉さまは貴方のものではありません。他の方とならお止めしませんから、どうぞ姉さまからお引き取りくださいませ」

言い訳するアレクの眼をじつと睨んだまま、普段のツエリからは想像できない険しい表情で姉から手を引くよう迫る。

―ツエリは昔からアレクが気に入らない。幼い頃から度々家に押し掛けては、大好きな姉を連れ回し独占する。姉に好意を持ち、そうするならばまだ許せたかもしれないが、幼い王子は傲慢に言い切った―ヴァンは俺の腹枕だ―と。

それを初めて聞いた時、照れ隠しで言ったのかと思った。姉への好意を悟られたくなくて、気に入りの腹枕だから会いに来ていと誤魔化したのだと。

そう思ったから、姉の腹枕は自分と弟だけに許された特権だったが、たまに王子が訪れる時くらい譲る事にした。幼いツエリは二人を物語に登場する王子と姫に当てはめ、恋路を邪魔するのは悪い事だと考え我慢したのだ。

成長するにつれ、現実が物語のようにはいかないと知った。友人や侍女達から聴く恋の話は幸せなものばかりではなく、好いた者同士でも巧くいかない複雑怪奇なものだと理解する。物語は誰かの理想を描いた夢で、現実には起こりえない。

その頃には王子の艶聞が絶えず耳に届くようになった。単なる噂ではなく真実だと知ったのは実際に彼が女性と逢う現場を――決して故意ではなく――視てしまったから。

一瞬頭が真っ白になり硬直するが、直ぐ胸の奥底から沸々と熱い感情が込み上げる。四肢はかっと燃えあがるように熱いの、頭の芯は風穴が空いた様にスツと冷えた。

(…どうして私は衝撃を受けてるの…)

姉は王子との関係を腐れ縁だと言っていたし、艶聞を耳にしても興味を示さず寧ろ王子と女性の素晴らしさについて討論していた。恋心を抱いているようには見えない。

なのに裏切られたと感じたのは、どこかで2人には特別な絆があると信じていた――いずれお伽噺の様に恋に落ちるのだと。

まだ幼い幻想を信じていた自分が恥ずかしくなり、ツエリは急いでその場から立ち去った。

それ以来王子が姉に腹枕をせがんだり、独占しようとする度邪魔に入った…数多い他の女性にやって貰えばいい、姉から離れろと。

だが王子は笑って「ヴァンは俺の腹枕」と主張する。まるで姉は王子の所有物だから好きに扱って当然だとばかりに。

（…冗談じゃありませんわ。無神経過ぎます）

もう小さい頃とは違うのだ。そろそろ結婚相手を見つけないければならない歳になった今“王子のお気に入り”と噂が流れば、要らぬ嫉妬や騒動に捲き込まれる上、男性も近寄らなくなる…かといって姉を物扱いする王子に任せるなど論外。

幼き頃譲った事が悔やまれる。あの時阻止していればここまで我が物顔をさせなかったのに。

ツエリは責任を感じ、引き離そうと決意した。王子の腹枕依存解消の為、能力を駆使して可能な限り阻み、王子の体に合った枕を作らせ季節ごとに贈る。先述の理由を述べ、迷惑だから控えるとも言った…だが、効果はなく王子は変わらず会いに来る。

いつそ姉を王子の手が届かぬ場所へ隠そうかと思案する間に、姉は騎士団に入団して王子の“駒”になってしまった。

姉は“誰とも結婚する気はない。後家希望だから宜しく。目的を果たしたら帰ってくる”と宣言し、意気揚々と家を出た。姉の意志は堅く誰も止められなかった。

こうなっては結婚がどうのという問題ではない。無事に生きてい

て欲しい。幸い姉は騎士団関係者とも上手くやっているし、自身も強い。このままなら無事帰ってくるだろうが……王子との距離は縮まるかもしれない。姉は王子に微塵も恋情はないが、万が一という事もある……なのでジェニファアに情報を貰い、許可を取り監視している――

「私は視てましたよ、先日雨の日……寝ている姉さまに忍び寄り、あろうことか上着に手を差し込むなんて！最低ですわ！」

「……あれは濡れた服を脱がせて温めないと腹が冷えて――」腹・腹・腹と本当にもう！いい加減になさいませ！」

いや、あの時は善意だ――とツェリに弁解するアレクフォードだが、聞き入れてもらえない。ツェリは激昂する剩り姉と王子の怪しい噂を自分が大声で宣伝しているのに気付いてない。

二人の口論を止めようとサーライドが間を図っている横では、セフィーがフィリスを押し留めている。

「お兄様、ヴァンはお腹だけではなくお尻も「フィリス様！お止めください」

そんな騒がしい様子を小さく笑いながらヘレナは観察していた。

「……何してるんだ？」

切りのいいところで稽古を終え、戻ってくるなり覆面は低い声で尋ねる。

覆面の呆れと仄かに怒りを滲ませた声を聞き、アレクフォードとツェリノアはピタリと口論を止めた。

「ヴァン、団舎へ戻るぞ。ゲネルディバイ帝国と万天討伐演習をする事になった。うちの騎士団をご指名だ、準備に取り掛かれ」

「…承知しました」

誤魔化す様に口早に命令されたが、それでも覆面は何も言わなかった——怒るのも面倒がる。

「兄上、僕も連れていってくださいませんか？」

興味を引かれたらしいアーノルドがアレクに願い出る…仔犬のような瞳を向けて。

「もう少し強くなったらな、アーノルド。今回は見送ってくれ」

「解りました……無事の帰還をお待ちしてます」

しょんぼりしながらも聞き分けのいいアーノルドの頭をアレクはぼんぼん撫でる——苦手な兄と似た面立ちなのにアーノルドはとても可愛い。

「ゲネルディバイ帝国使節団と行動を共にし、帝国へ入る。彼等も団舎に来てもらった方が早く動けるからそのつもりで。済まないがツエリノアとサーライドも一緒に王宮を発とう。研究所に置いてきた騎士達も回収する」

「フィリス殿下、アーノルド殿下。御前失礼いたします。楽しい時間を過ごさせていただきました。ありがとうございます。」

「…近いうちに会えますもの。お気になさらず。道中お気をつけになっ」

「はい。ヘレナ、ロイス、セフィーさん、今日はありがとう」
各々挨拶を終えると一行は訓練所から姿を消した。

10話 王都出立

「もう行きおったのか。たまには挨拶して出ていかんと、俺が王妃に一喝されるだろうが……」

「文句ならアレクフォードへどうぞ。急務とはいえ、挨拶の時間くらいはありましたから」

王宮執政棟の最奥、国王の執務室。代々の王が使用した一室は、精緻な紋様が彫刻された重厚な扉に護られ、知識の国を象徴するかの様に大きな石造りの書棚が四方を埋め尽くす。

清潔に保たれているが、年代物の本や書類、書棚からはどうしても匂いがたちこみ鼻につく。部屋の各所に生花が生けられているのは紛らわせるためだろう。

現王の趣向で簡素な内装になった為、細やかな花の彩り以外灰色で塗りつぶされた室内は、書棚の威圧感が際立ち入室する者の緊張を否応なしに高めてしまう……筈なのだが。

今、部屋の主である国王と王太子エルノワードが、のんびり茶を飲みながら会話している。彼らにとって部屋の威圧感など意味はないようだ。

「戻ってきたら挨拶させるか……で、ゲネルディバイ帝国からの使者はどうだった？ “皇帝の牙” って男は」

「噂通りの白髪に、武人らしい精悍な人物でしたよ……ただ、隠し事は巧くない」

「ふむ、隠し事か。アレクだけで解決できそうか？」

「忠告はしておきました。それに万天討伐に関して心配は不要です。
おたか蒼鷹騎士団に討伐出来ないなら誰の手にも負えません」

「……そうだったな」

王は顎に手を当て、思案するかのようにその青い瞳を瞼で隠す。

現在40代前半の王は、若い頃から祭り好きな性格で知られ“愉快王”と渾名されている。

祭りや祝い事は盛大に行い、様々な分野で記念式典と称した交流会を開く。その際、各国から貴人や職人を呼び寄せ広く意見を交換する為、受け継いだ文化や技を更に発展させている。

国費の歳出も多いが、それに伴い商人や観光客も頻繁に行き交い歳入も増える。少々派手なところが目立つも、実績を上げている王である。

「……で？今回はどう苛めたんだ？ん？」

「特には。まあ、アレクフォードは逃げるように退出しましたが」
王太子の趣味は愛する者達の嫌がる顔を見ること。笑顔よりも苦悶に満ちた表情に愛らしさを見出だす困った王子である。

苦悶の表情と言っても身体に傷を負わせたり、心理的に激しく追い詰めるのではなく、沸点限界ギリギリの苦悩する顔が見たいらしい。

いつもニコニコと笑顔を絶やさず、内心ではどう苛めようかと考える腹黒さを持つ王子は、気骨とからかい甲斐があるアレクを格好の餌食としている。

外面の良さでこの嗜好を知る者は少ないが、それだけに主に犠牲と

なっている妻・弟達にはいい迷惑でしかない。唯一諫められる筈の国王が、放任主義のうえに面白がっているので改善の兆しすらない。

「既に鬱憤が貯まっている様でしたから軽く済ませましたが…帰ってきたら可愛がってあげます」

王にそう答えると、窓の外に視線を向け遠くを見つめた。

.....

王宮を出立した討伐演習ご一行は、先頭を騎士団が務め、後に使節団が続く。

軍からの増援部隊もいるため物々しい雰囲気醸し出し、目撃した人々を驚かせていた。

「お姉さま、お痩せになりましたか？」

「いや、そんな事も無いと思うが…」

「でも何だか引き締まっている様ですわ。騎士とはいえ女性なのですから、程々にしなくては…」

「わかつているよ“筋肉付けずに強さ付け”だろ？」

覆面を頭から足の指までジッと観察し、腕を絡ませてくるツエリノアに再三注意され、耳にタコとなった言葉をかけられ苦笑する。

研究所へ向かう道中、当初は馬で行こうとしていた覆面をツエリが馬車に引き入れると、当然のようにアレクとサーライドも馬車に乗りこんだ。

先程から仲睦まじく会話している姉妹の対面に座ったアレクとサ
ーライド兄弟は存在をやや無視されている。

さらにツエリは、筋肉を確める振りで覆面の肩や腹に触れる…ま
るで見せつけるかの様に。その手の動きをアレクフォードは、羨ま
しげにジッと目で追っている——今にも席を立ち、手を出さんばか
りだ。

「嫁になる気もないし、別に——嫌ですわ！お姉さまに見合う素敵
な男性を必ず見つけます。私の能力ならどんなに隠れていても見つ
けられますもの。その様な決断はなさらないで」

「…素肌まで見透すなよ？やり過ぎないでくれ…ツエリ」
力説するツエリにサーライドは割り込む…婚約者のやる気は解る
が、男性としては注意しておきたい。

「気持ち嬉しいが、嫁き遅れの厳つい私を押し付けられる男性が
気の毒だ。…というか男性より、ツエリのようにほっとさせてくれる
女性が傍にいて欲しいな。男臭さはもう充分だ」

結婚云々ではなく、ただ単に女性が少ない己の職場で常々思っ
ている事を口にした。日々男性にばかり囲まれていると、無性に女性
の華やかさが懐かしくなる。

「…女性？」

覆面の発言に、勘違いしたツエリの心は揺れた。

（確かに男性に任せるよりも女性が傍にいた方がもう無茶できない
かしら…でもそれってどうなのかしら…??）

ツエリが判断しかねて黙り込み、悩む様子を見ていたアレクは、微かに口角を上げ口を開いた。

「俺も結婚するなら男より女性がいいな」

「…どうしたんですか兄上」

艶やかな噂が絶えず、山ほど来る結婚話に見向きもしない兄の意外な発言にサーライドは驚く…内容はともかく、自身の結婚について発言を避ける兄だ。自ら話題に加わるとは珍しい。

「そう思っならいい加減一人に絞れ。うちの国は王族も一夫一妻制だ」

「誰か一人に絞るなんて恐れ多い。俺はまだ一人でいいさ。…ヴァンも結婚しないで俺と一緒に華々に囲まれていよう」

アレクは下手な役者のように芝居がかった口調でとぼけてみせた。結婚話になるとこうしてとぼけ、相手の気を削ぐいつもの手段だ。

（兄上…それはただ単に女性を侍らせたいと宣言しただけでは…）

（何故こないいい加減な人がモテるのかしら…サーライド様の誠実さを見習えばいいのに。やはりお姉さまと離さなければ…）

弟と義妹（予定）から冷たい視線を送られても、アレクは飄々としている。

「それが王妃様のお耳に入れば、また説教の上お見合い責めだぞ？」

「母上に協力するのを止める、ヴァン。俺まで罫に嵌めるな」

アレクは苦いものを食べたかのように口許を歪め、覆面をじとりと見やる。

アレクの行動パターンを熟知している覆面は、王妃の号令でお勧め令嬢達との出逢いを演出する。あたかも偶然であるかのように仕掛けるのでたちが悪い……尤も、令嬢の態度ですぐ罫だとわかるが。

「無理だな。昔からよくしていただいている。あの方の最大の憂いはアレクの結婚。ツエリもお世話になるし、協力は惜しまない」

きっぱり拒否する覆面に、アレクが更に言い募ろうとした時、馬車が速度を落とし停止した。

「…着いたな」

「殿下、到着致しました」

外から声がかかり一同が馬車を降りると、先に別の荷馬車から降りた山羊のゴー君が道端の雑草をムグムグ食んでいた。

覆面達は少数の騎士とゴー君を連れ、研究所の門を潜る。ツエリとサーライドは覆面達を玄関で待機させ、研究資料を取りに羊のシーちゃんが番をする研究室へ向かった。

ほどなくして、2人と入れ代わるように騒ぎを聞きつけたグレンが現れた。

「あら？お早い到着ですわね」

「厄介な依頼がきたんだ」

グレンと残った他の騎士達もそろそろと集まりだし、覆面が経緯を説明する。

「万天討伐…本当に慌ただしいですわねえ。寝不足続きで肌が荒れますわ」

「私もさすがに眠い……」

頬に手をあて嘆くグレンに、覆面も手を口にあて同意する――どうやらあくびをしたようだ、布に覆われて口の動きが見えない。手で隠したのはただ単に癖なのだろう。

「ヴァン、俺の快適な寝台を使って良いぞ。一緒に寝よう」

「何だそれ……気色悪い。どうせ腹枕が条件なんだろ。遠慮する」

「いや、腹枕は――アレクフォード殿下――」

アレクフォードは間延びした口調で呼びかけられ意識を削がれた。

声がした方を見ると、廊下の奥から見知った初老の男性がほんわか笑顔で近づいてくる。所長が挨拶に来てくれたようだ。

「調査員を〴〵集めていただき――ありがとうございます――」

「いいえ。お気になさらず。弟がいつもお世話になっております」
暫く和やかに会話していると、サーライドとツェリが速足で戻ってきた。書類の入った封書とツェリは包みを抱えている。

「兄上、こちらが最新の調査資料です。新たな事態が起きましたら知らせてください。私も向かいます」

「珍しいな、来てくれるのか?……その時は頼む」

「はい」

神妙に応えるサーライドだが、大好きな調査の気配にすかさず「私も行くよ？」っと名乗りを上げた所長に冷や汗をかく。所長が出向けば確かに心強いが、危険も増える——要らぬ怪我を負いたくない。

断固阻止しようとサーライドが怒濤の勢いで説得する横では、ツエリが包みを覆面に渡している。

「お姉さま、これは団舎の皆様へ差し入れです。そしてこれはジェニちゃんに渡してくださいますか？」

「いいよ。いつも悪いなツエリ。差し入れありがとう」

一抱えもある包みの中身は、王宮で殿下方に振る舞ったものと同じ茶菓子だった。短時間で書き上げたジェニファアへの返信もある。

「いつも美味しいのよね、ありがとうツエリノアちゃん」

グレンは、包みから漂う良い匂いに頬を緩ませながら礼を言った。周りに集まる幾名かの騎士達も同様に礼を言う。

「お口に合って良かった。姉を宜しくお願いします」

「あら。任されちゃったわ…ヴァン、早速覆面取りなさいな、髪を弄って差し上げますわ」

「決してそういう意味ではないぞ……というか頭目で満足したんじゃないのか？」

「あれはあれ、これはこれ。毛に触れる機会は逃しませんの」

オホホホっとグレンが高らかに笑った。張りのある不思議と艶っぽい低音が響き、その場に居た者は音源のグレンを見て——すぐ顔をそらした。珍しい毛を堪能した後のご機嫌なグレンは、たまに

誰彼構わず頭髪を弄りだす事があるので、騎士達は被害にあわないよう視線をあさっての方へ向ける。

「…では、資料を借りて行きます。万天の調査報告を持ち帰りますので、解析を宜しくお願いします」

微妙な空気を察したアレクは去り際とみて、辞去の口上を述べた。

「はい、楽しみにしています」

「お姉さま、危なくなったら逃げてくださいますね」

「わかった。ツエリも気を付けてな？日常こそ危険なものだし……ね？サーライド殿下」

「そうですね……」

（これは既になにか仕掛けられたのか？それとも只の忠告か？……読めない）

表情が全く見えない覆面の意図を読むのは難しい。茶色の布越しに視線を感じるが、それだけでわかるはずがない。サーライドは声色で判断するしかないが……籠った声から何がつかめるといいのか。

当惑するサーライドを遣し、別れの挨拶を終えた騎士団一行は研究所をあとにした。使節団・増援部隊と合流すると、転移門へ向かい歩き出した。

……………

（僕はまた兄上に叱られるんだろうな……誰か着く前に見つけてくれないかな）

暗く視界を塗り潰され、身動きもとれぬ狭い空間でロイスは後悔の念に苛まれていた――

閑話 メイとアレクの戦い（前書き）

副題の通りの内容です。少々キャラ崩壊気味？

閑話　メイとアレクの戦い

日が傾き雲を朱金に染める夕方。団舎から少し離れた丘の上に唯一生えている大樹があり、身を預けている者がいる。

本日は桃色の細布で頭部をぐるぐる巻いたその者——ヴァンは久しぶりに取れた休暇の午後を丘の上での午睡に充てていた。

午前中に町で必要物資を買い込み、晩にお姉様方と遊ぶため午に睡眠を取っているのだ。

何故こんなところで寝ているのかと言うと……団舎にいと休暇にも関わらず容赦ない管理人夫妻にコキツカワレ、副団長に次の任務を言い渡される。団員によっては恋愛から鍛練方法の相談——賭に至るまで持ちかけられる。

なので桃色の覆面は休日団員関係者の前へ姿を現さない。

そんな覆面は大樹の木陰で横たわり微動だにしない。目が開いているか判らないので、不運にも通りすがった者を行き倒れかと驚かせている。

だが心配して近寄ってみると——覆面の腹の上で微かに動く丸っこい小動物が見える。

人が近づくと両手を浮かせ、耳を忙しく動かすそれは、威嚇するようにそのクリッと開いた真ん丸の両目をジッと向ける。

見据えられた人々は足を止め、覆面の腹が上下に動き穏やかに呼吸するのを確認すると、大概の人間は去っていく。

それを見届けると丸っこいチンチラに似た小動物——メイは再びお気に入りの場所（覆面の腹）でモゾモゾ動き己も昼寝の体勢を整

えた。

メイの極細で濃密な青銀色の毛並みは厚く滑らかな手触り。若干白い毛に包まれたフニフニとした腹が細かく上下し、細い手足をペシヤリと投げだし横たわる姿は愛らしい。

そんなゆっくり時間の流れる長閑な光景は訪問者によって壊された――

「先客か」

事前に今日が覆面の休暇であると知っていたアレクは、どうしても外せない会議を終わらせ急いで舞い戻り覆面を捜していた。

前日覆面に戻ったら一緒に過ごそうと誘ったが“待つのは面倒くさい”とあえなく振られた為居場所が判らず探し回り、やっと見つけたのは夕方で――彼の一番安らぐ場所（腹枕）には先客が鎮座していた。

アレクが覆面に近づくときメイが敏感に反応し顔を上げた。

「そこは俺の枕だ。勝手に使つな……今日こそ退け」

覆面が起きていれば即座に否定するその言にもメイは動かずジッとアレクを凝視する。

暫し睨み合った後アレクは、懷から干し葡萄を取り出しメイの前で振る――両者の腹争奪戦はこれで129戦目だ。アレクの用意は

万全。

「キノード王室御用達果物農家作、無農薬に拘った至高の一品だ。そこを退いたらやるぞ？」

まずアレクが好物で釣るがメイは動かない。満腹らしい。

「トマス作、回し車―干し葡萄の香りつき。丈夫で長持ち」

メイの目の前で回してみるが鼻をひくひく動かしただけで終わった。満腹で今は動きたくないがちよつと興味を引けたらしい。

「次は砂浴び場の砂。粒子が細かくキレイ好きなあなたを更に美しくする一品」

これはかなり興味を引いたらしい。体を伸ばし、今にも跳ねてきそうだった。

「職人作巣箱。牧草を敷き柔らかく、木製でかじり易い。何よりボルトツクの香りが貴女を始終包み込む――これでどうだ？唯一無二の作品だぞ？」

ボルトツク――メイが一番気に入っている人物名を出されメイは動いた。素早い動きでアレクの足下に置かれた巣箱に入る――ご満足頂けたようだ。

勝利の笑みを浮かべ賞品へと近づく。起こさないように細心の注意を払いながら。これでご無沙汰気味の彼が最も待ち望む安らぎの一時を手に出来る……

樹の根元に横たわる覆面の腹枕。幼い頃から彼を癒して止まないそれは、成長するにつれ感触を変えても彼に安らぎをもたらす。

適度に温もりがあり、昔は柔らかく小さかったそれは今、表層は少し固いが奥に包み込むような弾力を持ち、しなやかに頭を受け止めてくれるようになった。寝返りを打っても落ちない。

腹大動脈から伝わるゆったりとした鼓動や、覆面の慣れた匂いは心を落ち着かせてくれる。

アレクは大きく息を吸うと、久方ぶりの其を満喫する為腰を下ろし、ゆっくり頭をのせ横になった。

――至福――

（これだ……この感じ。俺はこの感触に飢えていた……流石はヴァン、俺の腹枕……）

「ヘックシヨイツ」

5分も経たず布に口を隔たれながらも、実に親父臭いクシャミが聞こえた。クシャミの動作によりアレクの頭は腹の上で跳ねる。

「あーアレクか」

腹に掛かる重みに気付き、確かめる様にアレクの頭を触りながら寝起きの声で囁いた。夕方の丘は冷え始める。クシャミが出るのは当たり前だろう。

「サツサと退け。重い」

そう、彼は大体この段階で失敗する。なんとかメイを動かせても覆面がすぐ起きてしまう事が多い——まあメイが動くのは其を感知した故かもしれないが……これで46勝83敗。

「嫌だ、俺は疲れてるんだ休ませろ」

「何言ってるんだ、私こそ休暇中だ休ませろ。それに此処ではなくベッドで休め」

「……俺も今日は半休を取った。このまま休もう」

「嫌だ寒い腹へった。お姉様達が私を待ってる。アレクに構う暇はない……退け」

「……俺も行く」

「嫌だ。お前と行くとお姉様方が色々な意味で緊張するからない笑みが見れん。私の癒しを奪うな」

腰にガッチリ腕を巻き付け離れようとしないうちにアレクを何とか離そうとする覆面。尚続く口論——それをメイは巣箱から見守っていた。

11話 土産？

陽が山の端に半身を沈ませ、辺りが薄暗くなる頃。

気温が下がり、冷たい風が肌を掠めゾワリと鳥肌がたつ。生き物が巢に戻り、日中は各所で聞こえる活動音が弱まると、山風が木々を揺らし葉の擦れあう音がやけに大きく耳に届く。

そんな夕暮れの中――転移門が突如音もなく開き、そろそろと騎士団の面々が姿を現す。

「お帰りなさい！皆さん」

ジェニファアは、転移門を抜け戻ってきた一行にいち早く気付き、とびつきりの笑顔で迎える。

「お帰りなさいませ」

笑顔のジェニファアの傍らには、トマスと数人の騎士達が並ぶ。彼らはそろそろ戻ってくると予測し、出迎える為に準備を整え待機していた。

「出迎えご苦労……トマス、悪いが客を連れてきた。部屋を用意できるか？」

「お客人ですと？」

礼の姿勢をとっていたトマスは顔を上げ、馬上から己を見下ろす

アレクフオードと視線を合わせた。微かな夕闇に染まった彼はどことなく哀愁を漂わせている。

「ああ。60人はいるからな……兄上からの任務で仕方なくこうなつた。急で悪いがよろしく頼む」

「60人？……」

トマスが思わず聞き返すと、アレクフオードは頷く。聞き間違えかと後続を見やると、騎士団の面々が出揃っても未だ列をなして門から出てくる見慣れない姿の者達を発見する。

「ゲネルディバイ帝国と万天討伐演習をすることになった。日程を急かされてな。団舎から揃って帝国へ向かう方が早いから、使節団と援軍を連れてきた……適当に世話してやってくれ」

トマスは視線をアレクに戻し、馬上から降りた彼から手綱を受け取ると、その表情を注視した。分かりづらいが、目に後ろ暗さが窺える。

仕方なく連れて戻つたような説明だが、明らかに言い訳がましい。他国の者を本営に入れるとは、すなわち弱点を自ら晒すという事。普通はどんなに急ぎだとしても避ける。

大方王都から帝国に向かうとなると、王太子も見送りに来る可能性が有るためこうしたのだろうか……浅慮過ぎではないだろうか。

（……まあいつもの事だの。それも経験、経験。どうなることやら）

トマスは今回の突拍子もない行動をあっさり受け入れると、孫ほど年の離れた主に忠告する。

「御意のままに……ですが殿下、覚悟しなされ」

「……わかつている……」

アレクは一瞬肩を竦めてみせると、少し間を置いてから団舎内へ案内するよう言い渡し、スタスタ歩いて行く。

「……………飯抜きか？」

「…皿洗いでしょう…」

側近二人はアレクの背を見送りながら、ぼそぼそ呟いた。

……………

「美味い…」

「そう言つて頂けると光栄です。料理人も喜びます」

料理を食べたエアラスが思わず口にした一言に、アレクフォードはニコリと目を細め機嫌良く応じた。

今二人は、食堂ではなく貴賓を迎える為に詔えた部屋で、晚餐の席を共にしている。

5人ほど座れそうな長机に団服と同じ深緑のテーブルクロスが敷かれ、その上には料理が次々と並ぶ。どれも急拵えとは思えない出来だ。

「我々の都合に合わせて頂いた上、ご厄介になってしまい申し訳ありません」

「いいえ。此方としても都合が良かったのです。どうかお気になさらず、今宵はお寛ぎください」

「ありがとうございます……それにしても本当に美味しい。良い料理人がいるんですね」

余程マギーの手料理が気に入ったのだろう。エリアスが料理を口に運ぶ速度は衰えない。

そんなエリアスを眺めながら、アレクは件の料理人マギーとのやり取りを思い出していた――

『まったく、何を考えてるんだい！』

『すまない、マギー』

アレクフォードは団舎の門を潜り、覚悟を決めて調理場へと入った。夕飯を作り終え三角巾を取り、お茶を飲んで一休みしていたマ

ギーを見付けると、事の次第を説明した。

『急な客人ならどんと連れて来な。だけどねえ、この人数なら先触れがあつてもいいんじゃないかい？』

『急に決まつてだな……』

客人を連れて来たと告げた時は問題なかったが、客の人数を聴いた瞬間マギーは立ち上がり、その赤茶の巻き髪を広げアレクを猛然と叱りつけた。

いくら急な事だったとはいえ先触れぐらい出すのが礼儀だろうと

……

『言い訳するんじゃないよ！……不測の事態にどう対応するかで男の出来が知れるんだ。まったく、何を学んできたんだい。女の尻ばかり追つてからこうなるんだよ……気が利かないねえ……』

マギーはフンツと、鼻息荒く吐き捨てる。完全に不敬罪に問われども仕方がない態度だが、お言葉はいちいち尤もな事ばかりで、自分が悪いと自覚しているアレクは、立ち尽くしたまま何も言い返せない。

（俺が雇い主だよな……何でこんなに叱られてるんだ……）

王子であるアレクを叱りつける人物（師匠・母・幼なじみ達のみ）などほとんどいない。

因つて、叱られた場合の対処も覚束ず、育ちのよさも手伝つて歳上の淑女を無下に出来ずマギーにも強く出れない……流石にここま

で言われっぱなしになるのはマギーに対してだけだが。

『アレクが追ってるのは腹だな。マギー、外に客を待たせてる。お説教はまた後でタツプリな』

アレクの後から登場した副団長マイケルが仲裁に入り、我に返ったマギーはアレクをほっぽり客人をもてなす支度に取りかかった――

（後でまた説教か……拭き掃除ぐらい覚悟しておくか…）

マギーは、説教後に謝意の証として家事に関連する罰を与える。罰をこなし誠意を示すと、元からさっぱりとした性格のマギーは水に流してくれる。が、すっぱかそうものなら涙が枯れるほどの目に遭わされる……一度味わった経験があるアレクは身分を忘れ、罰をこなそうと覚悟を決めた。

腹を括ったアレクは意識を戻し、エリアスの金茶の瞳と視線を合わせる。

「使用人が少なく、貴殿の隊員にまで手伝わせてしまい心苦しい限りです。せめて料理が口に合ったようであんししました」

マギーは、使用人・騎士団員達に部屋の準備を言い付け――手が足りないとみるや客人である筈の援軍と使節団（エリアスが指揮す

る帝国軍第五部隊）の面々にも容赦なく指示を出しこき使う。その間に自身は貴人用の凝った料理と軍人用の料理を大量に作りあげた。今は一段落つき、使節団も食堂でマギーの手料理を食べている。

国を離れてから節制を強いられてきた彼らは、騎士として行儀良く座りながらも「美味い……」「生き返る」など口々に感嘆の声をだし、徐々に皿まで食らいつくす勢いで食べた。

その様子は料理を作ったマギーを大いに満足させ、たちまち機嫌を回復させた。

「いえ、ご厄介になるのですから当然の事です。」

マギーの要請に快く応じ、隊員達に従うよう指示したエリアスは自らも準備を手伝った――

エリアスは、凄まじい形相で指示を飛ばすマギーと、言いなりになっていた第二王子を思い出す。

あのお蔭で必要以上に入っていた肩の力が抜け、食事を楽しむ余裕が生まれた……これから挑むモノへの気力も。

「お恥ずかしい所をお見せしました……余計な時間をかけてしまい申し訳ありません。本題に入りましょう」

アレクが食事の手を止め話を切り出す。依頼内容の詳細を確認する為に。

「今回演習場所はラバトニア地方と聞きました……失礼ですが演習ならばもつと人が集まり易く、路がある程度整った地が適しているのでは？噂によると行くにも帰るにも難儀する地だとか」

「……ラバトニアは確かに辺鄙な地です……が、現在最も万天が活発に活動する地なのです。確実に演習が行えます」

「……活発に活動ですか」

アレクは体を起こし目を細めると、ジツとエリ阿斯を見据え威圧し、言外に疑問を含ませた——それだけが理由ではないだろう。さつさと話せと。

（……流石に苦しい言い訳だな——もう良いだろう。万天討伐は王太子も受諾された。王子がここで断つたら国の恥になる）

アレクの物言いたげな空気を読み、エリ阿斯は会談では伏せていた事項を述べる。

「……いくら倒しても次々と現れるのです」

語りだしたエリ阿斯を見つめ、先を促す様にアレクは一度小さく頷く。先ほどマギーに叱りつけられて、たじたじになっていた男と同一人物だとは思えない風格ある態度だ。

「半年前から発生し、いくら倒しても現れ被害は拡がるばかり。我が国では原因も解明できず、貴国に今回の要請をした次第です」

「…依頼は“万天討伐の知恵と技を学ぶための演習”であつたはずですが？」

「はい。演習です。実地で学ばせて頂きたい——件の万天を利用して」

エリアスはその眼に力を宿し、ハッキリと言った。

「…原因究明から解決までしてみせると？それならば演習を名目にする必要は無いはず。何故、初めから討伐を要求しなかったのですか」

「私には上層部の意思は解りかねます……が、この様に騙し討ちのような形を取り深くお詫び申し上げます」

エリアスは皿に顔を突っ込みそんな勢いで頭を下げた。

（嘘でもなさそうだな）

アレクは、料理から上る湯気と同じく白い頭頂部を見ながら思う。ラバトニア卿は腹芸が得意なタイプではない。事前情報では、軍事国家で武功の割りに隊長格に甘んじている印象だったが……それも納得できる。真っ向勝負を宗とする武人は人気はあっても上に嫌われるものだ。

（どうせ国の面目やらを気にした石頭達の指示なんだろうが……気の毒にな。皇帝の牙と名高いラバトニア卿を混迷している故郷から離して道化を演じさせたか……同情を誘うのも手か？気に入くない）

アレクは帝国の遣り方に腹をたて、不機嫌そうに口を歪ませ押し黙る。頭を下げたままのエリアスも口を閉じ、アレクの出方を待っている為沈黙が続く。

その時、沈黙を破るかのようにトントントと扉を叩く軽い音が聞こえた。

音に反応し、先程から黙々と料理を運んでいた——人手不足を理由にマギーから給仕を仰せつかったヒースが扉に近づく。エリアスも顔を上げた。

ヒースが誰何の声をかけると、扉を開けマイケルが入室する。

マイケルは室内の重い空気に一瞬片眉を上げたが、それには触れず不機嫌そうなアレクに近付くと、顔を寄せボソボソと耳打ちした。

「…間違いないのか？」

「ああ。何処かにいるな」

マイケルが持ってきた情報にアレクは呆けた顔をし、腹の苛立ちも飛んだようだ。不機嫌な空気も去っている。

「…放っておいて良い。腹が減れば出てくるだろう」
「…だな」

マイケルは茶目つ気のある眼を伏せ、楽しげに頷くとエリアスに一礼し退室した。

何事が起こったらしいが、訊いて良いものかエリ阿斯が考え倦ねていると、アレクは口を開いた。どことなく楽しげに見える。

「仔熊が迷い込んだようです」

「…仔熊ですか？」

「はい。良くあることでして……心配ありません」

「はあ……」

説明されてもエリ阿斯は納得できない。普通は必死で追い払う……でなければ母熊まで来るはずなのに。

「大丈夫です……彼らはこの料理を気に入ってくれてますから、食べたらずりますよ」

「そうですか……」

アレクは本当に取るに足らない事のように話すので、エリ阿斯も疑問を残しつつ頷いてみせた。

「…事情は解りました。国として引き受けたからには、必ず万天を討伐して見せましょう……ですが、これ以上事実を騙らないようお願いします。万天討伐は何が起こっても不思議ではない…協力が必要です。国としてではなく、貴方が約束してください」

アレクは、穏やかながら有無を言わせぬ響きを言葉に込めた。

「もう二度と虚偽は申しません……故郷の窮地には是非お力添えを」

アレクの忠告に、エリ阿斯は立ち上がり再び頭を下げた。

そんな二人を黙って見守っていたヒースは相変わらず甘ったるい主に内心溜め息を吐く。

難癖の付け所は山ほどあった。断れたのにそうしない主は激甘だろっ……単に手ぶらで終えては兄が怖いだけかもしれないが。

（それよりも……仔熊ですか）

半ばヒースの思った通り纏まった会食は置いておき、先程の話題について考える。確かに山奥に建っているが、未だかつて仔熊が団舎に迷い込んだ事はない……ヒースはすっかり冷めた茶を淹れ直しつつ“仔熊”の正体を推測し始めた。

……………

「危なかったわね」

「どうやって気付いたんだろう？木箱にしか見えない筈なのに……」

団舎の物置小屋に身を潜め、少年少女3人はコソコソ会話している。一つの大きな底を抜いた木箱を仲良く頭から被り、膝から下の脚を縁から出しいつでも動ける体勢で身構えながら。

木箱には小さな穴が六つ空き、三方向視界を確保したので、彼らは荷物の移動に紛れここまで逃げられた……途中バレそうになったが。

「顔はまだバレていませんわよね…このまま隠れますわよ」

「姉上、まだ隠れるのですか？もう団舎に着きましたよ。お腹も空きましたし…出て行きませんか？」

アーノルドが腹を撫でながら姉フィリスに訴えてみる。逃げる途中食堂の近くを通ったので、いい匂いが鼻に残り空腹感を煽り、腹に力が入らない。

「咄嗟とはいえ逃げてしまいましたもの。やり遂げなければ失礼ですわ」

「逃げ切るおつもりですか？会いに来たのに？」

そう、彼らの目的は普段なかなか会えない人物と触れ合い、尚且つこの団舎を満喫する事だ。逃げるのは時間の無駄だが、フィリスは闘争本能を刺激されたいらしい。

「ええ。捕まらずに貴方がトマスに会えたら私達の勝ちとします！」
フィリスは木箱の中で高らかと宣言し、拳を握る。声が中で反響するので一緒に潜んでいる二人にダメージを与えた。

「そうですか…決めてしまわれたのですね」

思い込みの激しいフィリスには逆らえず、アーノルドは早々に諦めた。

こうなったらさっさとトマスに会い、夕食を恵んでもらうしかない

いと、扉に向かおうとした時——微かにパタンと扉の閉まる音がした。

咄嗟に三人は膝を折り、只の木箱を装い息を潜める。

緊張しながら人の気配を探るが誰の足音もしない。古い木造の物置では、大人の体重ならば必ずギシギシと音がする筈なのに。

「あれ？誰も来なかったのかな？」

「ロイス、そちらから何か見えませんか？」

「…暗くて何も…」

暫く経つても見つかる気配はないので、三人は緊張感に耐えられず木箱から抜け出し、辺りを見回す。

すると、ロイスが扉付近に林檎と紙の入った籠を見付けた。どうやら“誰か”は扉を開けたが部屋には入らず、籠だけ置いて出ていったようだ。

「団舎の見取図だ…丁寧に誰の部屋かまで記してある」

「まあ。音の正体はルシアですわ…協力してくださったのね。また顔が見れませんでしたわ」

フィリスはジェニファーと仲が良かったので団舎に来る度ルシアとの交流はあったが、未だに会話した事も顔を見た事もない。今回こそ会う気で乗り込んできたのだが…手強そうだ。

「ルシアのご厚意を無駄には出来ませんわ！やりますわよ！」

「はい。姉上…」

「…承知しました…」

三人は意を決し、ありがたく林檎を食べてからコソコソと動き出した――

11話 土産？（後書き）

次回より主人公出ます。やっつと主人公の目的にも触れます。

12話 暗い中（前書き）

軽〜い下ネタとも呼べないけども、それっぽい単語は出てきます。
アホな話になりました。

話がなかなか進まない〜〜！

方言っぽい台詞が出てきますが、日本の方言でもありません。キノ
ード王国内にある、どこかの地方だと思ってください。

12話 暗い中

ガササ……ゴソゴソ………パコッ………パタン…

すっかり陽が落ちた夜。淡い星明かりが辺りを照らすも、灯りがなければ視界は覚束ない。山奥に建つ団舎の夜は、騎士団員でも服を着込まねば震えが止まらぬほど冷え込む。

そんな中、昼と変わらぬ服装で何やらゴソゴソと動く男がいる。灰色のゴワゴワとした長い髪を揺らし、2mは有る長身とガツシリとした体躯の男は蒼鷹おおたか騎士団の団服を身に纏う。この暗さで動かなければ、苔の生えた大きな岩か、家具だと間違われるだろう。男は燭台の灯りを頼りに大きな体を屈め、家具の底を覗いたり、寝台の下を覗いたりして、何かを探しているようだ。

寒さも気にせず腕捲りまでして集中して探していた…が、流石に腰が痛くなり手を腰にあてストレッチをし始める。

グイッと腕を上げ大きく伸びをした時——ピキッと腰が凝まった。

（ヴつつつ何だこりゃ……噂に聞くぎっくり腰ってやつだぎゃ？…ンニヤ、まだそんな歳じゃねーべさ………フンつつ）

男が気合い一発腕をブンツと振り腰を捻ると、凝っていた腰は動いたがジンジンと思いの外強く痛む。丁度近くにあった椅子に手を置き、痛みをやり過ごそうとした時ガチャリと音を立てノブが回り扉が開いた。

「バーボートさん、こっちにいましたか？……ってどうしたんすか！？」

部屋の扉を開け、膝を折って腰を擦るバーボートに慌てて近付いてくるのは、炎を4つ周りに浮かばせたランスロットだ。何故か両手にスープ入りのカップとピザを載せた皿を持っている。

心配そうに近寄るランスにバーボートは片手を上げ無事を示す。

「俺は大丈夫だ……何でもない。それよりこっちにはいなかった」
素早く立ち上がり、地響きでも起きたのかというような迫力ある声でバーボートは誤魔化す。ぎっくり腰になりそうだったなどと言いたく無い。

「そうっすか？ならいいんですけど……やっぱり中々見付かないもんっすね、他捜します？」

「そうだな。次で見つからなければ副団長の言っていた通り、あちらから出てくるのを待つしかないな」

「そうっすね……あゝあの時逃がさなければ良かった」

「まあな……」

そう呟きバーボートとランスは各々溜め息を吐いた。

……

あれは荷物の搬入作業をしていた時に起こった――

ランスとバーボートはペアを組み、王宮から騎士団の荷馬車で運んできた物資を団舎に運び入れていた。他の騎士達は掃除やら案内やらに奔走していた為、後回しにしてもよい騎士団の荷運びは、たった2人でやる事になったのである。

8台ある荷馬車は、程々に積まれた往きとは異なり、任務が下った為団長アレクフォードが軍からぶんどってきた大小の物資でぎゅうぎゅう詰めにされ、それを見た2人は途方に暮れた……載せたままにしている物と、団舎に入れない物があればならない物が区別なくゴチャゴチャ詰め込まれていたのだから。

それでもやらねば2人の休憩が取れなくなるだけなので、2人は仲良く腕を捲り作業に取りかかった。

「重いいゝきつとゝ良いものがゝゝ入って……る筈だゝ」

「……………（そうだったのか？）」

「大量のゝきつつゝいゝ酒ゝ、もしくはゝ肉ゝゝ！」

「……………（酒は樽に入ってるもんだべ、こりゃ木箱だ）」

「はたまたゝゝ頑丈なゝゝ武器ゝゝ」

「……………（あつかもな）」

「でもなければゝゝ優しいゝ誰かがゝ入れたゝネタ本ゝ」

「……おいつ、その辺にしておけ。一応客人がいる、笑い者になるのはお前だぞ」

バーボートは、作業に飽きて即興で思い付いたアホな歌詞を歌う

ランスを注意した。内心相槌を打っていたのをおくびにも出さずに。

「客人つていっても、こっちはいないじゃないっすか」

「それでも止めとけ、迷いこんで来るのもいるだろ」

騎士団の荷馬車は裏手に回された為、表門付近に着けられた使節団・援軍の荷馬車から離れている。客人達に宛がわれた迎賓棟もそこらにあるので声が届くとは思えない。

つまり、2人の周りには客人の姿はなく、時折慌ただしく走り回る騎士団員が通るだけだ。荷物も裏口に近い部屋に運ぶだけなので喧騒が聞こえる団舎内とは違って代わり閑散としている。

「……迷いこむかぁ…確かに迷えるな…」

「……そういや、ランスは3ヶ月くらい迷子になってたな」

「…忘れてください、俺他で道に迷ったことないんすよ……絶対この団舎が変なんだ、今は迷わないし」

ランスは入団当初、団舎内で迷子になるという珍事を起こした…誰かしらの後を付いて歩かなければ目的の場所に着けず、どう歩いても裏門に辿り着き、何故かその度動物が襲ってきた。彼が引き寄せた最初の厄介事とみなされている。

「あれが終わりの始まりだったな…」

「俺の何かが終わったみたく言わないでください…」

ランスはじつとりとした目付きでバーボートを睨むが全く気にされない。それどころか実には愉しそうに笑われた。ゴツゴツした外見の割に髪と同じ灰色の瞳で優しく此方を見られては、何だか睨む

のも馬鹿らしくなる。

ランスは睨むのを止め顔を反らし、歩みを速め2人で担ぐ荷物をさっさと部屋へ運び込んだ。

荷馬車にも早足で戻ろうと出入口を出たら、荷馬車から大分離れた場所に大きな木箱が置かれているのが見える。

荷馬車から外郭を通り団舎内へ続く中途半端な位置にある木箱は、元からそこにあつた物ではなく、荷馬車に積まれていた物の筈だ……次に運ぼうと思っていた木箱と同じ大きさ・同じ印が記されている。

（…間違いないよな？さっきまであんな所に何もなかったし……誰か手伝いに来たか、援軍の誰かが迷つたのか？）

「どうした？ランス。まだまだ荷物は山とあるぞ、止まるな」

「バーボートさん、あれって次に運ぼうとしてた木箱つすよね？」

バーボートがランスの指差した方向を見ると、確かに重そうで後回しにした木箱があつた。

「だな……何だ？誰か来たのか？」

「さあ……そんな気配なかったすけど」

2人が首を傾げ顔を見合わせた瞬間——ゴソゴソゴソツと何かが動く音がした。

2人が音のする方に顔を向けると、木箱に脚が6本生え、凄い速さで団舎へ向かって移動していくのが見えた。6本も脚があればぶ

つかりそうなものだが、息のあった足さばきで素早く進んでいく。

「はあっ!？」

「ありや何だっぺ!？」

それを見て2人は一瞬呆気にとられ思わず声を上げる。が、直ぐ我に振り返りかけようとしたら――木箱からコロコロと玉が数個転がってきた。

玉に魔法で火がつきボフッと音がして破裂すると、中から大量の煙と目や鼻がツーンと痛む刺激臭がブワツと溢れ出てくる。

「うわっ!痛っ!」

「げほっっ!なにやっとなるんじゃランス、風で吹き飛ばさんかい!」

「あっ、はい!」

慌ててランスが風をおこし煙と刺激臭を散らすも、既に怪しい木箱の姿は見えなくなっていた。気配すらない。

「うへっ、まだ臭う……煙玉勝手に使ったな」

「いや、あれは奴らの所持品だろう。煙玉は他の荷馬車にあった筈だ……で、どう思う?」

「えっ?あの動きは蜘蛛木箱の化精か訓練された刺客かと……」

「蜘蛛木箱って何だ!動きだけしか見なかったのか。あれは子供の脚だ。3人入っていたな」

「子供?3人?」

「ああ。しかも上等な靴を履いていた…貴族の子供だ」

「貴族の子供って…まさか、殿下方っすか？」

「かもな。王宮からの荷に紛れ込める子供は限られてる…それに、1人は女子で2人は男子だ。桃色の靴を履くグレンみたいな奴でなければな」

「……いつ紛れたんすか…ってか何で煙玉まで使って逃げたんだ…昼間拳を交わした仲じゃないっすか殿下、俺は話の解る男っすよ」

「ランスに捕まるのは癪だったんだろ。さて、報告するか。あの調子じゃ誰にも言わず出てきたんだろっしな」

そう言うところ、バーボートは項垂れたランスを引きずり、報告しに向かった――

……………

「どこいったんすかね…もう大分時間経ったのに」

副団長マイケルに報告し、返ってきた命は“放っておけ。そのうち腹減らして出てくる”というものだった。確かに腹も減れば出てくるかと思い、その場は搬入作業に戻った。しかし、その後作業を終えた2人が食堂で遅い夕飯にありつけた時、マギーに確認してみると殿下方に会っていないと言う。何かあったのかと心配するマギーを宥め、騒ぎにしないよう言い含めると2人は搜索し始めた。放っておけと命じられているのでおっぴらに動けず、他の騎士の手

も借りられない。

「まさかあえて人の多い迎賓棟に隠れてるんすかね、木を隠すなら森戦法？」

「それはないだろ。他国の使者がうるついてんのに……そもそも殿下方は何しに来たんだ？態々かくれんぼしに来たんじゃないだろ」

2人は部屋を出て廊下を歩く。比較的人通り少ない場所から捜し、大方見回ったが収獲はない。手詰まり状態の2人はここにきてやっと殿下方の目的を思う。

「ランス君みたいに持ち歩くほどマギーの飯が好きで、たらふく食いたたいんじゃない？」

「いやいや寧ろ嫌いかもよ？寝静まった頃全部捨てちゃう気かも」

思案する2人の後ろから良く似た声質で真逆の内容を語る青年が現れた。

ランスと変わらぬ年頃の2人は同じ髪型に同じ灰色の瞳で背格好も瓜二つ。見分ける方法は、姉から贈られた一組の手袋をどちらに嵌めているか。右手に嵌めていれば兄克蘭トス、左手なら弟バリニオスで、贈り主の姉を入れてスタンシー伯爵家のそっくりな三つ子である。

「…聴いてたんすか…」

（面倒なのに見付かった……絡まれてる暇ないのに）

「嫌そうだねランス君……折角手伝おうと思ったのに」

そう同時に告げるとクラントスが無防備なランスの脇を攪り、バリニオスが素早くカップと皿を奪った。

「うひゃっ！止めてくださいよ、それ一応殿下用なんすから！」

「アホだな。匂いに釣られて出てくるとでも？」

「道具を使える頭はあるんだよ、多分……間違った選択なだけさ」
奪ったピザとスープを各々口にしながら憐れそうにランスを見やる。

（別に匂いで釣ろうとした訳じゃない……そりゃちよつとは反応有るかと思っただけ……）

脇を腕で護りながらランスは2人を睨む。

「克蘭、バリー。お前らなら何を使うんだ？」

バーボートが2人の回りくどさに呆れ、手っ取り早く尋ねた。すると2人はバーボートに向き直りニヤツと笑う。

「せっかちなバーボート……まあいいや、その体躯を維持するには睡眠は必須。手伝おうじゃないか」

「中年になってもムキムキのゴツゴツでいてね……ね？」

「わかったわかった。必ず毎日鍛える……って俺はまだまだ中年じやねーべ！変な心配するなや！」

筋肉フェチな2人に妙な心配をされ、バーボートは喚いた。通常でさえ大きい声を更に響かせるので、耳が痛む……彼の筋力が衰えていない何よりの証拠だろう。

バーボートの呼気・吸気に関わる筋肉が動く様を想像しているのか、2人は叱られてるのに満足げな表情だ。

「……で？結局何を使うんすか……？」

暫く満足するまで喚いてもらい、ランスは本題に戻す。はっとしたバーボートが喚くのを止めると、2人は語り出した。

「まあ、“道具”じゃないんだよ」

「うん、生きてるからね…そろそろ活動時間じゃないかな？」

「…夜行性の生き物？」

「そう、匂いを辿ってもらえばいい」

「殿下方と面識はあるからね。賢いあの子なら匂いを覚えてる筈だよ」

「……そうだ、その手があったな…今なら客人の出入りは少ない。人目を気にしなくて良いしな」

でかした、と言いバーボートは大きな両手で2人の頭をグリグリ撫でる。2人は髪が乱れるのも構わず大人しく撫でられ、バーボートの腕を見ている。そんな3人の横でランスは1人、険しい表情で悩む。

（……俺って本当にアホなのか？昨日この方法で捜し出したばっかりなのに、すっかり忘れてた……いや、疲れてるだけだよな？……色々あったし……な？）

やばい、とつとと見付けてさっさと寝よう——ランスはそう決め、3人より早く歩き出した。

……………
……………
(……………ねむい……………)

マギーからやつと解散のお許しを頂いた覆面は、団舎の廊下をゆっくりと歩いている。

任務が続き、只でさえ疲弊しているのにマギーに容赦なく使われた——迎賓棟の部屋をざつと掃除し、客人を案内する。その後60人分の夕飯作りと片付けを手伝い、やつつと自分の夕飯を食べたのは夜中と呼べる時間になってからだ。腹が満たされ流石に眠気がピークに達し、頭に靄がかかった様に思考力を奪う。その上身体も重く感じ、自然歩く速度は遅くなる。

一応女性なので男性陣が住まう棟とは反対側に1人部屋を賜っている。

以前ヘレナも住んでいた頃は、ヘレナ目当てに忍び込む輩が絶えなかったが、覆面1人の今は静かなものだ。小規模ながら1棟貸切状態なので随分気楽に過ごせている。

そんな安らげる自室に向かいながら回転の鈍った頭でこれからの事を想う。

(ゲネルディバイ帝国か……まだ調べきれてなかったな……)

帝国は未だ侵略で国土を拡張、争いの絶えぬ国だ。現皇帝の代では落ち着いてきているが、各地でイザコザが絶えない。それ故入国

出来ても様々な制限や厳しい監視が付き、入れない地域も多々ある。

（任務の途中でちよいちよい抜けて調べるか……あの使節団の目なら誤魔化せる。万天討伐なら丁度いい……不自然でもないしな）

覆面は昼に使節団の面々——帝国軍第五部隊の動作を観察していた。要注意は数人だけで、出し抜くのは簡単そうだ。

（さて……何か手がかりは見付かるかな……）

覆面はそう纏めると顔を上げた。慣れた道を無意識に足が運び、いつの間にか自室に一番近い階段の前に立っていた。

上ろうと足を一步上げた時、階上から微かな足音が聞こえる。

（……？……誰だ？……）

気配を探ると複数いるようで、足音の他にボソボソと会話する声も耳に届く。

（アレクが腹枕迫りに来てヒースが止めてるのか？……それともジエニファールとアンナが心配して此方に来てくれたのか？……まさか客人が迷った振りで堂々と侵入してるとか？）

色々考え付くがどれもありそうで決めかねる。こんな時は普段不審者も入ってこないの、自室の鍵を掛けず開けっ放しにしていた事を後悔するが、もう遅い。

すっかり眠気も覚めた覆面は念のため気配を消すと、階段をゆっくり上っていった——

13話 捕獲

ススツと覆面は周りに浮かせていた炎を消し、音を立てずに階段を上りきると、壁にピタリと身を潜め廊下の奥に視線を送る。

すると、廊下の丁度半ばに位置する自室の前で動く人影が2つ見えた。その2人は灯りを持っていなかったが、星明かりに照らされ深緑の団服を着ているのが窺える。

自室の扉は薄く開き、前に立つ団員が部屋の中を覗いているようだ。

(…団員？何だ、私に用でもあるのか？……面倒だな…)

今夜は何せ客人のお蔭で慌ただしく、誰がどこに居るのか把握出来なかった。その為連絡しようにも居場所が判らず、解散が告げられてから態々自室に来たのだろうか……灯りも点けずに。

覆面が首を傾げていると中を覗いていた団員が振り返り、後ろの団員と何やら相談し始める。

取り敢えず身を隠す意味はないかと判じた覆面が再び魔法で炎を浮かべた時、団員達が勢いよく扉を開き一斉に部屋の中に入った。

(は？何だ？？)

今の開け方はまるで犯行現場を取り押さえるかの様だ——中に犯人がいる？

部屋からは声が洩れ聞こえてくるが、何を話しているか判別し難い。だが、声自体は聞き覚えあるものの様な気がする。

この声……覆面は潜んでいた壁から出て、自室へ向かい駆け出す。扉に手を当て中に入ると、想像通りの姿があった。

入り口付近にグレンとボルトツクが立ち、部屋の奥にある寝台の前にはメイを抱えたアーノルドと見慣れた本を手につつフィリス。そして、隅には脚が生えた大きな木箱……ロイスだろう、若干ふらついている。

「……何やってるんだ？」

覆面が声をかけるとボルトツクとグレンが振り返った。その隙を逃さず、木箱から玉が2つ転がりボフツと破裂音がすると、煙と異臭が部屋に充ちる。

「つつ!？」「お待ちなさいっ!」「ほっ」

バンっ、ガンっ、ゴンっと四方から様々な音がする中、煙を散らす為覆面は風を発生させた。煙は3方向——2ヶ所ある窓と、扉に流れていく。

(逃げた? 何故??)

煙が消え視界に入ったのは、大きな木箱の上に覆い被さるボルトツクと、窓から飛び下りるグレンの後ろ姿だった。

「ヴァン、殿下方を捕らえろ! ヒースが呼んでる!」ガタガタと暴れる木箱を抑えながらボルトツクが簡潔に説明する。

「……ああ、そういう事か……」

覆面は納得すると殿下を追う為、グレンとは反対側の窓に手を掛けると飛び下りた。

覆面が落下中、殿下方は真っ直ぐ団舎の中央へ走り出し、グレンがその後を追っていた。殿下方は逃げてる最中だというのに各々律儀にメイと本を抱えたままだ。やがて分岐路に差し掛かると二手に別れた。

グレンは後ろから覆面が続いてくるのを確認すると、覆面にフィリスを任せると合図を寄越す。

（この方向はまずいな……それに、あの本も）

フィリスはよりもよって人目につく方へ走っていく。このままでは使節団の警備兵に気付かれるかもしれない。

「止まってください！そちらに行つてはなりません！」
「キヤーっ、ごめんなさい！止まれせんわっ」

覆面が呼び止めるも、フィリスは捕まりたくない一心で大声をあげ更に速度を上げる。日頃から女性騎士団創設と己の殿筋をヘレナ達に近づける事を目標に、女官の目を盗み秘かに体を鍛えているフィリスの逃げ足は大したものだが、覆面の方が速い。徐々に距離は縮まっている。

（手荒な真似はしたくないな……だが近付けば足がもつれて転げるだろうし……ここは一気にやるか）

多少目立つかもしれないが安全第一。覆面は更に距離を詰めると、風魔法を利用し大きく跳び上がった。空中でまた大きく跳び、フィリスの前に降りて抱き止めようとしたが——着地予想点に男が走り込んできた。男は長剣を抜き、宙に浮く覆面を睨み付けてくる。

（あれは……）

覆面も咄嗟に剣を抜くと、体重を乗せ切り結ぶ。結構な重さのある一太刀を男は受け流すと、着地した覆面に斬りかかってきた。

覆面は身を屈めその太刀を避けると、男の顎に向かって跳ぶように蹴り上げる。蹴りを男は腕で防御し、すかさず後ろに跳び退き距離を取った。覆面も蹴りの勢いのままくると回転し、後方に跳び体勢を立て直す。

いきなり前方で始まった争いに驚いたフィリスは止まろうとしたが、人は急に止まれない。結局足がもつれズザザザと地を滑るように転倒し、抱えていた本も明後日の方へ飛んでいく。その音を聞いた覆面がフィリスに駆け寄ろうとしたら、男が強い声を発した。

「動くな。こんな夜中に少女を追いかけて回して恥ずかしくないのか……貴様それでも騎士か！」

覆面に吼えた男は、星明かりを受け輝く白い髪と怒りでつり上がった猫のような金茶の瞳が相まって、さながら白い虎を思わせる。端正な顔立ちと腹の底から吐かれた怒声も大きく迫力があり、髪と同じ白い鞘から抜かれた長剣を構える姿は、虎が牙を向けているようだ。

（こいつが使節団——帝国軍第五部隊長エリアス・グイロウ・ラバ

トニアか……皇帝の牙ねえ……面倒くさい事になったな)

覆面は男の正体に気付き、剣を構えながらも溜め息を吐く。エリアスの後ろからは供をしていた第五部隊の面々が走る姿がある。先程あげた声に気付き、いかにも怪しい覆面に追われる少女を助けようと部下を置いて真っ先に駆け出したのだろう――騎士としては褒めたいところかもしれないが早とちりだ。

(こいつが来なければ殿下は転けなかったのに……何て間の悪い奴。これが善意からでなければシバキ倒すところだ)

覆面は自分も関わっているフィリスの転倒をエリアス1人の責にし、誤解を解いて早くフィリスの治療をしようと剣を収めた。

「誤解があるようだ……私はこの方に無体な真似をしようとしたんじゃない。迷い込んだらしいから保護する為に後を追っていたんだ」

「嘘を言うな。迷っていたなら悲鳴を上げて逃げないだろう……怪しいな。その団服は本物か？覆面をした騎士など信用できるか……せめて顔を見せろ」

剣を収めた覆面に対し、エリアスは剣を構えたままだ……確かに覆面をした怪しい騎士の説得力は皆無だろう。長くなりそうな自身の身分証明より先にフィリスの治療を提案しようとしたら、斜め後ろから声が上がった。

「駄目ですわ！ヴァンの素顔を見ず知らずの者に曝すなんて、この

私が許しません！」

転倒し、悶えていたフィリスが顔を上げて訴える。痛みを耐えているので今にも泣き出しそうに目を潤ませながらもはつきり声をだし、震える足で立ち上がるうとしている。所々服が破れて痛ましい。

「…ヴァン？知り合いだったのか？」

フィリスが覆面を庇った事でエリ阿斯が首を傾げた時、ようやく部下が到着し——そのまま覆面を攻撃し始めた。

部下は6名。2人は後方から魔法で小さな風の刃を大量に飛ばし、残り4人は得物を携え覆面に斬りかかって行く。

「お前ら待て！」

部下の勝手な行動に気付いたエリ阿斯が制止を命じるが既に遅い。

「……隊長に倣って早とちり集団なのか？仲良いな……」

覆面はそう呟くと手を土の上に置き、魔法で高く分厚い土壁を作り部下達を囲む。風の刃が壁に当たり霧散し、突然現れた壁に剣を突き立てるもビクともしない。狭い囲いの中で魔法を放てば仲間に当たるので迂闊に使えず四苦八苦している間に、覆面は部下達が沈むほどの水を勢いよく中に注ぎ込んだ。

部下達が攻撃されているのをエリ阿斯は茫然と眺める。

やがて水が満ちると、覆面は再び土の上に手を置き、土壁を解除した。中からは大量の水とぐっしり濡れて横たわる部下達が出てくる。

「手荒くしてすみません……頭冷えましたか？」

覆面は、起き上がろうとする部下達と水が少々かかって濡れたエリ阿斯に向けて低い声で問う。謝っている体だが明らかに不躰だ。まだやるなら応戦すると言外に告げている。

「……ああ、冷えたよ。此方の勘違いだった……申し訳ない」

エリ阿斯は素直に謝罪し、頭を下げた。

（ふーん、石頭では無いんだな。素直すぎるのか？……ま、いいか）
「いいえ、此方も紛らわしい真似をして申し訳ございません。医務室と浴場へご案内しましょう」

素直に謝るエリ阿斯に応じ、声音を元に戻した覆面がそう告げ頭を下げていると、エリ阿斯が現れた方向から複数の足音が聞こえ思わず、ぱつと顔をそちらに向ける。

「ヴァン！何があった？」

「派手にやったな」

エリ阿斯が出て来たのは団舎中央奥にある執務棟。会議が終わってエリ阿斯が先に退出し声に気付いたという事は、当然時間差はあれど後から退出したアレクフォード達も騒ぎがあれば気付ける距離にいた訳で……。

（まずい。ここまでやっておいて何だが、アレクとマイケルはいいとして、ヒースはまずい……ってもう遅いか……）

私も頭が沸いていたのか——覆面は諦め、もう一度エリ阿斯に会釈するとフラフラと懸命に立っているフィリスに近付く。

「ごめんなさい、ヴァン……とても迷惑をかけてしまったみたいね……」

泣くのは卑怯だと知る王女は唇を引き締め硬い表情で謝った。自分の所為で争いが起きてしまい、大分落ち込んでいるらしい。

覆面は自分の上着をフィリスの肩にふわりと掛け、ボロボロに破れた服を隠すようにすっぽり包む。

「そうですね、今回の潜入は大失敗です。見つかった上に怪我まで負って……ですが他に怪我人はありません。せいぜい水をたらふく飲んだだけです……まあこんなものでしょう、今後鍛練して気を付ければ良い事です。……先程は庇ってくださいありがとうございます。怪我の治療をしたらヒースとマギーと一緒に怒られましょうね」

今回の逃走劇を評し、足に力が入らないフィリスを抱き上げる。するとフィリスは顔を覆面の肩に押し付けるようにして隠す。

覆面は駆け寄るアレクに向かい歩きだした。

………

「……で、何があったのです？ 態々使者の方々にもお越しいただいてるんです……経緯を残さず話さない」

今、食堂にて逃走者達は関係者に取り囲まれていた。各々お茶が振る舞われているのだが誰も手をつけず、重い空気の中ヒースが冷やかな声で問うと、逃走者達は詳細を語りだした――

ランスとバーボートの手から逃れた逃走者達は身を潜めながら、地図に記されたトマスの居そうな部屋へ向かう。途中危うい所もあり、時間は掛かったが何とかトマスを見つけた。

しかし、トマスは客人の馬や荷を預かる者として常に動き回り、誰かしら傍にいたので声も掛けられない。

暫く様子を窺うも状況は変わらないので、ある程度落ち着いてから出直そうと身を隠す場所を選んだのが、確実に夜まで人が来ない女性騎士用の棟だった。

以前来た時も入れなかった棟に向かうフィリスの胸は高鳴り、渋る2人を無視し、ぐいぐい引きずって行く。

今度も移動に時間がかかり棟に着く頃にはすっかり日も暮れていて、憧れの女性騎士用の棟に入ったフィリスは隅々まで見学しようとする。

一階にある浴場、様々な器具が揃う鍛練室、武器庫、簡易台所から便所に至るまで目を皿のようにして見て回り、とうとう居住スペースの二階へ上がった。

『姉上！いくらなんでも怒られます！』

『…殿下、止めましょうよ…』

女性用の施設である事に遠慮して、アーノルドとロイスは人目がないのに未だ木箱を被っている。そんな腰が引けた姿勢では最高潮に興奮しているフィリスを止める事なんぞ到底無理である。

『うふふ！鍵がかかっていなければ入っても良いという事よ！』

滅茶苦茶な持論を語り、地図に記された部屋に突入して行く——
フィリスの思惑通り鍵はかかっていなかった。

仕方なく姉の後を追って入室したアーノルドが見たのは実に閑散とした室内。備え付けと思われるクローゼットに机、椅子、本、寝台と姿見が一つ。女性の部屋なら鏡台やクッション、もう一つクローゼットがあっても良さそうなものだが、色も白黒茶の三色しかない。置ける広さはある分余計に閑散として見える。

一瞬部屋を間違えたのかと思ったが、フィリスが寝台に乗り上げ枕に顔を埋めるのを見て我に返った。

髪の毛でも落ちれば証拠が残る。止めさせようと慌てて木箱から抜け出し寝台に近付くと、フィリスは枕の下から一冊の古びた本を取り出す。

『日記？』

背表紙に400年前の日付が記されている本は丁寧に補強され、保存状態も良いが古さは目立つ。ページをパラパラめくると日付と共に綺麗な筆跡で文字が綴られている。

2人が本格的に読もうとした時トットと軽い足音が廊下から聞こえる。扉付近にいたロイスは驚き、部屋の隅に素早く移動したが――入ってきたのはメイだった。

『メイだ！久しぶりだね！』

化粧や動物が好きなアーノルドは、団舎に来る度トマスの後に引っついて回り、色々な生き物の世話をしてきたのでメイにも慣れたものだ。寝台から下りメイを抱き上げる。

『まあ、本当にメイですわ』

フィリスも本を閉じて抱えたまま寝台から下りると――扉が勢い良く開き、グレンとボルトックが入室してきた。

『殿下方！そこまでですわ。大人しく捕まりなさい！』

『ロイス、ヒースが心配してたぞ。そろそろ顔を見せてやらないか？』

――会食が終わり給仕をしていたヒースは皿を下げに一旦部屋から退室した。すると、副団長マイケルが書類を片手に向かってくる。会食の後は休憩を挟んで会議が行われるので、書類の確認だろう。

『ヒース、会議に使われるのはこれだったよな？』

『……はい、揃ってますね。この書類で間違いありません』

やはりマイケルの用件は書類の確認で、準備が順調に整っている事に安堵したヒースは会食中に聞いた話題を問う。

『迷子の仔熊は見つかったんですか？』

『は？仔熊？……ああ、迷子の事か』

仔熊とは、単なる迷子の事だったらしい。アレクも紛らわしい言い方をする。

『そついや言つてなかったな。殿下方とロイスが荷に紛れて団舎内に侵入して、逃走したんだと』

『…何ですって？』

『ランスとバーボートが報告に来了。着いて暫くしてから逃走したらしいからな…そろそろ出てくる頃だろ、食堂で飯食ってんじゃないか？』

それを聞いたヒースは皿を載せたカートをゴロゴロ押して食堂へ急いだ。既に仕事を終え食事をとった団員達がパラパラ自室へ引き上げて行く中、マギーにこっそり訊ねた所、まだ来てないと言う。先程ランスとバーボートが捜しに行った事も教えてくれた。

普段なら放っておくが、今は使節団がいる。何か起こる前に捕獲した方が良いと判断し、会議を控え身動きがとれない自身ではなく、食堂と一緒に晩飯を食べていたグレンとメイを肩に乗せたボルトツクに捕獲を命じた――

『今ならここまで入った事を内緒にしてあげますわ。諦めて捕まりなさい』

グレンがまだ抵抗しそうな逃走者達に再度告げると、背後から低く籠った声が聞こえる。

『……何やってるんだ？』

突然覆面が現れ虚を突かれたグレン達の隙を逃さずロイスが煙玉を使い、アーノルドとフィリスが窓から逃走した。大きい木箱を被ったままのロイスは逃げ出せずに、敢えなく捕まる。

その後フィリスはエリ阿斯達を捲き込み保護された。

メイを抱えたままのアーノルドは勝手知ったる化精小屋へ逃げようとしてランス、バーボート、双子達に遭遇しあっさり捕獲された。その時ランスに『殿下！何で俺から逃げたんすか！？俺の何処が不満なんすか』と大変暑苦しく詰め寄られたらしい――

決して自分が望んで忍び込んだ訳ではないのに、殿下方に振り回さ

れ敬愛する兄に無表情な上凍てつく視線で見据えられ、身が竦む口イス。一番騒動になり傷だらけで落ち込むフィリス。ランスが納得するまで言い訳をし、既に気力を使い果たしたアーノルド。

「「「ごめんなさい」「」」

三者三様に精魂尽きた様子で経緯を語り、最後は謝罪の言葉で締め括られた。

話を聴き終えた一同の視線は、自然と処分を下すアレクフォードに集まる。

「子供の茶番に捲き込んでしまい申し訳ありません、ラバトニア卿」

「いえ…勝手に勘違いしたのはこちらです、どうかお気になさらず。それに思いがけず手合わせも出来ましたし……噂通り強い騎士がいるようで、心強い限りです。厚かましいかもしれませんが、あまりお叱りになれませんようお願いします」

先ずアレクが迷惑をかけてしまったエリアスに謝罪すると、笑顔で減罪を乞われた。彼の部下達が覆面に水責めにされたというのに許すとは、言葉の通り強さを基準に考えているのだろう…根っからの武人らしい。

「…そうですね…ヒース、どうする？ラバトニア卿もこうおっしゃっている事だし、本人達も充分反省してるみたいだが？後はマギーに任せないか？」

「はあ……仕方ありませんね。マギーにきっちり絞られて、言い付

けに従うように。明日迎えが来るまで働いて貰います。いいですね？」

流石にヒースも客人がいる前でお説教はできない。一つ溜め息を吐くと騾の鬼マギーに任せる事で承諾する。

「じゃ、これで一件落着だな。解散！」

マイケルが明るい声でそう締めると、重い空気は去り一同は各々動きだす。

逃走者達も主に迷惑を掛けた人を捕まえ謝っている。

そんな3人を見ながら自分だけお咎め無しで済んだ事に気味が悪くてまだ座っている覆面に声がかかった。

「ヴァンという名で良かったか？疑って悪かった……今回の任で君のように強い騎士がいると心強い。宜しく頼む」

覆面に気付いたエリアスが去る前に再び謝罪しに来たらしい。覆面も立ち上がった。

「私でよければ尽力させていただきます……先程は寛大な口添えありがとうございます」

覆面がグレン達に謝っている殿下方に視線を送りながら言うと、エリアスも頷き視線を向ける。

「いや、私にも同じ年頃のお転婆な妹がいるので……他人事とは思えず、つい口を滑らせてしまった……どうにも弱い」

エリアスはフィリスを見ながら妹を思い出したのか、苦笑を浮かべる。

2人が見つめる中、フィリスがグレンに頭を下げようとすると「謝罪は要りませんわ…その代わり明日思う存分髪の毛を弄らせてくださいな！」オッホホホつと高笑いしながらグレンが告げるとフィリスも不思議そうな顔で了承する。いつも女官に髪を整えられているのでフィリスは軽く請けおったのだろうが…甘い。適当なところで止めに入らなければ…と覆面は心に留める。

「ああ、彼女が件の部屋に侵入されたという女性騎士か…明るい人ですね。彼女も強そうだ」

中性的な美貌のグレンを見てエリ阿斯が呟いた。フィリスに謝罪された上に話す内容が髪結いでは、女性と勘違いしても仕方ないかもしれないが。

（また早とちりしてる…ここで私が女だと話すとまたややこしくなるのか？…面倒だな、もういいや）

「蒼鷹騎士団にこなせなかった依頼はありません。どの団員も腕は確かです…ご安心ください」

覆面は曖昧に誤魔化す事にした。もう今夜は説得する気力は無い。

「それは頼もしい。君達の腕が見られるのを楽しみにしている。では、その為にも早く寝るよ」

失礼する…と断ってエリ阿斯は数名の部下と共に食堂を出ていく。

「ヴァン、いつからグレンは女になったんだ…」

「勘違いしたままだったな、良いのか？」

「貴女は何を考えてるんですか…また面倒だからとか言わないでくださいよ」

エリアスの気配が無くなると、一部始終を見ていたらしい腐れ縁達が声をかけてきた。

「面倒だった。もう説明する気力はない……別に問題ないだろ？機会があればちゃんと話す。グレンにも言っておくよ……」

覆面は3人に向き直り、肩を竦める。今までにもこういう事はあったので他の団員も心得ている筈だ……グレンも面白がっている為、いつ気付くか毎回賭けをしている。今回もそうなるだろう。

3人もそれ以上言及することはなく、本題に話を切り替えた。

「ヴァン、部屋で煙玉破裂されたらどう？あの臭いはどんなに頑張っても3日くらい消えない……そこでだ」

「ああ、その事なら問題ない。幸い棟に部屋は沢山あるし……それともフィリス殿下と添い寝しようか？護衛も兼ねて」

「いや、それじゃフィリス殿下が興奮して眠れないだろ。止めておけ」

「ヴァンにはもう少し易しい処罰を用意しました」

「……処罰？」

突然告げられた穏やかでない単語に覆面は思わず気の抜けた声を出した。

「ああ。聴いたところによると、見つかる切っ掛けになったフィリスの悲鳴はヴァンの呼び掛けに応えたからだろ？それに使節団にもやり過ぎだ……水は要らなかったらう」

「……………」

覆面は黙りこむ。確かに頭が沸いてやり過ぎた自覚はある。

「…で処罰はな、俺に腹枕をするだけで良い。今夜でいいぞ」
「何でそこで腹枕になるんだ…？」

「ヴァンには丁度良い罰だろ。取り敢えず皆寝れるし、手っ取り早い」

「アレクもやる気が出て一石二鳥です。好きでしょう？一石二鳥」

2人は生温い眼差しを向けて言う。マイケルとヒースにまで賛成されては騎士団内の決定事項は覆らない。

(…こいつらただ単に面白がってるな……まずい)

「…俺の寝台は広い。ヴァンもぐっすり眠れるさ…もう逃げられない、観念しろ」

アレクは晴れやかな笑顔で追いうちをかけると、まだ抵抗しようと鈍った頭で考えを巡らす覆面の背を押し、自室へ向かって歩いていった。

14話 朝（前書き）

流血を想像させる単語が出てきます。ご注意ください。

14話 朝

(…まぶしい…もう朝か…)

窓からほわつと暖かい春の朝日が差し込み、目覚めを促す。だがこの時期、寝台からなかなか起き出せない者は多い。さらりとしたシート、快適な気温、柔らかな日差し…全てが心地好い眠りへ誘い起き上がる気力を奪う。睡眠条件が良くて体力は充分回復しているのに、心地好すぎて逆に体から力が抜ける。四肢は痺れたように感覚が無く、頭も鈍く働かない。覆面も例に漏れず、この時期目覚める時間は遅くなる…任務中まともな寝床につけないので、団舎へ戻るとつい油断してしまうという理由もあるが。

(……からだが重い……?)

覆面はいつもの気だるさと異なる感覚に気付き、だんだん意識が浮上してくる。手足に力を入れて動かそうとするが、いつもより重く感じる…何より腰が全く動かせず、寝返りもうてない。

(……何かに巻きつかれてる……ってそうか、こうなるんだったな)

覆面は原因に思い当たり、全身の力を抜く。あまりにも久しい感覚なので、ボヤけた頭ではすぐ思い出せなかったのだ。2、3回深く呼吸してから重さの原因に片手を伸ばす。柔らかく上質な生地に包まれ、ゆっくり上下する何かに触れる…間違いない。

(…処罰が腹枕だったんだよな…)

——覆面は、昨日の晚食堂からずるずると背を押され、誰の私室よりも高い階にある団長アレクフォードの私室へ足を踏み入れた。衣装室、簡易書斎、居間、浴室、寝室が続き部屋になっていて、どの部屋も広い。王宮の私室と比べれば狭く数も少ないが、往き来しやすいのでアレクはこの適度な広さを気に入っているようだ。

アレクの私室へ着く頃には、言い訳するのが面倒になり覆面は全てを諦めた。入室すると部屋の主に断り、慣れた足取りで浴室に入る。以前にも任務後私室で腹枕をした事があったので、勝手知ったる他人の浴室を躊躇なく使う——恥じらいさえしない。誰が持ってきたのか周到に用意されていた覆面用の寝間着を着て髪を乾かすと、頭部を覆う布も替える。

浴室を出ると、アレクは覆面に背を向け書斎の椅子に座っていた。燭台の頼りない灯りの下で、真剣に資料を読んでいる。その資料が昼間サーライドから渡されたものだと思いき、興味をそそられた。だが、もう眠気も最高潮に達した頭では理解できないと思い、先に休むと告げ大人が6人は寛げそうな広い寝台に横たわった――

(…あれから記憶はないが…腹枕は提供したみたいだな)

覆面が腹の上を見ると、先ず朝日に透けた金髪が眼にはいる。アレクは顔の正面をこちらに向け、うつ伏せの体勢で眠っている。腹に顔を載せながらも、己の肩上部で覆うように腹部を固定し、長い腕を覆面の足と背に巻きつける――絶対腕は痺れているだろう。

余程気が緩んでいるのか口はうつすら開き、表情も若干幼い。王子の威厳はなく、無防備な自然体で眠っている。

(…相変わらずの間抜け面…しかも寝間着に涎をつけてくださりや

がったか。こんな顔を見せておいて、よく今まで女性達に幻滅されなかったな……噂も流れてないが、一応忠告するか)

すっかり目が覚めた覆面は、腕と足に力を入れぐっつと全身を伸ばす。そして両肘を寝台につくと、ゆっくり上体を起こした。アレクの体は斜めに傾くが、構わずスースー寝息をたてて眠っている。息苦しいだろうに大した根性だ。

アレクは任務中や戦時はパツと起きるが、普段どちらかというと寝穢い方なので起こすのも一苦労。毎回ヒースにつらつら叱られてやっと起きるが、今日はただでさえ忙しい。アレクを起こす時間も惜しく、ヒースを待ってももられない。

(よし、置いていこう)

覆面はさっさとアレクから離れようと身をよじるも、腕が外れない…アレクはご丁寧にも寝る前に拘束魔法を発する魔具を使用したようだ。罪人を逃がさない為に開発されたそれは、どんなに罪人が暴れても連行できるように役人の腕が罪人の背から離れなくなる仕組みだ。腕輪型の魔具を嵌めた役人の腕を切り落として脱走する事例が相次ぎ、今では使用されなくなった旧式の魔具だ…現存数も少ないはずなのに、何故今ここにあるのか。

(…確かに処罰だと聞いたが、私は罪人か!…こんな無駄な事に魔力を使うなよ)

「アレク!起きろ!朝だ、魔具を解除しろ!」

覆面はアレクの耳を引っ張り、声をあげる。ついでに鼻もつねってみる。

「イタツ…い?…」

「お早う、アレク。目が覚めたらなら魔具を解除して腕を外せ。」

アレクはうつすら眼を開け、覆面の顔をぼんやりと見上げるが、
ごそごそと体を動かし収まりの良い姿勢をとると再び覆面の腹に顔を埋める。

「…寝るなよ…今日演習の打ち合わせあるんだろ?ヒースも直ぐ来る。起きろ」

「~~~~ない」

「何だつて?聴こえない、はつきり話せ」

伏せながら話すアレクの声は、ぼそぼそと籠り聞き取れない。覆面がアレクの顔を無理やりグキッと音がしそうな勢いで上向かせると、ようやく目が覚めたのか寝起きの低い声で話しはじめる。

「演習じゃない。討伐だ…」

アレクは昨日の会食時に使者エリ阿斯から聞き出した事を全て説明した。

「そうか…万天異常発生为解决依頼だったのか」

全て話を聴き終えた覆面は押し黙る。アレクの頭を持ち上げていた腕の力が抜け、頭をぼとりと落とす。再び腹の上に突っ伏したアレクは、一度くわあ〜と大きく欠伸をし、上体を浮かせると覆面の足に巻きつけていた腕を外して肘をつく。覆面の太股に脇で乗り上げた姿勢で横臥し、手で頭を支え覆面の顔を見上げた。

「……ラバトニア地方は未だ調べてないんだろ？ 辺鄙な土地で住民は少ないらしいから、可能性はある。異常発生も関係ありそうだな」

「ああ。半年前、主が宝具に何かあったのかもな…アレク、私は単独で」「駄目だ。そんな事させたら俺はお前の家族に殺される。単独行動は許さない」

「時々抜けるくらいは見逃してくれるさ。ご先祖様からの命題だしな」

眼をすがめて拒否するアレクに覆面は粘る。

覆面の生家は一族の始祖から命題を課せられている。代を重ねるごとに命題やそれに準じる課題は増えたので、今では命題と課題の区別をつけず適した能力を持つ子孫が解決にあたるようになった。その内の1つに“万天発生の謎を解き撲滅せよ。発生次第討伐又は被害を防げ”というものがあり、今の代では主に覆面とツェリノアが担当している——覆面は他の課題も幾つか担当している。

代々の担当者が万天の発生に主と宝具が関わっているかもしれないと突き止めたので、覆面は主と宝具を捜しつつ万天を討伐する。

騎士団に所属している理由は、心配性な家族に1人旅を断固反対されたのと、隠れ蓑として有効で動き易いから。任務で様々な土地へ赴ける…今回の様に一般異国人では入れない地域に身分を疑われずに入れ、調べなくても討伐依頼が舞い込み一石二鳥。ひよんな事から幼なじみ達に事情はバレ、協力してくれてるので環境も良い。

「命題だからといって関係ない。絶対ツェリノアは視てるだろ。心配して結婚の準備放つて来るぞ、やめておけ」

「…まあそつなるか…」

「今まで通り討伐中気になる場所があったら言え。滞在を引き延ばすぐらいは出来る……どうせ元凶を絶たねば帰れないしな」
「わかった」

「地理に詳しいラバトニア卿もいる。昨日の件で名を覚えられただろが、正式に紹介するから後で会議室へ顔を出せ」

「ああ」

「彼はもう隠し事もないと思うが……帝国側はわからない、気を付けろ」

「御意」

「既に密偵もいるかも知れないからな、今晚も腹枕をしに来い。」

「承——って嫌だ。必要ない、処罰も済んだろ」

「処罰はな。だが、前に2回借りができたら腹枕するって言うてたろ」

「……ああ、でもまだ借りを作ってない」

覆面が顔を振って否定するとアレクはニツと笑い、視線を寝台の脇にある小型机の上に向ける。

アレクの視線を追い、一冊の古びた本を見つけた覆面は息を飲んだ。

「昨日落ちてたから拾っておいた。他の誰も見てないと思う——」
「先祖の日記だろ？中身を確認させてもらった」

「……忘れてた」

覆面は昨日フィリスが私室から持ち出し、転んだ時放り出してしまった本の存在をすっかり忘れていた。……400年前の担当者が記した万天調査の大事な記録なのに。

「それと、ツエリノアに頼まれていたサムノイラ産の花茶を贈っておいた。茶菓子つきで。昨日サーライドの件で少しむくれてたんだろ？ツエリノアは花茶が一番好きだからな……機嫌をとるには最適だろ」

「確かにそうだが……本当に贈ったのか？証拠は？」

「証拠はありませんが、証人ならいます。私が手渡しました……喜んでましたよ」

寝室の入口から聞こえた声に顔を向けると、アレクの着替えを持ったヒースが立っている。

「ヒース……ノックぐらいしろ」

「しましたよ。いくら待っても応答が無いので入らせていただきます……ヴァン、アレクを起こしてくれてありがとうございます。明日の朝もこの調子でよろしくお願いしますね」

ヒースはそう締めると、2人に身支度を整えるよう促した――

15話 朝から

覆面が腹の重みで起こされる少し前――

麓の町と団舎の間に拡がる森の中で、ロバを伴い歩く女がいる。

「バロ……お願い、団舎へ行こう」

自身も大きなリュックを背負いながら、鞍に荷袋を幾つも括り付けられたロバの手綱を力一杯引く。ロバのバロは女より自分が優位と認識しているようで、全く言うことを聞いてくれない。暴れはしないが、気ままに何度も足を止め道草を食む。バロは自分の行きたい方へ進むので、当初予定していた道を外れ森の中に入ってしまった。

「せつかく早く出てきたのに……遅くなっちゃう……」

一向に動いてくれないロバとの引つ張りあい疲れ女は膝に手をつき、頭を下げ黄土色の長い髪を揺らす。青々とした緑の眼で恨めしげにバロを見つめる年若い女性……名をローズマリー・フォン・リカルノフという。

（焼きたてパンが冷めちゃう……お肉、果物、バター、チーズ、小麦粉、採れたての蜂蜜。どれもマギーさんが待ってるのに……）

日頃お世話になっている婦人を想う。昨日の夕方ローズマリーが手伝うパン屋に発注された品は、急な来客用だという。大半の品は昨日のうちに届けたが、早朝に収穫した分を配達する任を仰せつか

った。元々彼女は早朝パン屋を手伝い、その後バターやジャムなどの軽い品を配達しがてら団舎へ手伝いに行くのが日課。今日は荷が重く、パン屋のおかみさんが気を利かせてロバを用意してくれたのだが…この有り様だ。

（いつも迷惑ばかりかけてるもの…こんな時ぐらい役に立たなくちゃ）

小振りながらリスのように真ん丸い瞳と頬に薄っすらそばかすが散る素朴な顔つき。その細身の体からは考えられないほど体力があり、いつも元氣一杯に動き回る。親しみやすい風貌で働き者な彼女は町人からも好かれていたが、誰も雇いたがらない……とある残念な弱点のせいで。

ローズマリーは上流階級出身だが、その弱点を克服するために別荘があるこの地で独り暮らしをしている。月に2度様子をみせると条件付きで、過保護な両親を説き伏せ許可を得た。以来その弱点…致命的なドジを直そうと躍起になっている。

ローズマリーの兄妹は優秀で優しい。口さがない者達に『良いところ総て兄妹が持っていていき、残りカスで末っ子は出来たんだな』と言われる度に庇ってくれた。

両親も『嫌な思いをしなくていい、お前が生きてるだけで幸せだ』と言ってローズマリーを家に囲い、何でも与えてくれた——が、それで良い筈がない。

ローズマリーにも夢がある。瞳の色から付けられた“ローズマリー”の名前に負けない淑女になる事だ。旧くからローズマリーは愛や貞節、友情、思い出の象徴として用いられてきた。

結婚式には変わらぬ愛の証として。葬式には忘れぬ記憶・思い出として。

集中力・記憶力・疲労回復、若返り、血行改善など様々な効果があり、料理、化粧水、薬、入浴剤、茶、リンス、香など用途は多岐にわたる。

丈夫で育てやすく年中葉を繁らせ、色々な効能で生活を支えるローズマリーは広く親しまれている——そんな存在でありたい。せめて誰の迷惑にもなりたくない。

そんな想いから、致命的なドジのせいで行えなかった“花嫁修行（箔をつけるため王宮や有力貴族の下で働く。行儀見習い）”の代わりに甘やかされない環境で修行しようと、身分を偽り町娘として暮らす…尤も町民達の中には感付いている者もいるが。

初めの頃はどの店もローズマリーを雇っていたが、割った皿は星の数、料理を運べば引っくり返す、1日3度は躓いて転ける。何かに呪われているのかというぐらい毎日ドジってしまう。『良い娘なんだけどね、うちも商売だから』と1日で解雇され続け、町中の店が雇わなくなった。

それでも彼女は諦めず、無給でいいから仕事を手伝わせてもらえないかと懇願して回ったところ、熱意に折れたパン屋と——噂を聞きつけた団舎管理人夫妻が受け入れてくれた。

相変わらず失敗するローズマリーを根気よく指導してくれ、毎日鍛えてもらってる。余ったパンや食事も頂け本当にお世話になっている。

（…忙しいって言ってたわ、早く行って手伝いたいのに…仕方ないわね）

ローズマリーはリュックから自分の朝食用である蜂蜜が塗られたパンとりんごを取り出しバロの目前にちらつかせる。

「ほゝらあなたの大好きなものよ！美味しそうでしょう、欲しければ大人しく言うこと聞いて」

バロは道草を食むのを止め、鼻面を伸ばしてパンに食いつこうとする。すかさずローズマリーはさつとかわし、手綱が伸びる限界まで体を離してバロを団舎方向へ誘導する。

「ほらほらこつちこつち。付いてきてね」

パンを小さくちぎりバロの前に転がすと、全く動こうとしなかったバロはゆっくりと歩き始めた。

「よしよし。その調子よ」ローズマリーは時々パンをちぎりバロに与えつつ、まだ日が差し始めたばかりの森を団舎へ向かい進む。

（朝食までには届けられそうだな…）

早く出発してよかった…ようやく軌道にのり、この時ローズマリーは安堵の息を吐いた。

.....

（…朝か…）

エリアスは団舎迎賓棟最上階に逃えられた部屋で目を覚ました。まだ日の出からさして時間が経っていないようで、部屋の中はぼんやりと明るい程度だ。

（久しぶりに日の出より遅く起きたな…）

このところ故郷の惨状を想いながら強行軍で旅をしていたため、碌に眠れない日々が続き、日の出より先に起きるほど睡眠時間は短くなっていった。眠っても意識が表層を漂い、休めた気がしない。

とはいえ、久しぶりにとれた温かい食事とフカフカな寝台のお蔭で格段に身体は癒えた。

軽くなった身体に充足感を覚えたエリアスは寝台から身体を起こし、素早く身仕度を整える。

（まだ少し早い…もう少し寝かせてやるか）

今日も仕事は山積みだが、久しぶりにまともな寝床にありつけた部下を起こすのも躊躇われる…外で早朝稽古でもしようかと思案している、間を見計らったかのようにトントンツと扉を叩かれた。

「誰だ」

「貴方の大事な副隊長エンリルです。入ります」

誰何の声に、なんとも明るい声が返ってきたと思ったら、相手は勝手に扉を開け入室してしまう。

「おっはようございま〜す！今朝のご機嫌は如何でしょ」

「…お前が来るまでは良かったよ。勝手に入るな馬鹿者」

「嫌だな〜隊長と俺の仲でしょうが。今更隊長の裸くらい何ともありませんよ…それとも恥ずかしいとか言います？やっぱり可愛〜」
「黙れ。俺がいつお前に裸を見せた…いい加減、寒い冗談はよせ」

入室してきたのは、一見爽やかな好青年風の容姿を持つ帝国軍第五部隊副隊長エンリル・ライ・カイルノ。すっきり整えられた艶やかな濃紺の髪と切れ長の黒眼、筋の通った鼻梁…外面は抜群に上

品だが、口を開けば冗談しか言わないふざけた男だ。エリ阿斯とも長い付き合いで、確かな実力はあるため今の地位に就いている。

「へいへい。…で、いつも早起きな隊長は、この後どうするおつもりで？ 約束の時間にはまだ間があるよな」

「…お前は用があつて来たんじゃないのか。話せ」

「いや、予定より早く起きたお優しい隊長が供もつけずにふらつと外に出ようとしてないか確かめに来たんだが…当たったな。散歩でもする気で？」

「…散歩ではない。稽古だ」

エリ阿斯は憮然と言い返す…昔からエンリルには行動を読まれる。それが悔しい。

「どっちもほぼ変わんねーっしょ…あーやだやだ。ここの誰かと手合わせ狙ってるだろ。昨日の件で変に煽られちゃって。やめとけやめとけ、また騒ぎを起こす気かよ」

「…別にそんなつもりはない。いい天気だから外でやろうと思っただけだ」

エリ阿斯は気まずそうに顔を反らすと、麓の町まで見渡せる大きな窓に近づく。迎賓棟からの景色は見張らしが良好な造りになっている。

「左様で。ま、旨い朝飯の前に騒ぎだけは起こさ…どうしたよ、隊長？」

「あれは——万天！？」

窓から景色を見下ろしていたエリ阿斯は突然硬直したかと思えば声をあげ、血相を変えて窓から外へ身をのりだし、飛び下りてしまふ。

「オイッ待てっ！1人で行くな」

エンリルが慌てて窓から外を見ると、エリ阿斯は風魔法で衝撃を和らげ着地し、真っ直ぐ森へ走っていく。進む先には黒い生きモノから逃げる女とロバ。

（あれは——またかよ……）

瞬時に状況を確認したエンリルは、後を追うため扉に向かう。風魔法が使えないので最上階から飛び下りる芸当などできない。地道に外へ続く道を急いだ——

.....

——少し前、森。

（慌てないで私。確か目を逸らしちゃいけないのよ……）

ローズマリーは命の危機に直面していた。いつも己のドジの所為で予想外な出来事に遭うのは慣れているが、今回は本当にまずい。1つ判断を誤れば命はない。

（なんでいつもこうなるのよ……）

ローズマリーはあまりの事に自分のドジを呪った。

——先程。足場の悪い斜面をジグザグ登りあと少しで森を抜け団舎へ着くというのにバ口が急停止し、長い耳をピクピク動かし辺りを

警戒しだした。ローズマリーは早く着きたい一心で手綱を思いつきり引いたら、バロが暴れ手綱を振り回し、引きずられたローズマリーは斜面を勢いよく転げ落ちてしまった――

落ちた先で身体を起こしたローズマリーから10mほど離れた所に、頭を下げて上目づかいに睨み付けてくる四つ足の黒い生き物がいる。体高は80cmぐらいで、体長は190cmほどあり、重さはゆうに200kgはありそうな巨体。ローズマリーなどいとも簡単に潰せそうな太い足からは攻撃的な先が尖った太い爪が覗く。

（……死んだふりをすれば良いんだっけ？…トマスさんは遠ければ有効って言ってたような…あれ？）

臨戦態勢に入り、警戒音らしきフツフツフツと荒い息をだす黒い生き物と視線を合わせたまま混乱した頭で考えるが、対処法が浮かばない。

（りんごと蜂蜜パンは落としちゃったし…鈴を鳴らして脅かすのが良いんだっけ…って鈴どこ？刺激しないで、目を合わせたままゆっくり後退するんだっけ？）

全く考えがまとまらない。黒い生き物…熊に遭遇した場合の対処法も教わったのに、いざという時ほど頭は真っ白になる。

動けないローズマリーの斜め後ろでガサツと何かが動く音がする。咄嗟に振り向くと、体長60cmほどの小さな仔熊が木に登ろうとしていた。

「仔熊!？」

ならあの成獣は子連れ之母熊…仔を守ろうと気が立っている筈。再びバツと母熊の方を見ると、カチカチカチと奥歯を鳴らし突進し

てきていた。

「いやあー！」

あまりの恐怖にトマスの教えも忘れ、熊に背を向け団舎へ走る。
とにかく助けを呼ぶしかない、無我夢中で斜面を駆け登った――

.....

.....

「バロ、走ってー！……ってもうそんな所！？」

斜面を登ったローズマリーが目にしたのは、薄情にも既に森を抜け、団舎へ走り出していたバロだ。あんなに渋っていたのに逃げ足は速い。

斜面の途中、何度も熊に追い付かれそうになつては、魔法で水をぶつけて回避したが、ローズマリーの魔力は微弱で足止めにもならない。もう魔力も限界だ。

鈍そうな見た目に似合わず走る馬にも追い付けらしい脚力で熊はどんどん距離を詰める。

（もう駄目、追い付かれる……最後の手段は腹這い！） 逃走・攻撃を諦めたローズマリーは最後の手段と教えられていた防御の姿勢をとる。うつ伏せになり、両手で頸を覆い、リュックに背を守ってもらう。頭と足はどうしようもないとして、頸動脈と内臓を攻撃されないよう防御する……多くの動物もそうだが熊はまず首を狙うらしい。

（……せめて命はとらないで……）

恐怖から震えが走り、目を閉じる。ザザッと草をかき分け近づく音と、ヴォッヴォッと熊が吼える声が間近で聞こえ、咄嗟に顎を引き、肘を寄せて前腕で耳を押さえた——音と光を遮断し、全身に力が入る。

（ごめんなさい——）

緊張状態の時ほど一瞬が長く感じる。身体は熊の攻撃に備えるなか、頭に色々な過去が過る——ローズマリーが走馬灯のように迷惑ばかりかけてしまった人々を思い浮かべ、心の中で謝罪した時、強い風が背を撫でた。

（！！）

遂に熊が来たと思ったが、何の痛みも感じない。そして何故か、近くの大地が一度大きくドンッと揺れる震動が伝わってきた。

（………）

（——…？）

そのまましばらく待っても何も起こらない。微かに話し声が聞こえる気がして、気になるけれど目を開けるのも怖い。どうしよう…と逡巡していると頭を優しく撫でられた。

（熊が撫でた？これから攻撃！？）

やっぱりまだいるんだ——と、再び緊張するといきなり腰を掴まれ身体を持ち上げられた。

（ひっくり返して内臓から噛むつもりね。それは駄目！）

そう思ったローズマリーは身体を振り、後方の熊に向かって暴れた。足で蹴りつけ、腕を振り回す――熊のドアップは怖いので目を閉じたまま。

「止める…、暴れるな」

迷惑そうな男性の低い声が聞こえ、ローズマリーは抵抗を止め目を開いた。白髪の男性が渋い顔で腰を支えてくれている。

「えっ……？」

状況が理解できず、ローズマリーは男性の顔を凝視する。金茶の瞳が眇られ、どこか不機嫌な猫に見えた。

「もう大丈夫だ。熊はそこで気を失っている」

顎をしゃくって男性が示した先には熊が横たわっている。それを確認したローズマリーは全身の力が抜けた。

「おいっ？立てるか？」

急にくたつとなったローズマリーに声をかけるが、気を失っているようで返事がない。

エリアスは溜め息を吐くと、ローズマリーの背からリュックを降ろし、抱え直す。

「隊長――それ、無断でやると女性に訴えられるぞ」

「……………そうなのか？」

団舎方向から口バを捕獲したエンリルが近づきながら大声で忠告

してくる。エリ阿斯はその内容に首を傾げながらもローズマリーを抱えたまま歩きだした。

15話 朝から（後書き）

ローズマリーとクマに登場してもらいました。何冊か資料を参考にしましたが、間違っているかもしれません。あまり信用なさないようお願いします。

クマは時速60kmの速さで走れると紹介されましたが…あの巨体で本当にそんなに速いんでしょうか…。

16話 熊と筋肉

降り注ぐ朝日を背に受け、雲や山が煤けた群青色に染まる頃。

団舎山側に広がる畑では4つの人影が生き生きと動く。影の主達は各々畝の修復・水やり・収穫・雑草抜きと、農作業に勤しんでいるようだ。

「ケント、こちらはどうです？」

「…まだ駄目。こつちより、あつちの10株掘つて。それで最後」

「わかりました」

ニコツと音がしそうな笑顔で了承し、第四王子アーノルドは足取りも軽く指示された畝へ向かう。長靴を履き背には大きな籠、土で真っ黒な手袋をはめ所々汚れた作務衣を着ているのに、端々から気品が漂う。額を伝う汗すら耀いて見えるから不思議だ。

（流石は王子。無駄に姿勢が良い…）

ピンと背筋を伸ばし、膝を曲げ腰を折って優美にジャガイモを収穫するアーノルドをケントと呼ばれた少年は眺める。

ケントは小柄で華奢な体躯と白桃に似た色合いの金桃色の髪をした可愛らしい外見の少年だ。弱冠8歳。

2歳の時から母アンナと共に騎士団で働く最年少の使用人。騎士

達からは息子同然に可愛がられちよつかいをかけられる。彼らをあしらい、主にトマスを手伝う内に様々な知恵をつけたケントは、年齢の割に落ち着いて周りを観察できるようにまで成長した。マギーに逆らえないアレクフォードや強面の騎士達を見て育ったので、誰に対しても怖じ気づかない剛胆な精神まで備えている。

（…このままで良いのかな）

黙々と雑草を抜きながらアーノルドとケントの会話に聞き耳をたてていたロイスは思う。身分や年齢に囚われず敬語を遣うのはアーノルドの美点で、育ちの良さから癖になったもの。だが、成長途中の薄い身体や物腰柔らかな所作と相まって王族としての威厳や迫力に欠く。人によっては軟弱者と蔑みそうだ。今の会話もアーノルドの方が格下っぽい。

（アレクフォード殿下みたいに砕けた口調の方がいいかな……でも、兄上は絶対あははなるなと言ってたし…）

昨晚解散後に兄ホーリーヒースの部屋でコンコンと説教をされた際にも、散々“アレクフォードのように育てないこと。反面教師にきなさい”と口を酸っぱくして言われた——どうすれば良いというのか。朝からロイスの表情は冴えない。

「もう充分でしょう。調理場へ運ぼうか」

トマスの号令に少年達は作業の手を止めた。昨日のお詫びとしてアーノルドとロイスはトマスを、フィリスはマギーを朝早くから手伝っている。お詫びというか団舎に忍び込む度手伝っていたのでいつもの流れだ。

少年達がトマスの傍に集まり、収穫物を積んだ籠や荷車を押して

団舎脇の入り口へ向かっていると、団舎2階の窓から人がヒョイッと飛び下り、走り寄って来る。

「っはよっす。手伝いますよ」

そう挨拶し、颯爽と現れたのはランスロットだ。爽やかな言動とは裏腹に、目の下にうつすら隈を作った彼は心なしかヨレヨレしている。いつも澁刺とした気力を感じさせる分際立つ。

ランスは合流するなりトマスの背負う大きな籠を引き受け、更にはアーノルドが引く荷車を後から押す。2階から飛び下り、衝撃を受けたはずの足はきびきび動く。鍛えられた肉体は流石騎士といえるが…妙だ。疲弊している印象と動作があってない。

「お早うございます…?」

ランスに挨拶を返しながらも、違和感を感じたアーノルドは首を傾げる。隣で荷車を引くロイスも同様に。

「ランス…やっと終わったんだ。とろいね」

戸惑う2人を差し置いて、訳を察したケントはぼそりと呟く。

「はっはっはっ、何のことだ？俺は寝起きなだけだ、生意気坊主。ランスさんと呼べ」

「新入りランス君。生意気坊主はそっちだよ、先輩には敬語を遣いなよ」

「ダレが先輩だ。団舎生活歴じゃお前に負けるが、人間歴は俺のが先輩。社会は残念ながら年功序列。殿下を見習って少しは敬語を遣えて」

歩きながら突如始まった口論に、名前をあげられたアーノルドは振り向く。その表情にはランスが現れてから続く戸惑いの色が浮かぶ…定着してしまいそうだ。

「ランス君こそ教えてもらえば？、あんたのは敬語もどきじゃん。その歳でまずいんじゃないの…貴族のくせに」

「うつせえ。敬意が伝わればいいんだよ、ほつとけ」

「敬語は表面的な社交以外では心から尊敬できる人に遣うか、嫌いな人と距離を取りたい時に使ったってね。インギンブレイで挑発する場合もあるってヴァンが言ってた。…ランス君のはどれにも使えないじゃん。只の馬鹿ってまる出しただけだよ、お客人とあんまり喋らない方がいいんじゃない？ナメられるよ」

得意気に受け売りを披露するケントは憐れみと同情を込めた視線を送る…実に小憎らしい。

「ヴァンさんは8歳児に何を吹き込んでんの…慇懃無礼って、お前意味わかってねーよな。…殿下、そんなに俺の敬語って変すか？ナメられます？」

生意気な8歳児を黙らせようと、王宮で日常的に貴族達と敬語を交わす王子に判断を仰ぐ。

「……………すみません、個性的としか……………」

アーノルドは一瞬ランスと視線を合わせるも、直ぐに外して眼を泳がせた。

（俺ってそんなに…駄目？）

素直すぎるアーノルドの反応を見ていられず、ランスは顔を上げ

目を細めると視線を遠くへ飛ばす。奇しくも件の客人達が泊まる迎賓棟が眼に入った。

（――あれは――）

「わかったらランス君、そっちの迎賓棟には近……えっ」

突然硬直したランスの視線を追ったケントは、400mほど離れた迎賓棟最上階から人が飛び下り、ふわりと着地すると物凄い速さで走って行くのを目撃した。

「……？」

ケントの声を聞き、トマスとアーノルド、ロイスも迎賓棟から走り去る人影に気づく。

「あれは、ラバトニア卿ですな」

「何かあったみたいですね。ちょっと行ってきます」

トマスに断るとランスは荷を下ろして一目散に駆け出す。厄介寄せ体質なため突発的な物事に馴れ、頭の切り替えは早い。

「――すみませんトマスさん、僕も行きます」

「えっ、殿下おやめください！」

ロイスが慌てて制止するが、アーノルドは素早く身を翻してしまふ。ロイスも籠を背負ったままアーノルドの後に続く。

（結局手伝ってないし、また厄介事喚んでるし……やっぱり駄目だ。尊敬できないよ、ランス君）

ケントは走り去る3人の背を眼で追いながらランスをそう評価した。

.....

「...で、行ったら熊が倒れてて、ローズマリーとロバが保護されてたんですか」

「はい。ラバトニア卿は一撃で熊を昏倒させたようです。女性も気絶してしまいましたが、双方共に大きな怪我はありません」

遅い昼食をとっているボルトツクなどの騎士達に乞われ、アーノルドは朝方起こった騒動の顛末を説明している。手元には豪快に盛られた大根サラダ、野菜スープやパン、鶏肉の香草焼き等が並ぶ。

昼飯時を過ぎた食堂は、普段より多少人は多いが混雑していない。30人掛けの木製長机が3つ設置され、空席もチラホラある。騎士達はアーノルドとロイスを取り囲むように席に着く.....隅にある一席だけはお菓子が占拠しているが。

「あれほど間近で熊を見たのは初めてです。可愛かった...」

無類の生きものの好きであるアーノルドは、倒れている熊に近付き傷の具合を調べた。騒ぎを聴き駆けつけた騎士達が慣例に従い、人を襲った熊を殺処分しようとするのを体を張って阻止し、目覚めた熊が無事に森へ帰るまで守った。

熊が森へ入った途端、仔熊がひょっこり現れじゃれあうのを見届

けると、渋る騎士達を引き連れ兄アレクフォードに熊を処分させないよう直訴した——今回の事で人を恐がり、絶対人里に近付かないだろうから、見逃してくれと。

常でない弟の必死な説得にアレクは折れた。次に人前に現れれば容赦はしないと条件をつけて。

「襲ってきた熊って成獣だったんだろ……仔ならわかるんだが、可愛いか？あんなゴツイの」

思考を飛ばすアーノルドを見て、輪に加わっていたバーボートが不思議そうに話す。

「わかってないねバーボート。ゴツイからいいんじゃない。あの巨体を支える強靱な足の筋肉、盛り上がったでっかい胸筋、硬い樹も剥ぐ咬筋、ずんぐりむっくりな首……見事な筋肉の集大成じゃないか、殿下が褒めるのも無理はない」

「そうそう。おっきいのに見かけ倒しじゃなくて、実用的なところが良いよね……理想的。バーボートっばいよね」

「俺っばいって……熊っころと一緒にすなや、俺はあげな外見じゃねえ」

アーノルドの嗜好を曲解したスタンシー兄弟に熊と同列扱いされたバーボートは不満そうに顔を歪めた。……確かに岩山の騎士と称される事もある厳つい容姿の彼は、猛獣と同じくらいの迫力がある。

「そうだったね、バーボート。君の筋肉は熊のより素敵だよ」

「うん。形から質まで最高級の肉だね……はい、僕の鶏肉あげる」

「そうじゃねえべ……」

両脇からバーボートの皿に鶏肉が盛られる。食事時間があえば兄

弟はバーボートの両脇に陣取り、勝手に食生活の管理です。

「成長期のお前らが食べ、今のうちに骨と筋肉しっかり育てろ」

「え」

筋肉は好きだが、偏食で鍛練嫌いの2人はどちらもヒョロッと薄い体格だ。

不平を唱える兄弟とバーボートの間で鶏肉の押し付けあいが始まった。

（筋肉…ゴツイ…迫力）

ロイスは3人のやりとりをじっと凝視する。特にバーボートの動きを眼で追っているようだ。

「ん？どうしたロイス。鶏肉が欲しいんだったら俺のをやるよ」

ロイスの様子に気づいたボルトックが自分の皿から分けてやろうと腕を伸ばした。ボルトックの腕がロイスの目前に迫ると、ロイスはその腕をハシッと両手で掴む。

「ボルトックさん…大きな筋肉をつければ、自然と迫力とか威厳とかが身に付きますか？」

「……まあ、多少は増すと思うが……？」

急に腕を掴まれ、硬い表情のロイスに問われたボルトックは、面食らいながらも律儀に答えた。

（これだ。言葉遣いを変えられないなら、外見で表現すればいい。軟弱だなんて言わせない…そうですよね兄上！）

「ボルトツクさん、お願いします。殿下をアレクフォード殿下よりムキムキのゴツゴツに鍛えてください！できればバーボートさんを超えるぐらい」

「…アーノルド殿下をバーボートよりもゴツく…」

ボルトツクは思わずアーノルドとバーボートを見比べた。ロイスの唐突な願いは周りにも聞こえたようで、誰もが目を点にしている。内容の所為もあるが、常に大人しいロイスが、珍しく目を輝かせて積極的な行動をとったのにも驚いたようだ。延々と鶏肉の押し付けあいをしていた3人の動きも止まって静かになる。

「基本はアーノルド殿下でバーボートの体か…良いな。多分楽士や詩人達がこぞって歌をつくるだろうな…歴代王族のなかで一番爽やかで可愛い巨漢だって。語り継がれそうだ」

「ヴァンさん」

何時から居たのか、本日は紫色の細長い布で頭部をぐるぐる巻いた覆面が、お菓子に占拠された席に寄りかかっていた。

「…可愛い巨漢…筋肉ムキムキでも可愛いものですか？」

「ああ、可愛い。童話にもよく登場するだろ？動物好きで力持ちな脇役。大抵愛される役どころだし、アーノルド殿下は王宮内可愛さ番付でいつも上位に入ってるからな。筋肉ムキムキになるうが変わらず可愛がられるさ」

確信をもって言い切られた。希望を呆気なく断たれロイスは愕然とする。

「可愛いだけじゃこ」「王宮内番付って何ですか!？」

まるんです…と続くはずだったロイスの声をアーノルドの大声が遮った。熊の記憶を反芻していた彼は、覆面の耳慣れない言葉に引き戻されたらしい。

「ハハハ。何でしょうね。大したものではありませんよ、お氣になさらず」

「……本当ですか？」

アーノルドは言葉を濁す覆面を問い詰めると決めたようだ。のりくらりとはぐらかし、明確な答えをくれない覆面に詰め寄っている。

一方、機を逃したロイスは未だボルトツクの腕を掴んだまま固まっている。

(“困る”って言おうとしたのか)

ロイスの言葉を間近で聞いていたボルトツクは、何となく事情を察した。王子付きの侍従として若いながらに重い責任を負うロイスの悩みは尽きないだろう。

名家出身で同じく王子付きの優秀な兄と比較され続ける上に、この生真面目な性格では息抜きもできなそうだ…

(下手に口出しして気を遣わせるより、適度にガス抜きさせるか…まあ、あの兄がついているからそれほど心配も要らない。余計な世話かもな)

ボルトツクは掴まれている方の腕でロイスの頭を優しく撫でる。頭への刺激で硬直が解けたロイスがボルトツクを見上げ、掴んで

いた腕を放すと、ボルトツクは話題を変えるべく覆面に向き直った。

「ヴァン、会議終わったんだろ、どうだった？」

朝覆面がアレクフォードの部屋に居た時熊騒動の報告を受け、処
理仕事が増えたヒースにその場で補佐を命じられた為、覆面は今ま
で会議に出席していた。

「まだ終わってない。今は昼休憩でな、後でまた再開する」

アーノルドに詰め寄られていた覆面は、逃げる機会とばかりに話
のつてきた。アーノルドは渋々引き下がる…まだ諦めてはいない
ようだが、任務の話を邪魔するような真似はしない。引き際を弁え
ている。

「この後もあるのか…長いな」

ボルトツクの呟きを皮切りに、騎士達は今後の任務について話し
出す。

その間に覆面は食堂をキョロキョロ見渡し、目的の人物がいな
いとみるやロイスに訊ねた。

「ロイス、フィリス殿下は一緒じゃないのか？もうすぐ迎えが着く
と知らせたはずだが…」

昨日のうちに王宮へ殿下方保護の一報を届け、更なる援軍と共に
迎えが来る手筈になっている。先程早馬が到着した。

早馬の知らせを告げた時3人一緒にいると報告を受けていたが…

姿がない。

「フィリス殿下は身支度を整えに行かれました。アンナさんの部屋にいらっしやいます」

「アンナなら安心なんだが……誰か、グレンが今何処にいるか知ってるか？」

覆面の問いに皆顔を左右に振る。

「昼食前から見てないな」

「遅かったか……」

覆面は悔しげに呻き礼を言つと、足早に食堂を出ていった。

17話 見送り

（会議だろうが途中で抜ければよかった…）

食堂を後にした覆面は、使用人の住まう棟にあるアンナの自室へと急ぐ。

現在トマス一家とアンナ一家、それにルシアの計6名が住まう棟は、元々50人ほどが住める規模で建てられた為、空室が目立つ。いつその事、同じく空室ばかりある女性騎士棟と一緒にしてしまうかと団長アレクフォードに進言したが“いずれ埋まるからこのままで良い”と却下された……が、どちらも一向に埋まる気配はない。

（無駄に広いんだよね…）

急いでいる今、ガランとした長い廊下は無駄としか思えない。覆面は、焦りながら2階へ足を進めた。

住居は、人が住まないと傷むので2階の全部屋をアンナ一家が使用している。

アンナとケントの自室を除き、ほとんどの部屋は衣装作りが趣味であるアンナの作品で溢れている。使用人達の私服はほぼアンナお手製で、色々な用途の服を仕立てるアンナは、そんじょそこの針子に負けない腕前をもつ。

採寸から試着、化粧まで行える大きな鏡が置かれた部屋もあり、フィリスの身支度はそこで行われている筈だ。覆面も連れ込まれた事があるので、迷わず角にあるその部屋を目指す。

覆面が2階の廊下を進んでいると、角部屋の開かれた扉から言い争う声が聞こえてくる。

「貴女のセンス、案外大したことありませんわね。桃色のドレスだなんて…女の子だからって安直ですわ。歳ね、貴女」

「なんですって……あんたに言われたくないわ、1つしか変わらないでしょうが！」

前者の艶っぽい低音の持ち主に、後者の力強いアルト声が噛みついた。どちらも張り合うような凄い声量なので、廊下の端まで声が響いている。

（まだ服装の話か。間に合ったな）

内容に安堵した覆面は、歩む速度を緩めた。角部屋の前に着くと開け放たれた扉に手をつき、中を覗いてみた。

「此方のコバルトブルーの方が似合いますわ！瞳の色にも、この髪飾りにも合いますもの。絶っっ对此方になさい」

「何言ってるのよ、髪飾りより生花を挿した方が断っ然っ可憐よ。瑞々しい14歳の殿下を引き立てるわ。毛フェチの癖にわかってないわね。あんたこそセンスないじゃない」

部屋には大量の髪飾りを手に持つグレンとドレスをフィリスにあてているアンナ、2人の間に座るフィリスがいた。鏡の前に座らされ、オロオロしているフィリスはもとより、いさかう2人はお互いしか目に入っていないようで、扉に佇む覆面に気づかない。

アンナは普段、淡い桃色の髪にタレ気味の茶色い瞳をした優しい顔つきなのだが、今は眼を吊り上げ優しい面影はどこにもない。ケントを育てる傍ら仕事をこなす彼女は、騎士達にとって嫁に行った姉のような存在である。

いつもは気配り上手と評判なアンナだが、趣味を貶されて目の前の中性的な美貌の持ち主以外に目がいかないようだ。

(…あれでは風邪を引くな)

昨日迷惑を掛けたという負い目と、グレンと髪結いの約束をしたフィリスは仲裁に入って良いのか悩んでいるようだ。湯上がりの薄い下衣に簡易ローブで包まれただけの格好で座っている…湯気も消え、肌寒いだろうに。

「――グレン、アンナ。そのままだと殿下が風邪を召されてしまう。

……そろそろ決めてくれ、殿下の好みも取り入れて差し上げてな」

覆面は、睨みあう2人が黙るのを見計らって声をかけた。若干いっつもより声を張るのも忘れない。

「ヴァン！」

「あら…私としたことが」

「えっ…あっ！」

6つの瞳が一齐に覆面を振り返った。

………

結局。

フィリス本人の好みにより、コバルトブルーのドレスに生花を髪に挿す事になった。

『ヴァンとお揃いの紫にしますわ!』

——と、はじめは主張していたが、紫一色に染まりそうになったので却下された。白い花卉の先に紫が入った生花を挿す事でどうにか納得していただいた。

「素敵…、手入れの行き届いた髪ですわね。さらさらつやつやで生きているようすわ…王宮の女官も侮れませんか」

「無駄口叩いてないでさつさと手を動かしたら?…それ以上触れたら止めさせるわよ、殿下が穢れる」

ドレスを着たフィリスの髪型を何度も整えては崩し、頬擦りしそうな勢いでフィリスの髪を梳くグレンにアンナが水をさした。鏡越しに睨み合うのでフィリスは視線をさ迷わせている。グレンの一言一言にアンナが口を挟むので、毛フェチ暴走をくい止めている…
…覆面の心配は杞憂だったようだ。

「2人とも…意地悪婆さんの口喧嘩みたいすね。殿下が気の毒っすよ。お迎えも来てんですから、漫才やってないで早くしてください」

先程王宮からの迎えが到着した宗を報せに来たランスロットが、延々と繰り広げられている口喧嘩の収束を促す。

「うるさいですわよ、ド間抜け」

「ランスちゃんには仕事の遅さを責められたくないわ。昨晚徹夜したんでしょ…繕い物で」

「おっ、俺の事は置いてください！」

言い当てられたランスは真っ赤になって動揺している。昨日の朝マギーに言いつけられた通り、アンナに繕い物を教わったランスは解散後も一人でチクチク縫っていたのだが…自分の繕い物だけに朝までかかった。眠い目で提出しに出たところ、今朝の騒動に遭ったのだ。

「まあ…その隈は私達の所為ですね…御免なさい」

ランスの見事な隈を見て、昨晚捜索に出ていたから遅れたと思ったフィリスは謝った。

「えっ！？滅相もないっすよ、殿下」

「そうですね。ランスが不器用過ぎるのが悪いんですもの、時間があっても眠れたか怪しいものですわ。お気になさることはありません」

「ランスちゃん…まだまだ繕い物あるからね。頑張らないと今日も眠れないわよ？」

「うっ…」

追い討ちをかけられたランスは小さく呻いた。

「でしたら私がお手伝いさせていただきます。殿下方がお世話になったようですし…出立までの間ですが」

「セフィーさん」

それまで扉のすぐ内側に座り、黙って見守っていた覆面が突然現れた人物の名を呼んだ。

「フィリス様…お捜しましたわ……」

開け放たれた扉の外に、ランスと同じく隈をこさえ、赤く充血させた眼を細めてうふふつと力なく笑うセフィーがいた。

……………

覆面が見送りの為に表門へ出ると、王宮からの迎えとして第二王女・第四王子つき近衛騎士が其々迎えに来ていた。

「ああ…ヘレナも来ていたんだな」

「ええ。私の担当中に抜け出されちゃったからね。お迎えに来ないと」

「抜け出されちゃったねえ…」

悪戯っぽく笑うヘレナからは、出し抜かれた負い目が感じられない。……気づいていて見逃したんだろう。いくら殿下方が王宮を熟知していても、王宮の警備は甘くない。逃亡には協力者が必要不可欠…殿下方が預り知らぬ処でヘレナは協力していたらしい。

「…団舎へ来るのは久しぶりだろ、見て回らなくて良いのか？」

「一通り回れたわ。皆にも挨拶できたし…これ以上はお邪魔だろうから止めておくわね」

ヘレナは一度懐かしそうに団舎を見やり、覆面に苦笑してみせると、殿下方が乗る馬車に視線を向けた。

馬車の中では、短時間で繕い物の山を半分に減らしたセフィーが殿下方に涙ながらに訴えていた。「不満があるのならばおっしゃってください」と切々と語るものだから、ある意味マギーの叱咤より心臓に悪い。

「セフィーにとっても気晴らしになるかと思っただけど…ちょっと可哀想な事しちゃった」

リンゴのように紅くふつくらした唇を開き、悩ましい溜め息を吐く。密かにヘレナを見ていた近衛騎士数名が顔を赤らめた。

「…………ヘレナ、セフィーさんの事可愛がってるんだな…」

指摘に、ヘレナは綺麗な流線を描く眼を伏せ頷く。

昔から男性には好かれるが、その分女性から嫌われる傾向にある彼女は、仲良くなりたい娘にそれとなくアピールするのだが……報われない。殿下方に手を貸したのは、皆でちよっとお出かけぐらいにとらえていて…また失敗したようだ。

覆面がヘレナにかける言葉を逡巡していると――

「お姉さまっ！」

団舎から走ってきたジェニファーがヘレナと覆面に抱きついた。

「ふふふ、久しぶりの感触です。お姉さま」

ジェニファアは、片頬に笑窪を作って満足そうに笑う。以前ヘレナが蒼鷹騎士団おおかに所属していた頃、ジェニファアは任務帰りの2人をこうして迎えてくれていた。

「ジェニファア！」

数少ないアピール成功例ジェニファアとの、懐かしい其れに癒されたらしいヘレナがジェニファアを抱き返した。麗しい美女と少女が抱き合うさまは大変絵になるのだが…残念ながら怪しい紫色の覆面も加わっているので、周囲の反応は微妙だ。

「見送りに来てくれたの？ジェニファア」

「はい、ヘレナお姉さま。団長達も今来ます」

ジェニファアの言に2人が顔を上げると、ヒースとマイケルを伴ったアレクフォードが此方に近づいてきていた。

お迎え一行の出立準備は整っていたのだが、見送りに来るというアレクフォードを待っていたのだ。

「殿下方に挨拶してきてても良いですか？」

ヘレナが頷くとジェニファアは馬車へ向かった。

「悪い、待たせたな」

覆面達の傍に着くなりアレクフォードはヘレナに声をかけた。

「いいえ、丁度良い頃合いです……」

ヘレナは、挨拶を交わす殿下方とジェニファアを見ながら言った。

殿下方はセフィーを宥める事に成功し、ジェニファーによってすっかり場の空気は変わったようだ。

「アレクフォード殿下、此方がサーライド殿下からの資料です。…それと、ツエリノア様からも手紙を預かっております」

「ツエリから…俺に？」

訝しげに2通共受けとるアレクフォードにヘレナは無言で頷く。昨日王宮へ届けた殿下方保護の一報と同時に、研究所にも改めて詳細な資料を要請した。お迎え一行が研究所へ寄り、サーライドから資料を受けとるよう指示を出していたのだが……。

「預かってきたものは以上です」

ヘレナはそう締めくくり道を開けた。

アレクは首を傾げながらもそれ以上問う事はなく、足早に馬車へと向かう。

——その背をヘレナが可笑しそうに微笑んで見つめていたとは知らずに。

18話 目覚め

(……もう無理よ)

ローズマリーはリュックを背負い、半径8mはある大きな切り株の周りを延々と走っていた。目の前に佇む団舎へ行きたいのに、いくら足を動かしても切り株の外縁に沿って進むだけで距離は縮まらない。近づけないのに目の前にずっと佇む。汗が濁流のごとく噴出し、膝はがくがく笑う。足の感覚もない。

(何で……いくら走っても近づけないの……)

何かがオカシイのは解る。周りを見ると巨大な木々が檻のように囲い、木陰でロバのバロが仔熊と仲良く踊っている……まるで応援しているかのように。

2本足で立ち、時々くるくる回転しながら腰をフリフリ、両腕をブンブン回す。時折しつぽがフルンと揺れてとても可愛い。特に仔熊は全身もこもこな毛に被われ、短い手足を一生懸命動かす。黒糖飴みたいなつぶらな瞳、とぼけた顔にちょこんと載る大福みたいな耳……計算尽くとしか思えない愛らしさ。是非食らいついて、もふもふしたい……こんな状況でなければ。

(応援しなくて良いから、お母さんをどうにかして……！)

ローズマリーは後ろからドスツドスツと音をたてて走り寄る母熊をちらりと見る。四つ足を力強く動かし、口許に唾液の泡を盛り牙を覗かせて走る姿は勇壮で……今にもローズマリーを噛み砕こうと本

能を剥き出しに追ってくる。

（ぜったいたいイヤ、ここで死にたくない。迷惑だけかけて終わる人生なんて……私って何なの……あれ？母熊に食べてもらえばあの仔の栄養になるのかしら……）

自然の摂理。母熊に取り込まれて栄養満点な乳となり活かされるだろう。次の世代へ橋渡し……あの仔熊の役に立つ。

（あの仔が応援していたのはお母さんだったのね……美味しいご飯の為に。私、最期にやっと誰かの役に立てるのね……でもやっぱり痛いのは嫌……！）

「誰か……！助けて下さ……い！」

ローズマリーは腹の底から叫ぶ……目の前にある団舎へ届くように願いながら。絞られた声帯から高音が響くも、あえなく森に吸い込まれる。

（ヴァン、こんな時どうしたら良いの……）

友人の顔を思い浮かべる……幼い頃一緒に窮地に陥っても淡々と状況を打破してくれた人。以来何かあるといつも存在を頼ってしまう。友人が居る筈の団舎を霞む眼で凝視する。額から流れた汗が眼に入り思わず瞑った。汗を払おうと眼に手をあてると……感覚の鈍った足下から鞭のようにしなる強い風が吹き上げ、ザワツと周囲の草木が警告し——何かの影がよぎった。

「ニヤ」「えっ」

風と共に何かは通り過ぎた。ローズマリーが振り向くとドンツと大きな音と震動がこちらに届く。

――母熊が倒れていた。

倒れている母熊の脇には大きな白猫が2本足で立っている。跳躍力のありそうな曲線を描く優美な肢体、臨戦態勢にある為毛は逆立ち、金茶の瞳は縦に走る。何故か腰にベルトを締め帯剣している。

「君が助けてくれたの？」

ローズマリーは自分より背の高い白猫に訊ねた。状況的にそう判断するしかないが、熊が猫に倒されたとは信じがたい。猫が人語を理解するかはともかく言葉がポロリとこぼれた。

猫は熊に視線を向けたまま反応がない。ローズマリーが恐る恐る手を伸ばすと、気配に気づいた猫はスルツと避けてしまう。

「あつ、待つて」

白猫は呼び声にも構わず身を翻し、地を素早く蹴りどんどん遠ざかる。白猫が進む先にある森から徐々に白く霞み始め、猫の姿が溶けていく。やがてローズマリーの周囲も白一色に染まった。

「待つて！御礼してないわ！何か私でも御礼出来る筈なの…お願い…」

（猫に御礼、猫に御礼、猫に御礼……そうだ！）
消えてしまいそうな猫にも届くように空気を大きく吸い込む。

「待つて！！御礼にいつぱい煮干しあげるから〜！」

ローズマリーは眼をギュッと瞑り、力一杯叫んだ――

「煮干しよりシシャモがいいわ…炙って頂くと酒のアテに最適。コモチシシャモならもつと嬉しいわね」

「はいっ、直ぐ用意しますっ…て!？」

猫ってお酒呑むの？――耳許から聞こえてきた女性の滑らかな声に、ローズマリーはパチツと眼を開いた。

眩しい日光に透け細い輪郭と褐色の髪がぼんやり見える。眼が光に馴れてくると勝ち気そうな黒眼を細めた理知的な女性と目があつた…アーモンド型のつり目が猫っぽい。

（色が違うけど、さっきの白猫さんよね？）

「人猫さんだったの…？」

「人猫…人魚とか人狼とか物語に出てくる生き物の事？違うわよ、勝手に人を猫にしないでちょうだい…私はロティリアーナ。王宮で看護師をしている歴とした人間よ」

「ロティリアーナさん…王宮…？」

ローズマリーが言葉を理解するために繰り返していると、ロティリーアーナと名乗った女性はローズマリーの手首に3本指をあて、脈をとり始めた。

（あれ？私寝台に横たわってる…）

そこでやっと状況を確認する。微かに漂う薬品の匂い、見慣れた寝台の配置、部屋の模様…自分もよくお世話になっている団舎の治療室だ。

「混乱しているみたいね。熊に襲われれば誰だって衝撃を受けるから、無理もないわ…寝起きにしては脈が少し速いけど正常な範囲。気分はどう？痛むところはある？」

訊ねられたローズマリーはロティリーアーナを凝視しながらゆっくり口を開いた。

「あの…ここは蒼鷹騎士団の団舎にある治療室ですよ？^{おおたか}どうして私はここに…さっきまで森にいたはずで…どんなに走っても近づけなかったのに…」

未だに夢と現実がごちゃ混ぜになったローズマリーは質問に質問で返した。アワアワとしたその様子に、先ずは落ち着かせるのが優先と判断し、ロティリーアーナはドカリと隣の寝台に腰を下ろし語りだす。

「そう、ここは団舎の治療室。貴女は早朝森で熊に襲われて担ぎ込まれたんですって。私は今度の任務のために喚ばれた増援部隊の1人で昼に到着したばかり。だからよく事情を知らないんだけど…着

くなり女同士だからとここの医師に命じられて貴女に付き添ったのよね。…駄目よ？蜂蜜の匂いさせて熊に近づくなんて…外傷が無いのは幸いだけど、お蔭で貴女6刻ぐらい眠ってたんだから」

気を付けなさい——幼子に言い含めるように注意してくれたが、一気に説明されて戸惑う。

先ほど見ていたものが夢だとわかってきたが、印象が強くて本当にあった事が思い出せない。何となく記憶が掠めるけれど恐怖心も甦って思い出すのが怖い…頭がずきずき痛む。

（私は無傷で生きてるのだから…誰かが助けてくれたのは確かなはずよね…とすれば、それは…あの白猫さん…？）

夢に出てくるほど印象付けられた白い毛と金茶の瞳…そして、猫

「…綺麗な白猫さんに助けられた気がするのですが…あの方はどんなでしょうか…？」

「白猫？」

2人とも眼を丸くして見つめあった。

.....

「白猫…違う、猫じゃない。まあ、白いと言えば白いけどな」

「うん、人だよ。白猫っぽいけどね」

「通り名の内1つは動物だ。人じゃない」

「動物というよりは無生物だよ。生きてないからね」

「筋肉は躍動感があつて柔軟性に富んでた…全然硬くない。通りに偽りあり」

「まあまあだったよね…今後に期待が持てるのに…変な字」

左手に手袋をはめた弟バリニオスが人参を洗い、右手に手袋をはめた兄クラントスが皮をツルンと剥く。

ローズマリーからの質問に息の合った間で答える彼らは、手元の野菜も流れるように受け渡す。視線は野菜に釘付けで、合図を送っている様子はないのに正確である……話す内容は紛らわしいが。

「で、結局この子助けたのは誰。何なのあんた達…白猫は人？無生物？筋肉？はつきり名前を言いなさい！」

そっくりな声色で延々と実の無い話を語りそうなスタンシー兄弟に焦れたロティリアーナが割って入る。受け答えが気に障ったらしく、つり目が更に上がって眉までつり上がりそうだ。

——あれからローズマリーは直ぐに本来の用件…物資の配達を思い出した。寝台から跳ね起き治療室を飛び出すと、真っ直ぐマギーがいるであろう調理場へ駆け込んだ。マギーから無事品を受け取った宗を聴くと、そのまま手伝いを申し入れ現在に至る。心配して付いてきてくれたロティリアーナを（マギーが）捲き込み夕飯の仕込みを手伝っている。包丁・割れ物接触禁止令が出ているローズマリーは野菜を洗う担当に回り、ロティリアーナが皮剥き担当だ。忙しいマギーではなく、当番が一緒になったスタンシー兄弟に騒動の顛末を訊ねた。『私を助けてくれた白猫さんが誰なのか知ってる？』と

「察するにその白猫さんとやはらバトニア卿だよ、可愛いそばか

すお嬢さん」

「そばかすお嬢さん…」

ローズマリーは包丁をスタンシー兄弟へ向けるロティリアーナを宥めようとしていたが、直ぐ隣で野菜を鮮やかに切る男性の一言に出端を挫かれた。

（可愛いそばかすお嬢さん…何それ…初めて言われたわ）

ローズマリーの背筋に寒気が走った…うつすら鳥肌も立っている。他の3人を見ると怒りに上気していたロティリアーナの表情は冷たく、スタンシー兄弟は平素と変わらず作業にあたる…女性に衝撃を与える一言だったらしい。

「双子君達も焦らさないで教えてさしあげなければ。そちらの美しい猫眼の女性に嫌われてしまうよ」

「双子じゃねーよ、三つ子だ」

「そうそう。姉さん以外に嫌われて困る女性はいないね」

「おや…一途なんだね、これは失礼」

その男性はスタンシー兄弟の不興をかったようだが、気にせず白い歯を覗かせ爽やかに笑う。

長い銀系の髪を後ろで1つに結び無造作に流す。銀髪を煌めかせ、たつぷり水を湛えた湖面のように碧眼を潤ませるその男性は、黒い軍服を纏いながらも全身光り輝くようだ。白皙の美貌と称しても過言ではない。背も高く、外見だけなら誰もが認める美男子なのに…

（このイライラする残念感…覚えがあるわ）

「貴方、北軍の方よね。確か名前は…」

「アウロ・シャル・ポエツツォローと申します。王宮付き医務官達の憧れ、美しき猫眼の君。援軍として此方に召集されました」

その残念な男性…アウロは包丁を持ったまま胸に腕を寄せ礼をとった。

「…私を妙な名で呼ばないでちょうだい…ラバトニア卿がこの子を助けたって本当なの？使節団の長じゃない」

いまいち信用ならないアウロの言に、ロティリアーナは訝しげに眉を寄せ、スタンシー兄弟に確認をとる。

「ホントかもな。アーノルド殿下もそう言ってたし」

「熊を讃えてたね…あの様子ならホントに見たんだと思うよ」

スタンシー兄弟はやはり視線を野菜に向けたまま応じる。先程よりは明確に答えた。

「私を助けてくださった方は…帝国の方なのですか…」

（どうしよう、御礼をしたいのに…）

一応貴族の身分はあるが、今は平民と変わらない上に女の身で他国の使者に声をかけるのは躊躇われる…感謝の一言を伝えるくらいなら問題はないだろうけれど。

（命の恩人に、一言で済ますなんて…どう言葉を重ねても感謝の気持が伝わらない気がするのに…でも時間がないわ、明日早朝出立するって聴いたもの……だけど何かしたい。これって自己満足？

鬱陶しい？迷惑？……どうしよう！）

団舎を出立してしまえば、ラバトニア卿と顔を会わせる可能性はほばない。御礼をするなら今動かなければならないが、どうしたらよいか決められずに悶々と悩む。

「今打ち合わせ中なんですよ……この後会えるんじゃない？晚餐を給仕すれば御礼を言えるでしょう。出立時はバタバタするから今夜が狙い目よ、頑張りなさい。この際煮干しでもいいんじゃない？」

ロティリアーナは思考の坩堝をさ迷うローズマリーにやんわり囁く。ローズマリーの寝言を聞いていた彼女は何を悩んでいるのか手に取るようにわかるのだろう。

（打ち合わせ……今夜が勝負……給仕……煮干し……バタバタ出立……そうだわ！）

「ありがとうございます、ロティリアーナさん。私必ず御礼をします！」

ローズマリーは勢い良く腕を振り上げロティリアーナの手を握った。

気合いの現れなのだろうが、肘で金盥を押してしまう。

台から金盥がグガウワランと音をたてて落ち、土混じりの水が隣のアウロに襲いかかった。

「あぁっつ！」「あら」

ロティリアーナとローズマリーは声をあげたが、当のアウロは微笑むと己に襲いかかる泥水を魔法で凍らせ、氷塊を受け止める。

「……まずはアイツで練習して落ち着きなさいね」
「はい！」

ローズマリーは頷き、アウロに猛然と頭を下げ謝罪し、被害を最小に押さえてくれた礼を言った――

19話 御礼の為に…

その人は白猫というより猫科の大型獣でした。

いえ、正確に言うと白くて猫っぽい印象のヒトであって、猫科に属している訳ではありません。お乳を飲んで育つ哺乳類の仲間だけど猫科ではなくヒト科に属した…猫科大型獣を彷彿させるヒト科の雄です。

（小造りな顔やくるくるの短い白髪、夜光りそうな金茶の瞳…俊敏そうな長い手足。それに、白い軍服に白い鞘…白猫というよりユキヒョウとか白虎みたいね…実物見たことないけど）

白く厚い毛に被われ、攻撃力抜群の爪と牙を隠した猛獣のようなヒトだと思う。

軍事大国ゲネルディバイ帝国。自国産の豊富な鉄を元に戦で力を得た帝国の軍は、黒白2軍に大別されている。噂では競争意識を持たせるために2軍に分けたのだとか。使節団（帝国軍第五部隊）の皆が白い軍服を着用しているけれど、剣の鞘まで白いのはこのヒトだけ。

（私を助けてくれた人…気絶する前に不機嫌な猫っぽいと思ったけど、そのまま白猫さんの夢を見る私って…単純）

壁際に立つローズマリーは小さく嘆息する。そう、今日の前で団

長アレクフォードと晚餐の席についている男性に自分は助けられたのだ。恐怖から記憶は曖昧だが、意識を失う前に見た呆れながらも戦意の残滓を宿した金茶の瞳は脳裏に焼き付いて消えない…確かに同一人物だ。

（この人を熊と間違えて…こつ、腰を掴まれて暴れたのよね…うう。第一印象から駄目だわ…恩を仇で返しちゃったようなものよね）

再び嘆息する。今度は少し離れて立つ友人に気づかれたらしい。あからさまな態度はとらなかったが、紫色の布の奥から気遣わしげな視線を送られたのを微かに感じる…心配をかけてはいけない。ローズマリーは慌てて姿勢を正し、笑みを作る。

『貴女が無事でよかった』

晚餐直前、命の恩人である彼に御礼を言い、暴れた無礼を謝罪したローズマリーへの返事が、労りの言葉だった…気にするなとも言っていた。その姿は恩着せがましいところはなく、武人として当然の事だと言わんばかり。

（文句なしの社交辞令。呆れた顔もしてなかったし、穏和に応えてくれた。つけ入る隙がないわ…手強そう。でも……恩は返させていただきます）

御礼は言った。無礼も赦された。社交辞令とはいえ相手が気にするなと言う以上関わらない方が良くんだろう。でも、それでは気が済まない…このままでは一生消化できない“悔い”と“借り”が残る。

（本当に、あの時人生が終わると思ったの。どうすれば命の御礼になるのか解らないけど…そもそも命に釣り合いがとれる御礼ってで

きるものなのかはともかく、これで終わりになんて出来ない)

これは完全に自己満足しただけだ。何故か旨そうに蜂蜜を舐める熊が描かれた蜂蜜壺や猫を見る度彼を思い出し、自分が恩盗人だと脅えたくないのかもしれない…厚顔極まりなく、相手の迷惑を顧みていない。…それでも、只でさえ迷惑をかけてばかりの、恩を受けてばかりの人生…借りたものは少しでも返したいし、蜂蜜も思う存分舐めたい。猫だって撫でたい。

(そのためには…行動あるのみ)

出立前夜、決意を胸に団長と任務の話を着に食事する恩人を見つめる。

そんなローズマリーを4つの瞳が観察していた――

.....

「…なあ、先に行つててくれないか？ 寄りたい所があるんだ」

「ローズマリーだろ…駄目だ。さっき元気そうにしてたじゃないか。怪我もないようだし心配ない」

「そうなんだが…」
…どうも気になる。

覆面の願いを拒むアレクはローズマリーを口実に腹枕から逃げだすと思っているのか、さりげなく距離を縮めてきた。広い廊下なのに団服が擦れあう。

「今夜は使用人棟に泊まるよう指示しましたから、彼女の事はマギーに任せてヴァンはこの寝穢い人をお願いします」

怜悯な声が廊下に響く。手にした燭台の灯にモノクルを光らせ、覆面を見据えながらホーリーヒースはお願いという体で半強制的な要請を口にする。アレクから距離をとろうとしていた覆面は、アレクに体で、ヒースに言葉で追い詰められいつの間にか廊下の端にいた。

使者エリ阿斯との晚餐を終えた3人は、アレクの私室へ向け廊下を進む。会議に出席していた覆面は、そのまま給仕の任も請け負ったのだ。昨日の戦いぶりを評価されたので、話題を振られることも多かった。殿下方見送り後、治療室に顔を出した時まだ眠っていたローズマリーと会えたのは良いのだが…。

（何か気にしているようだったからな）

晚餐直前に2、3言葉を交わせたが、途中で退室したローズマリーに詳しい話を訊けなかった。顔色が良く…というか少し上気させ、エリ阿斯を見つめるローズマリーの表情は硬かった気がする。

（出立前に話を訊きたかったんだが…さて、どうする…図太い神経の腐れ縁達に、恐怖を味わった娘の心細さを説明して…いや、マギーがついてるで終わるな…）

—ならば別方向から。

「アレク…明日からまともな寝台で眠れないんだ、ゆったり1人で寝ないか？それに2日連続は了承してない」

久しくしてなかったからこそ条件付きで応じたのだ…覆面はアレ

クを押し戻しながら言う。

「借りが2つできれば腹枕を言ったのはヴァンだろ。約束は果たしてもらっ」

「今日も健やかに眠れたようですし…寝起きも良い方でした。起こす手間が省けます。明日は夜明け前に起こしてくださいね」

2人とも全く取り合ってくれない。それどころか余裕すら窺える…言質をとられているのはマズイ。

「ヒース…代わらないか？ヒースと寝起きすれば寝坊なんてしないだろ。ロイスだと思って腹枕してやれ」

「絶対眠れない。やめろ、想像するだけでも嫌だ」

「御免被ります。弟はこんなにでかい図体ではありません」

余裕の態度は崩せたが、反感をかつたらしい。アレクに剣呑な眼差しで睨まれた。鉄面皮のヒースですら冷やかに目を細める…ますますマズイ。

「…今回は1回保留にして、帰ってからつてのはどうだ？任務の疲労解消用に」

「保留なんぞもつたいたい。人生何が起こるか誰にもわからないんだ…限られた時間の中で機会を逃す真似はしない。一番馴染み深いヴァンの腹枕は一生どんな時でも堪能させてもらっ」

腹枕の軌跡を追う。誰にも…例え腹の持ち主でも邪魔はさせん。

アレクは真顔で宣った。

「私はどこで教育を間違えたんでしょうね……」

前半はともかく、後半はいただけない。腹枕の軌跡を追って何になるのか。枕でも作るつもりなのだろうか。……あの時腹枕を阻止すべきでした。ヒースは内心悔やむが、顔はピクリとも変化がない。

「何だその無駄な熱意……一生ずっと腹枕をする気はないから……アレクに妃ができたらしめる。妃殿下にやつてもらえ」

「結婚と腹枕は関係ない。もちろん妃の腹枕も堪能するが、ヴァンのは別だ。妃ができてもらおう」

「……別腹か」

「別腹だ」

そう断言し、アレクは満足そうに口角をあげて笑む。深緑の瞳が闇色に混ざって深みを増す……無駄に艶やを振り撒いている。

（私が拒むと思ってないのか……いや、拒んでも関係ないんだな）

もうこいつは駄目だ。寝かしつけてから抜け出そう……覆面は説得を諦め、実力行使を選ぶ。アレクが寝たらローズマリーの所へ行こう。朝寝台へ戻れば問題ない、昼寝していたローズマリーは眠れないだろうし丁度良い。

そうとなったら早く寝かそう……歩む速度を速めた。

「ラバトニア地方に一番近い転移門でも山と渓谷越えが待っています。その為の物品、人員は揃いました……あとは明日早朝身柄を集合

させるのみ。頼みましたよ、ヴァン」

私が来る前に起きていてくださいね……アレクの私室へ到着すると、ヒースは書類を運び入れて去っていく。ついでに各部屋の灯りを灯し、覆面に念を押すのも忘れずに。

パタンと扉が閉まり、部屋には2人だけとなる。

アレクは覆面に『絶対逃げるな』と言い、浴場へ姿を消した……逃げるなどと言われると逃げたくなるが、行き先はわれている。逃げても捕まるだけだ。ここで逃げるよりアレクを潰してから行くのが得策だろう。

（早く寝かせるには酒だな。確か書斎にあつたはずだ）

昨日アレクがワインを呑みながら書類に目を通していたのを思いだし、覆面は居間を抜け簡易書斎に入る。

書斎には書棚はもちろん、中型の執務机がある。その他にも団長専用執務室ほどではないが、書簡の管理や作成などが出来る設備が揃う。……もっとも、ヒースが整頓している執務室とは違い書類は散乱し、雑然としているが。

執務机の上、先ほどヒースが運び入れた書類の周りだけすっきり綺麗に整っている。優秀な彼はあの短い時間で整頓までしたようだ。ワイン一式も一緒に並べてある。

（これは……）

ワインの隣に積み重ねられた資料。覆面はその資料……サーライドから受け取った万天の研究資料に興味を引かれた。

資料を手に取り読み始める。

（万天の形状、急所：魔術耐性：出現場所と傾向の推移。化精との比較か…どれも推測の域を出ないんだな）

実例以外どの項にも“かもしれない”“ようだ”“可能性がある”などの不明瞭な言葉で締め括られている。研究分野ではつきものだが、それにしても多い。確たる自信をもって断じきれるほど、調査が行えない現状では仕方ない事だが…残念な推論だ。

それでも最後まで読もうと椅子を拝借し、実例や検証をもとに考察する。記憶に刻み込んだ先代達の記録とも照合し、新たな手がかりはないかと資料を漁る。

「…ここにいたのか」

湯上がりのローブ姿でアレクが書斎の扉を開け覆面に近寄ってくる。

腰紐を緩く絞めただけのローブは、胸元がだらしなくてはだけいている。湿ったローブからは鍛えあげられた筋肉の流線が浮き彫りになり、胸板や適度に割れた腹筋の線が覗く。おざなりに拭った髪から雫が滴り、潤んだ深緑の瞳は霧がかる深い森の色を湛える。体温が上昇し、湯気と共に煙るような気だるい色気すら放つ。

数多の浮き名を流し、不馴れな少女から手慣れた婦女まで誘いを受けるアレクの外見的魅力を惜し気もなくさらした姿だが…覆面は興味がないようだ。資料から視線を外さない。

「アレク、今日ヘレナに渡された分も含めて資料はこれで全部なのか？」

「ああ。…そうだな」

アレクは覆面のすぐ傍らに立ち、手元の資料を確認する。覆面は部屋の主…というか上司が来たのに席を譲らない。許可なく勝手に書類を見る行為は処罰されてもおかしくないのだが、アレクは何も言わなかった。

積み重なった資料の隣にあるワインに気付いたアレクは手を伸ばし…ふと、ツエリノアからの手紙が眼に入る。

（そういえば、読んでなかった）

ワインに伸ばした手を横にずらす。手紙を掴み、封蝋を見る。ツエリノアの生家グラントリーの紋章に手を加え、三女ツエリを示す押印がなされていた。

（…嫌な予感しかない…）

ツエリから手紙を貰うのは初めてではないが、大抵内容は苦言ばかりなので読む気がしない……かといって無視など出来ないが。

渋々と、アレクがやけに分厚い手紙の封を半分切った時、覆面がいきなり立ち上がった。あまりの勢いに座っていた椅子がガタンと後方に倒れる。

覆面はその勢いのままアレクにガツシリ抱きつく。

「どうした」

首もとにぴったり張り付く巨峰のような頭部に問うが、返事はない。覆面の腕がアレクの腰と大腿裏に回り――

グイッ、ヒョイッ、ダッ、と抱えて走られた。

「おいっ!？」

女性を抱き締めて運ぶことはあれど、逆はない。アレクは思わず慌てた。

鍛えてるだけあって危ないが、自分より華奢な人間に運ばれるのはどうしても頼りなく感じ、覆面の背を掴もうとして――窓辺に放り投げられた。アレクの体は放物線を描く。

ビダダッ、トダンッ、と着地の音がする。

1つは投げ出されたアレクが受け身をとって着地した音。

もう1つは――

「いったーい!」

アレクが立っていた所に天井から降ってきた女性が着地に失敗した音。落ちる途中体勢を崩し、手のひらと腹で着地すれば誰だって痛い。女性は悶絶している。

「…ローズマリー?」

突如涌いた不審な気配に反応し、アレクを放り投げて戦闘に備えていた覆面は見知った姿に駆け寄る。

名を呼ばれた女性…ローズマリーは顔を上げた。既に顎が赤くなり、青々とした緑の眼に涙を溜めている。

「こんばんは…ヴァン。お邪魔します…団長」

痛みから床に倒れたままだが、必死に笑顔を作りローズマリーは挨拶した。

20話 説得しよう

「すまない、ローズマリー。アレクを退かすんじゃないかった」

あんなんでもクツション代わりになっただるうに…覆面はローズマリーを抱き起こしながら言う。

怪我の具合を確かめ、手当てのために居間のソファアへ運ぶ。

「違うのヴァン。本当はちゃんと足底から着地するはずだったんだけど…」

服引っ掛けちゃった。と小さな声で恥ずかしそうに話す。

打ち身には冷やすしかないので覆面は頭部に巻いた布をちぎり、水を含ませると冷却魔法で凍らせた。それを更に布で巻いて患部に当てる。

「ローズマリー、ルシアの小径こみちから来たのか？普通に訪ねても俺は門前払いなんかないぞ。何でまた天井から降ってくるんだ」

ルシアの小径こみちとは、名の通り普段ルシアが使っていると噂される狭い通路の事だ。姿を見せないのに見計らったように様々な気遣いをしてくれるルシアが、身を潜めて団員の行動を把握するために造ったとされる道。どこに出入口があるのか当のルシア以外誰も知らない。時たまジェニファアや気に入った者を招き入れ、目的地へ最短時間で送り届けてくれる…団舎内限定で。

出入口があつた場所からまた入ろうとしても、跡形もなく消えているので真実はわかっていない。

「団長の部屋へ向かう途中ヒースさんに会いまして…止められたんです。引き返してウロウロしてたら目の前にぽっかり狭い通路が開いてて」

この書き置きもあつたので入りました…紙の切れ端をアレクに差

し出す。アレクの乱れた姿を直視したローズマリーはサッと顔を赤らめ、直ぐに下を向く。

その紙には、子供の豪快な筆跡で確かに“ 団長私室行き ”と綴られていた。

「そうか、経緯は解った。…俺に何の用だ？」

ローズマリーの反応に気づいた覆面が隣に立つアレクのロープを直す。一回り頭部の布が減って巨峰から通常の葡萄になった頭部を視界の端に捉えながら、アレクは問う。

自分の為に裾を直されているのは気配でわかるが、もう一度直視する勇氣はない。ローズマリーは視線を下に向けたまま答えた。

「あの…お願いがあるんです」

そう言つと、ローズマリーは喉をゴクリと鳴らし1度深呼吸をする。

ローズマリーのただならぬ決意を感じ、覆面とアレクは次の言葉を待つ。

息を整えた後、ローズマリーは即席氷嚢を握ると、ゆっくり立ち上がる。伏せていた顔をガバッと上げ…視線を何とかアレクの頭上に向けて叫んだ。

「私を……任務に同行させてください！出来ればラバトニア卿のお世話係として！」

近くで叫ばれた2人はキーンと耳鳴りがした。

叫んだローズマリーは肩を怒らせ腕で脇をしめている。

着地に失敗してドジを曝し、乱れた姿のアレクに赤面し、力一杯叫んだローズマリーは羞恥心からだけではなく色々ごちゃ混ぜになって真っ赤だ。もう少しで湯気が立ち上りそうである。

（世話係…世話係…何で世話係？ラバトニア卿は子供か動物か？）

「…ローズマリー、ラバトニア卿の世話をしたいのか？」

付き人が侍女ではなく何故世話係？…まあ、些細な事か。耳鳴りから回復した覆面が訊く。ローズマリーはコクコク首を縦に振ると覆面に体を向けた。

「御礼を…ご恩返しをしたいの。命を助けてくださったのに、このまま何もしないでお別れなんて嫌。せめて任務のお手伝いをしたいの」

世話係でなくとも、ラバトニア卿の役に立てそうなら何でも良い。後方支援部隊に混ぜてもらえないかと言い募る。

「気持ちはわからんでもないが…今回の任は危険だ。不明な点多い。命の保証をしてやれないぞ…折角助けてもらった命だ、大事にしとけ」

許可できない。2人のやり取りを聴いていたアレクが断った。

すると、覆面に体を向けていたローズマリーはアレクに向き直り、怒濤の勢いで語りだす。

「何でもやります！刃物と割れ物は触れないけど、それ以外なら何でも。マギーさんに習ったローズマリーとかのハーブを使う煮込み焼き、蒸し料理、町の親方直伝のパンも作れます！馬の世話や洗濯もできます！看護師のロティリアーナさんから治療術も教えてもら

います！後方支援部隊といわれる主計兵と衛生兵の更に後ろを手伝います！朝から晩まで働いてるので体力に自信はあります！それに、女の身で私ほどドジなら帝国の皆様も油断すると思います。どうかお願いします、連れて行ってください！！」

なるべく危険な場所に近寄りません。ドジって邪魔しないよう気を付けます…一氣に語ったローズマリーは、ゼエハアと全力疾走した後のように肩で息をしている。

（熱意は買うが…軍人でも死者が出ている場所だ。行くこと自体が危険で、完璧に安全な場所はない…討伐任務に就いてる間は私も駆り出される。ローズマリーにへばり付いている訳にもいかない。粗方片付けた後なら呼べると思うが…）

もう少し危険が減れば連れていけるかもしれないが…妙案が浮かばない。

沈黙して思案に暮れる覆面の隣に立つアレクは、視線だけを動かして覆面とローズマリーを交互に見遣り…微かに目を細めた。

「よし、わかった。同行を許可する」

「本当ですか！ありがとうございます！」

アレクの発言に、ローズマリーはパツと花が咲いたように笑み、頭を下げる。

「アレク、それは「ただし、条件をつける」
覆面が意図を探ろうとするも、アレクが続けて放った言葉に遮られた。

「先刻言った事は勿論守ってもらう。危険な場所に近寄らないのは当然として、許可した範囲から出るな。役目は後方支援部隊の手伝いと…そうだな、ラバトニア卿の世話係は無理だが、伝令にはなれるか。作戦に関係ない些細な連絡事項の伝令なら任せられる…まあ、ラバトニア卿関連でうちが関われるのはその辺だろ。後は自分で判断しろ」

アレクの指示にローズマリーは大きく頷く。喜びに目を輝かせ、嬉しそうに頬を緩ませている。

「待て、それでも危険だ。発生原因すらわかってないんだぞ…せめて粗方片付いてからにしないか？」

「後から1人で来ても危険だ。それに、発生原因さえ解れば殲滅戦に持ち込む。その後の始末に時間はいらないし、卿は皇帝へ報告に行くだろ。そうなると御礼の機会は減る。…最初から地道に関わっとけば何とかなるだろ、塵も積もればって言うしな」

「確かに…そうだが…」

（理屈はわかるが、賛成できない。どう考えても危険が付きまとう……いっその後日約束を取り付けて菓子折りでも持っていった方が良いんじゃないだろうか。…それだと恩返しになら無いか。困ってる今が返し時だしな…）

覆面はまた考え込む。アレクに顔を向けていたが、斜め下に落とす。重心を右足に移し、左肘を少し後ろに引いた。

その仕草は、覆面が思考に没頭する時の癖だ。この時覆面の意識

は内に集中し、話しかけても反応は薄い。周囲で囃し立てても無関心だ。

勿論幼馴染みのアレクはその事を知っている…アレクは覆面をそのままにしておき、口到人差し指を当て“静かに”という合図をローズマリーに送ると、開けっ放しの簡易書斎の扉まで音もなく歩いた。扉の影に入り、ローズマリーを招く。覆面が立つ場所から死角に位置し、距離もほどほどにある。見渡せば気づく位置だが、小さな音は届かない。

(……………?)

団長が何をしたいのかわからないが、ローズマリーは指示された通りなるべく静かに歩き、招かれるまま扉の影に入った。

アレクはまだ覆面が気づいていないのを確認すると、ローズマリーの耳元に顔を寄せた。

眼の毒としか言えないローブ姿にも慣れていないのに、いつになり団長アレクフォードの急接近にローズマリーは身を固くする…が、囁かれた言葉に眼を瞬かせた。

ローズマリーは首を傾げ、小声で内容を聞き返すがアレクは穏やかに笑って頷く。

その穏やかな笑みを見るとローズマリーは訝しげに顔を強張らせ、アレクに質問を浴びせる。棘を含む質問全てにアレクは淀みなく答えた。

質問を終えると数秒間ローズマリーは黙考し、アレクに視線をあわせて小さく頷く。ローズマリーの返事に満足したアレクも頷き返し、半開きになっていた扉を全開にする…覆面がこちらに顔を向けていた。コソコソ隠れたのに気づいていたようだが、2人が出てくるまで待っていたらしい。

「…私に内緒の話は終わったのか？」

少し距離がある為、覆面は声を張った。

「ああ、終わった。ヴァンは何か良い案思い付いたか？」

内緒にしたい当人にあっさりバラすアレクに、覆面は肩を竦めてみせる。

「いや…結局、今回連れていくのが一番手っ取り早い気がしてきた。一緒に行こう、ローズマリー」

元来面倒くさがりな覆面は、色々考えてみても納得できる案が浮かばず初めの案に戻ったらしい。現時点で未来を予測しても不確定な要素が多い。特に万天が関係し、異国人相手の恩返し…どうなるか解らないならまず動いて感触を掴むしかない。机上の空論より実動をとった覆面であった。選択肢に“諦める”があるが、今回それを選ぶのはローズマリーだけだ…あの熱意を説得できる自信はない。殿下方のように忍び込まれるよりは、最初から連れていく方がマシだ。

「うん…ヴァン、何でも手伝うから、何でも言いつけてね！」

「ああ。ローズマリーも何かあったら直ぐ私に教えてくれ。それと、夜はなるべく私が…看護師のロティリアーナさんと一緒に固まって寝よう。任務に参加する女性は3人だけなんだ」

昼夜問わず討伐に繰り出す予定の覆面は、長く傍にいられない。女性同士固まっていた方が心細くはないだろう。

ローズマリーは神妙な顔つきで頷く。

「…不安なら3人とも俺のところで寝るか？他の誰も近寄らないぞ」

刺客は別として団長の天幕に侵入する強者はいない。守衛も付くし広さもある。“団長の御手付き”と見なされるだろうが、迂闊に手を出される事も減る。…アレクフォードは純粹に善意から提案した。

「……………」

ソファアの脇に立つ覆面は、微動だにせず沈黙を保つ。

「……腹枕は狙ってない！」

覆面の沈黙の理由を推察し、アレクフォードが唸った。…が、勘違いである。

覆面は、アレクの背後から現れた物体に言葉を失っていた。

（…シーちゃん？）

アレクの背後に現れた5cm程の白いモコモコの物体。研究所で妹に紹介された羊のシーちゃんに似ている。特徴的な角の折れ曲がり具合が同じだ…大きさは全く違うが。

シーちゃんの分身？はふわふわとアレクに近寄り、丁度アレクの足元に到着すると――

ブワツツと瞬時に膨れ上がる。

「つつ！？」 「きゃっ？」

膨れ上がったシーちゃんの分身？は、アレクと隣に立つローズマリをモコモコの毛で全身を包むと、一気にブファアと霧散した。辺りに毛が舞うが、徐々に空気に溶けるように消えていく。

（何——）

覆面が止める間もない、素早い一瞬の出来事だった。

——ドサツ、バタツと音がし、覆面の目の前でアレクとローズマリは床に倒れた。

「大丈夫か！？」

覆面は駆け寄り、横たわる2人の体を揺すったり声をかけるが反応はなく——スースーと規則正しい寝息が聞こえる。

「寝てる……」

2人は表情も安らかに仲良く眠っていた——

21話 出立の朝

（目線が低い——体が縮んだ……んじゃないな、これは夢だ）

俺の意思を無視して動く手足、低い目線。体は小さく華奢だ。現実こんな事態が起これば流石に慌てるが、周りの景色は見覚えがあり、どこか懐かしい。不快感もなく……ぼんやりとたゆとう空気が夢の中だと教えてくれる。

（たまに見るんだよな、過去の夢……随分昔の夢だな）

夢の中で王家の馬車に揺らされているが、目につく内装が古い。久しく見ていない柄だ。

（……………これは……初めて遠出した時のか）

王宮内しか知らない幼少時の俺は、外の景色が珍しくてずっと小窓にかじりついている。直に通いなれた道になるが、この時は飽きる事なく風景を楽しんだ。

この時俺は5歳。自由奔放でやんちゃ坊主……所謂悪ガキだったらしい。隣で大人しく座ってるヒースからの情報だ。いまだに当時の悪行を恨みがましく語られる。“全て覚えてます”と言われるが……忘れた方がお互いの為だと思うぞ、ヒース。

悪ガキが遠出の機会を逃すはずは無い。2歳の弟と母を王宮に残し、ヒースを巻き込み父兄と共に出発した……何処へ何をしに行くかあまり把握してなかったが。“遠出”という言葉に惹かれたんだよ、5歳の俺は。

転移門を潜り、ガタゴト馬車に揺らされ着いたのは禁獵地——王

国最古の自然を保つ森を護る貴族の屋敷。王でさえ踏み入る事を制限され、人の立入を禁じている禁獵地の森を中心に一帯を封地とし、管理する領主の屋敷。

長い歴史がある国だけに胡散臭い曰くや面倒な慣習、規則は多々あるが……中でも結構胡散臭い森だ。ありがちな入ったら二度と出てこれない樹海説、実は只の禁野であるとか、貴重な資源の宝庫だのという噂はまだいい。王家の隠し財産が眠っていると、秘密実験場、王侯貴族の人狩り場、原始人の住み処など、怪しい噂すらある森。……まあ、この数年後俺はどうして胡散臭い森なのか、訳を聞き齧るんだが。

5歳の俺は胡散臭い森だとは知らない。…遊び相手だと思っていたヒースに“絶つつつつつ対入つてはいけない森です”と忠告され——丁度その場面だな…まだ8歳の頃はモノクル掛けてなかったんだな、ヒース。でも、既に鉄面皮とは…わざわざ顔を覗き込むなよ馬車降りて一目散に森へ駆け出した5歳児をそんな目で諭すな——お蔭で見た事もない広大な森への興味を余計に煽られたんだ。掴まれた腕を振り切った無鉄砲な悪ガキが背を向けて笑ってるぞ。忠告すれば止めると思ってるだけまだ可愛いげがあつたな、ヒース。今じゃ考えられない処置だ。隙だらけ。……だから俺は森へ入れたんだよな。

当然森は侵入者対策が敷かれている。高垣を築き有刺鉄線付き柵を張り巡らせ、魔具を四方に設置し強力な結界で囲う。繁茂した森の外観は視認できるが、外縁からは到底入れない。

唯一の出入り口は森と隣接する領主の屋敷にある。この領主一族は王家と張る古い血筋を継ぎ、昔から森を護っていると。胡散臭い森の護り手もやはり胡散臭い存在だ。貴族社会では名家扱いされ

ているが、曰く付きの噂が囁かれ一步距離を置かれている。当主が滅多に姿を見せず、森を離れない事も噂を後押しする一因だが…そのお蔭で俺の初遠出が叶ったんだ。父兄は領主と挨拶をする為に王宮を出た。対外的には視察を名目にして。

いくら森から離れないからって王に出向かせるとは…と普通なら思うが、父は政務の息抜きがしたかったただけだ。何せこの地は温泉が湧いている…大の温泉好きの父には癒しをもたらす土地だ。引き籠り気味の領主とも古馴染みで、挨拶ついでに湯治に来た。俺が付いてきた事で俺の顔見せも名目に含まれたが——間違いなく息抜きが目的だ。屋敷に入り、軽食を摘まみ会話を弾ませている領主と父王の話からも窺える。兄は行儀良くニコヤカに…この頃から笑顔常備でしたね兄上…話を(多分)聴いているが、5歳の俺は長話に飽きた。軽食も食べ終わり、目をキョロキョロ動かす。このあとは紹介された領主の娘と兄、俺の3人で遊ぶ予定だったが、歳上ばかりに挟まれたくはなかった俺は…対面に座す領主の娘から兄と同種の気配を感じ取ったのかもしれないが…トイレに行く振りで部屋を抜け出した。

お約束過ぎる古典的な手口だが、だからこそあり得なくて有効な手段だった。後ろから付いてきたヒースと護衛をまき、小さな体を活かしてちょこまか物陰や家具に潜んで追っ手を遣り過ごしてる。壺や隙間に入ってる俺は使用人の目すら欺き、屋敷の至る所に侵入した——今思えば領主と父に泳がされてた気がする。

でなければあんなに簡単に森へ入れはしなかっただろう。

出入口は屋敷と森の境界にある大門だと世間では認識されている。勿論守衛が常駐し、森とは別に結界が張られた石造りの大門。精緻な紋様が彫られ高垣や柵と連結され一体となり、成人男子20名がかりで押せばやっと開くのではと噂される。

侵入者達もこの大門を目指すのだが、呆気なく捕まる。守衛を倒し、門を護る結界を破ったとしても森へは入れない……偽の出入口だからだ。門を開いて中に踏み込んだ途端牢獄に飛ばされる。転移門と同じ様な仕組みで、違いはこの門に鍵となる魔具が必要ないだけだ。問答無用で発動する。

大門の存在を知らない俺はとにかく森を目指そうとして――屋敷内で迷子になったんだ。ありがちだが隠れるうちに方向がわからなくなつた。今何階にいるのかすら解らず慌てて廊下を走っていたら、前方から足音が聞こえて咄嗟に近くの部屋へ入った。

その部屋は客室だつた。寝台や鏡台、クローゼットなどが趣味良く揃えられた一般的な客室。

部屋に入っただけでは見つかると思つた俺はクローゼットと壁の隙間に隠れようとビタツと体を薄くした。隙間を半ば迄進み、影に紛れ漸く体が外から見えない位置に来たとき……ふつと浮くような感覚がして落ちた。

確かに踏みしめていた床板が消え、落ちていく俺の視界は黒く塗りつぶされた。何をどうして床が抜けたのか、いまだに解らないが気づいたら森の中にいた。単純な5歳の俺は不思議に思いながらも着けた喜びに溢れ跳び跳ねている……我ながら阿呆だと思つが純粹だつたな、この頃は……という事にしておこう。

何倍もの背丈がある木々、隆起した大地、噓せかえるほどの土と植物の匂い、冷涼ながら湿り気を含む風、耳に心地よい葉音、そこかしこから感じる生き物の気配。王宮の庭しか知らなかった俺はその全てに興奮した。

夢中になつて走り回り、王宮では禁じられた木登りを試みる。そこそこ太い木を選び、猿の如くするする登っていく…自分の限界を知らず、禁じられた反動でどこまで登れるか挑戦しようと、負けん気を発揮してある程度まで登り…また落ちた。枝にかけていた足を滑つて外し、手だけでは支えきれずに落ちたんだ。

地面に叩き付けられる衝撃を覚悟した。だが俺は落ちる最中下から吹き上げる突風に体を煽られ、格段に少ない衝撃で足から着地できた。地に手を付き、驚きに跳ねた心臓を落ち着かせながら俺が顔をあげると…目の前にあいつがいた。

5歳の俺より背が高く…まだ女装してたよな。顔も隠してない。

ヒースが口煩く入るなと言っていた森に、誰かいるなんて考えてもいなかった俺は目の前に現れたあいつを人だと思えず…風使いか何か、人では無いものだ判断した。浅はかな5歳児の発想なんてこんなもんだろ…。

風使いだろうが異形のモノだろうが、未知の生き物との遭遇に目を輝かせ、とにかく何か話そうとした俺を——あいつは睨みつけた。その射竦めるような鋭い眼光に、俺は出かけた言葉を飲み込む。何で5歳にしてそんな凶悪な目付きが出来るんだよ…容赦ない。今では布隔てても充分威力あるしな。

そして、コクリと喉を鳴らす俺を見据えたまま、あいつは言い放った——

「起きろ、アレク」

（いやいや、違っただろ。内容も違っし、当時はこんなに低音じゃなかった。これではまるで今……？）

「起つきつろ！」

グイッと耳を引っ張られて、耳許で叫ばれた。

——パチッ

目を開いたアレクが見た色は黒。覆面の頭部を覆う布である……巨大な黒ゴマみたいだ。

（ヴァンが覆面してる……か、すっかり夢から醒めた……）
懐かしい夢から醒めたアレクは緩慢な動作で覆面を見上げた。

アレクが横たわる寝台の脇に立つ覆面は、耳を引っ張り続けている。

「完全に起きたら外す。まずは上体を起こせ」

意識が浮上してくると、耳の痛みも徐々に強く自覚する。ジーンと痛む耳を引っ張られるまま上体を起こしたアレクに満足し、覆面は耳を解放した。

（薄暗いが朝だよな……ヴァンが起こすって事は腹枕で寝たはずだが……）

違和感を感じる。腹枕後の充足感が全くない。

「ヴァン……」

「何だ？」

「昨日何があった……？」

アレクが昨日の記憶を手繰り寄せていると、問われた覆面は一通の手紙を取り出す。

見覚えあるツェリノアからの手紙。半分封を切ったところでローズマリーが降ってきて、覆面に投げられた時手放してしまったもの……そこまで思い出して気づく。

「封が全て切られてる……」

ポツリと呟かれた言葉に覆面は頷き、解説し始める。寝起きのアレクにも理解し易いようゆっくりと。

「ツェリからの手紙だ。あの時半分迄切ってたよな。……そこから頑張って出てきたみたいなんだ。シーちゃんの分身」

「シーちゃんの分身??」

聞きなれない言葉に思わず鸚鵡返ししてしまう。誰だ、シーちゃん。

「研究所に羊がいたろ……ってそうか。アレクは紹介されてないか。研究所には化精の他にも化精化してない普通の動物もいるんだ。いつ何がきっかけで化精に転じるか掴む為に。念願叶って先日羊のシーちゃんが化精化してな。能力が——睡眠導入らしい」
ホレ、手紙に書いてある。

そう言って寄越された手紙には詳細が記されていた。

眠らせたい相手の毛をシーちゃんの毛玉に混ぜると、その毛玉はあたかも分身の如くシーちゃんに似た姿になる。大きさは毛玉大のままだが。

分身は毛の持ち主にゆっくり近付き、射程範囲に入ると一気に膨らみ相手を包んで効果を発現させる。その際毛を混ぜられた本人だけでなく、毛に包まれた周囲も捲き込み眠りの世界へ誘う――

「思い出せたか？昨日の一件。納得したなら起きろ。まだ陽は出てないが、いつヒースが来「腹枕をしてないだろう……まだ時間はある、寝ろ」

ポンポンと寝台を叩き、寝転ぶように指示を出す。昨日の記憶を思いだし、詳細を知ったアレクは理解した……犯人の思惑を。ご丁寧な犯行声明と共に苦言がびっしり綴られた手紙を読めば誰だって気付く……ツェリノアは昨日早朝の腹枕現場を水晶越しに視ていたらしい。会話は聞こえないが不穏な気配を察し、手紙に細工を仕込んだ。流石、腹枕阻止を誓う娘。

「したぞ？腹枕。ローズマリーを送り届けてから、ちゃんと一晩中」
お前が覚えてないだけだ……覆面はヌケヌケと言いのけた。

「嘘をつくな。腹枕後の感覚がない」

「……そんなに差がある訳ないだろ。寝入りがアレだったからいつもと違うんじゃないか？……いいからもう起きろ！顔洗ってこい」

暫し睨みあう。感覚論だけでは証拠にならない……数瞬後不利を悟ったアレクは、じつとりと疑いの眼差しを残して浴場へ消えた。

（引いたか……ははっ。ありがとう、ツェリ、ヘレナ――）

アレクの背を見送りながら、内心で覆面は首謀者達に礼を言う。
不自然に分厚い手紙が無事アレクの元へ届くには、仲介者が必要だ。ヘレナが検閲を通してくれたんだろ。腹枕阻止作戦の首謀者

はツェリ、協力者がヘレナだ。

少し罪悪感がなくはないが、覆面は2人の厚意をありがたく受け取った。罨に引っ掛かったアレクの負けという事で。

（感覚で見抜くくらい腹枕道に行く王子ってどうなんだ……回数が減らした方が本人の為……だよな？ 幼い頃は可愛いと許される行為でも、年取ってからやると……何と言うか、微妙だ）

第二王子に変な趣味ありと噂がたてば、キノード王室自体の評価を落しかねない。周辺諸国から侮られるだろう。巧くいく縁談も破棄される。今はまだ山程縁談話は来ているが……そうなったら王妃様に顔向けできない。……既に手遅れな気もするが。

「おや……本当に起きてますね」

やれば出来るじゃありませんか……。ヒースが扉から顔を覗かせ、感心したような口ぶりで呟く。普段アレクを起こすのに一苦労する彼としては、やろうと思えば起きられるのに怠けるアレクの態度に苛立ったようだ。語調に不満げな響きを含む。

立ったまま思考に没頭していた覆面は、声をかけてきたヒースに向き直り歩み寄る。

「丁度起こしたところだ。ヒース、私はもう行って良いよな？ 後はよろしく。」

“アレクは今浴場にいる”と言い添え、苦労性な幼なじみの肩をポンと叩き労うと、すたすた歩き退室した。

（この歳になって八つ当たりはしない……よな？）

アレクには及ばないが、確実に自分もヒースの苦勞を増やしていると……不機嫌なアレクをヒースに押し付けてきた自覺のある覆面は一応後でヒースのフォローに回ろつと決めた。

……………

「……では、出立」

凜と空気を引き締めるようなアレクの号令に従い、討伐隊は足並みを揃えて轉移門を潜り始める。

討伐隊は蒼鷹騎士団^{おおたか}、援軍、ゲネルディバイ帝国第五部隊の計約110名で編成され、現地入りしている帝国軍を併せると数は倍以上に跳ね上がる。

昨日今回の任は演習ではなく、討伐任務だと全員に通達し終えた。騎士団員、援軍の面々は大半が武人とあつて表面上は特に驚きもせず淡々と受け入れる者ばかり。

長く厳しい任務を想い、騒ぐ血と心を抑圧し覺悟を決め、出立の朝を迎える。準備が整い、発生し続ける得たいの知れない万天が待つ地へ向かう討伐隊には、厳肅な雰囲気^{きんぷう}が漂う筈なのだが……

「……ロバも連れていくのか、ローズマリー」

「うん。挨拶に行ったら、親方が連れて行って。他にも色々くださ

ったの」

昼間寝ていたローズマリーの起床時刻はやはり早かった。未明から作業を開始するパン屋の親方に事情を説明し、人情家な親方に長期休暇の許可を得た。それだけに留まらず、ロバのバロを護衛がわりに貸し出してくれ、物資まで贈ってくれた。今バロは小麦粉やら瓶やら重そうな荷を背負っている。余裕のあるリュックを背負い、身軽そうなローズマリーとは対照的な姿だ。

「随分と気前がいいのね…私の荷も乗せて良いかしら？」

「どうぞ」

ロティリアーナが手に持つ診療鞆をバロの背にくくりつけた。見かけによらずロバは足が丈夫で力持ちだが、自ら進んで荷を運びたがるロバはいない。バロも少し嫌がった。

女3人寄れば、かましい。出立前に紹介を済ませ、会話を弾ませていた女性陣は、明らかに場にそぐわず浮いている。

討伐隊の最後尾にいるだけまだ被害は少ないが、周囲のやる気を削いでいる。厳粛な雰囲気など彼女達には通用しないらしい。

最後尾の男性陣が一抹の不安を抱えている以外は、概ね順調に討伐任務は開始された――

22話 山越え

「山と渓谷を越えるとは聴いていたが…」

目の前に広がる予想外な――否、予測を越える光景を認識するや、覆面の口から思わず言葉が溢れた。

「奇遇ね。私もそう聴いたわ。有能と噂の参謀さんから聴いたんだけど…あれはどう見ても山脈よね？」

溢れた言葉の後を律儀にも継いだのは、傍らで同じ景色を伏せ眼がちに見据えている看護師のロテリアーナ。

耳に心地よい滑らかな声で紡がれた言葉は、どこことなく皮肉気な響きを含み、返事を促す。

「ああ。間違いなく…山脈だな」

「そうよね。山を2座くらい越えるものだと思ってただけ…山脈越えとは聴いてないわ。地図を読めない男を有能と呼ぶのはどうなの。モノクルの度が合わなくて見間違えたとか？地図が手に入らなくて使節団からの情報を聞き間違えたとすれば、耳も遠いわ…補聴魔具が必要ね。それとも標高3000m以上ないと山とは認めないとも言うのかしら。何様？蒼鷹騎士団なら名の通り鷹おおたかの如く空を飛ぶように越えられるの？なら、是非その妙技を御教授いただきたいわ」

恨み言を淀みなく言い終えたロテリアーナは、ゆっくり山から視線を外し覆面に向き直る。

気配を察し、覆面も彼女に向き直り視線をあわせると、彼女は“

ね？”と同意を求めるかのように小首を傾げた。

仕草は可愛いが、全身から隠しきれない苛立ちを滲ませるロティリアーナに向けて、便利な妙技があれば初めから使っていますよ——と、突っ込む事は出来ない。アーモンド型の瞳は怒りの炎を宿し、山に火を放てそうだ。わざわざこれ以上怒りを煽る必要はあるまい。

覆面は大袈裟なくらいブンブンと顔を縦に動かし、頷いてみせた。

「説明をはしりやがったんでしょね。多分、奴に悪気はなかったんだろうけれど……今度補聴魔具贈っておきます」

色々とし訳ない。自分の咎ではないが、覆面は直ちに頭を垂れた。理知的な美人に訥々と責められると、たとえ責められる対象が自分でなくとも謝りたくなるのは何故だろう……少々釈然としない想いを抱きつつ、腐れ縁のフォローを試みる。

「あつ、貴女に謝られる事ではないでしょ……顔を上げて」

謝られるとは思わなかったのだろう。慌ててロティリアーナは覆面の両頬らしき位置——実際は口の端と目の縁——を両手でぶにゅっと挟み、ゆっくり持ち上げる。覆面は抵抗せずされるがまま立位姿勢に戻ると、離れていくロティリアーナの手を優しく包む。

「道中疲れたら遠慮なく私に教えてください。鷹ほどとはいかなくとも、馬の代わりならできるから」

掴んだ両手を引き寄せロティリアーナの眼を見つめながら覆面は籠った声で乞う。

突然の申し出に戸惑ったのか、ロティリアーナは眼をパチパチと瞬かせた。

「馬……まさか、貴女に乗れというの？」

馬の代わりが務まるとは冗談なのか、本気なのか……真意を読もうにも覆面の表情は布に覆われ判断しようが無い。突飛な発言によって参謀への鬱憤が記憶野の片隅へ引っ込んで行く。

「私に乗りはしませんが……まあ、似たような感じかな」

「……？……どう「うわあ……」っ、こんな景色見た事ないわ！ヴァーン、ロティリアーナさーん、此処からの眺めすごいよー！」

転移門を抜け、雄大な山々を眼にした途端バロを引き連れ高台へ登ったローズマリーが手を大きく振って2人を呼んだ。その声により会話は断たれ、覆面はロティリアーナの手を離して高台へと歩いて行く。

疑問を残しつつ、ロティリアーナも少し遅れて後に続いた。

「ランス………お嬢ちゃん達を呼んでこい。で、勝手に隊列から離れんなって言え」

「無理っすよ、バーボートさん。ヴァンさんが俺の言うこと聞かわけ無いっすから」

「俺のも聞かん。どっすっぺか」

「放っておいても平気じゃないっすか。ヴァンさんなら女性2人とロバ1頭くらい担ぎながらつかず離れずついてこれます。そこら辺のさじ加減巧いっすから」

「…そういう問題じゃねえべ」

バーボートは唸りながら後頭部を擦り、他の者に頼もうと周囲を見回す。

だが、周囲の者達はランスと同じ意見らしく、誰とも視線はあわなかった。

討伐隊の殿しんがりを務めるのは蒼鷹おおたか騎士団員数名。道案内を使節団に任せている為自然と騎士団員が最後尾に配置された。後れをとるであろう女性陣は中でも最後に控え、隊列からはぐれないよう周囲の騎士達がサポートする手筈であったが…。

「まだ転移門潜ってから半刻も経ってねえんだぞ。少しは自重してくれねえべか…」

隊列の進行方向とは真逆に位置する高台で呑気にはしゃぐ女性陣と、既にだいぶ距離が開いた現状を鑑みて、バーボートは先行きを愁いた――

……………

転移門を潜り抜けると、まず視界いっぱい峻険な山々が広がる。誰かの意図でそう設置したのだろうか、山ひだは途切れることなく縦横無尽に走り、踏破に挑む者の気力を容赦なく削ぐ。標高およそ2000～4000m級の山が犇めく中、頂を残雪に覆われた一層高き山が3座点在し、周囲の山々とは一線を画す存在感を放つ。

転移門を抜けた討伐隊は、一層高き山の裾野へ続く山路から、ラバトニア地方に足を踏み入れた。

春の陽気に包まれた今の時期。雪解け水の影響で通常なら澄んでいる溪流は濁り、水嵩を増す。数多ある源泉から湧き出た豊富な水は支流となり駆け巡る。崖から勢いよく流れ落ち滝壺をゴウゴウと打ち鳴らし、流れ集まり湖へ注ぎ、深い峡谷の壁を削りつつ各地へ養分を運ぶ。

登山中女性陣は、平地ではお目にかかれない高山植物や山河の作り出す様々な風景を楽しみ、時折出くわす雪崩や土砂崩れ跡に驚嘆する。その都度隊列から脱線し姿を消していたが、休憩や夜営をする頃には何食わぬ顔で追い付きバーボートの首を傾げさせた。

野営の度、ローズマリーは水や薪の調達から食事の配膳に至るまで宣言通り率先して良く働き、彼女が作るパンや羹は好評価を得た。時々ドジる事はあれど他人を巻き込まなかったので、ちよつとした笑いも提供している。ちよこまかと動く素朴な姿も可愛らしく、忽ち一服の清涼剤的存在になった。

ロティリアーナは山酔いに対する指導や途中見つけた薬草の調査をしつつ、ぬかるんだ斜面に足を滑らせ軽傷を負った者に『討伐（本番）前に怪我するなんて間抜けもいいところよ。気が緩んでるんじゃない？死にたいの？』と、手当てしながら心に負担を与えている。伶俐な美人から放たれる冷たい一言は威力があり、忽ち件の噂が広まると男性陣は彼女を見かける度条件反射の如く気を引き締めようになった。一種のカンフル剤的存在である。

そんなこんなで、特に大きな問題も起こらず入山から3日後の夕方――討伐隊は予定通り山村へ到着した。

山村というより山小屋の集まりに近い。ラバトニア地方の中心地へ入る者達の為に開かれた休憩所的な役割の小さな集落。故に村人は少なく、放置され木目が黒く退色した空き家が数軒佇む。

この村で夜を過ごすため、討伐隊は幾つか空き家を借り、その周囲に天幕を張った。粗方設営を終えると各人それぞれ持ち場へ散り、作業に勤しんでいる。

「予定通り進めたな。順調、順調」

古びた机の上に広げられた地図を眺めながら、団長アレクフォードは満足そうに頷く。

空き家の1軒を蒼鷹騎士団・援軍の本部兼アレクフォードの借宿とし、今アレクはヒースと今後の行程を確認している。吹雪にでもあえば潰れそうな古い家だが部屋数は4つあり、家具も必要最低限揃う。夜の山は冷えるが、暖炉に火が入れているので部屋の中は暖かい。

「少数部隊にして正解でしたね。これ以上召集していたら遅れがでていたでしょうし」

大人数で山を越えるとなると、相応に時間がかかる。討伐には人手が必要だが、被害が拡がりきってから到着したのでは意味がない。替え馬もできない山路で人馬両方の益となる編成・行程を組み、討

伐隊は順調に行軍してきた。

「だな。少数精鋭で諸費用も安上がり。このまま良い流れで現地入りできそうだ」

「さも経費削減を計っていたかのようにおっしゃらないでください。偶々でしょうに」

「偶々だろうが結果は同じだろ。細かいこと気にすんなよ」

アレクは小言を振り払うかのようにぶらぶらと手を揺らした。

椅子から投げ出された足といい、真剣に話を聞く態度ではない。

(は……………あ)

いい加減な物言いを聴いてヒースは深い溜め息を吐く。表情筋に動きはなくとも、十分脱力具合を表すそれ。蒼鷹騎士団関係者達は、鉄面皮な彼が吐く溜め息の長さで内心の呆れ度を測る目安にしている。今他の関係者がこの場にいれば、後に続く説教から逃げ出そうとあたふたする筈だがアレクは動こうともしない。締観故か慣れから来る余裕なのか、腰を下ろしたままだ。

「貴方はいつも考えが足りませんね、行き当たりばつたりが多すぎます。初めから経費削減を謳っていたならローズマリー嬢を連れて来やしないでしょう。彼女の分出費は増えたので、結果が同じとは言えませんか。経過を軽んじれば、望む結果は得られません。計算した末の行動ですら良い結果はついてこないというのに…世の中を侮ると、いずれ痛い目をみますよ」

(それって計画しようがしまいが、どっちにしろ巧くいかないってことじゃないか?)

と、アレクは思ったが「微々たる差じゃないか」という些細な反論にとどめた。

「些末な事と取り合わず、足を掬われる前例は掃いて捨てるほどあります。塩を量り売りする際、釣り合いがとれている天秤に塩一粒加えても一見誤差はないように見えます。ですが、繰り返せば差は大きくなり店側は差額分損をするんですよ…売る度損失額が増すなんて矛盾、私なら耐えられません」

苦々しい口調で、ヒースは心底忌々しそうに語る。

「お前が商人に向いてないのは解った」

所謂“オマケ”ができないんだな——正確な損益を弾き出す頭脳を持ち、騎士団の財布を預かる者としては、わずかな損失も許せないらしい。アレクは苦笑を浮かべつつ、融通がきかない性分を揶揄した。

「…私の適性ではなく、貴方の計画性について申し上げているのですが」

「これから善処するさ」

（多分な）

内心では曖昧に答えながらヒースに是を示す。

反省した様子のない主の態度を見抜き、ヒースはまた小さく溜め息を吐いた。

「…ご理解していただけたなら結構。では早速ですが、ローズマリ嬢は此処までです。この先は目ぼしい休憩地もなく、万天発生地域に入ります。彼女は村で待機してもらいましょう」

「またそれか」

予定外の闖入者は置いていくべき——団舎を出立してからヒースは何度も進言してきた。ローズマリーの事情を説明したが納得せず、折に触れては蒸し返す。

先程までの長い講釈も結局はローズマリーの件に繋ぐ布石だったらしい。

「彼女の気概は大したものですよ。汲んで差し上げたいのも解りますが、状況が悪い。戦闘に捲き込む前に避難させるべきです。みすみす命を落とさせるおつもりですか」

毎度の進言より語気が強い。これが最後の機会と見越し、なんとしてでも承諾させようとする気迫が窺える。

「騎士達が自分の身を守るだけで精一杯なほど余裕がなくなる相手なら、そもそも今回の任を引き受けたりはしない。必ず守る」

「その自信はいったいどこから湧くんですか……万天の情報も乏しいのに。過信は身を滅ぼしますよ」

「まあな。だがヒースも任務自体に不満はないだろう？ ってことは勝算はあると踏んだ筈だ。多少ゆとりを持って任務を果たせると」

過信と言えなくはないが、多角的な情報分析を経て捻出されたヒースの結論なら信じられる——アレクはニヤリと笑って答えた。付き合いが長い分、思考の筋道は大体読める。

「……そうですね。単に騎士達の力量から見れば、任務をこなしつつ女性1人守りきるだけの余力はあると思われます。が、守る対象が彼女の場合そうとは限らない」

「問題でもあるのか？」

問いにヒースはコクリと頷き、溜め息混じりに口を開いた。

「ご存知の通り彼女はよくドジを踏む。頻度は高く、内容も想定範囲内の些細なドジから、斜め上に行く大事の引き金まで多種多様です。ロバの扱いをへましただけで熊に襲われていましたし、本人にその気はなく、改善の努力をしても、まるでわざわざ問題の種を片っ端から芽吹かせているかのような有り様。そこへ厄介寄せ体質のランスと万天が集まればどんな反応が起こるやら……」

面と向かって本人達に忠告はしなかったが、団舎内では管理人夫婦とヒースが共謀し、極力ランスとローズマリーを近づかせないよう^{ルシアなど}にしていた。

騎士団関係者達の中には報せずとも3人の企みを察し、力を貸す者もいる。

単なる偶然の要素が多い体質1つに大袈裟な処置かもしれないが、只の杞憂と看過できなかった。お蔭で個別の事態だけで済んだが、効力が合わさった時どんな事態を引き起こすか予測不可能な事は唯一の誤算である。

「相乗効果か、面白そうだな」

ヒースの忠告もどこふく風。口の端を弛ませながらアレクは机に肘をつき掌で顎を支え、目を伏せる——想像を巡らせているのだろう。

悠長な反応にヒースが小さく肩を落とした。

「全く面白くないですよ……とにかく、彼女を連れて行っても益はなく、危険が増すだけです。恩返しはここで終えてもらいます」

話は終わりとばかりに告げ、ヒースは一礼してから家の出口へ足

を向けた。

（懸念は全て伝えました。反論前に退出しましょう…次は女性陣です
ね）

難航するであろう説得対象を思い浮かべ、自然と歩調が速まる。

ヒースが歩を進める度床板はキシキシと鳴り、足下から続く不格
好な影が這うように扉を上っていく。

あと数歩で門に手が届く距離まで近づくと、意識せずともヒース
の右腕に力が入った。

23話 体質の利用

「…いや、恩返しは続行だ。最後まで同行させる」

背後から投げられた言葉に、今にも門へ伸びようとしていたヒースの右腕から力が抜けた。

ヒースは溜め息を抑えつつ、くるりと振り返る。見据えた先にいる声の主は机に肘をついたままであったが、伏せていた臉は上がり、深緑の瞳を覗かせている。

2人の視線が重なると、ヒースは暗い声で問うた。

「貴方は私の導きだした結論を信じてくださってる筈では？…そろそろ納得していただけませんか」

「信じてるさ。ヒースの見解はいつも正鵠を射る。ローズマリーをこの先も連れて行くと何が起こるかかわらないってのに異論はない。これが試験問題なら彼女を置いてくのが正答だろう。だが今回、正答が1つとは限らない——益ならあるんだ」

「…どんな益ですか」

「ローズマリーの素朴な容姿と振る舞いは誰から見ても和み系だろう？ 敵意や警戒心を長く抱かせないし、場に馴染むのが巧いんだ。だからこの3日間、彼女は仕事を求めて使節団・騎士団・援軍の陣営問わず手伝いに奔走し、仲を取り持つ事で末端の齟齬を減らせた。ただ必死で手伝っていただけで、そんな事意識してなかっただろうがな。それに、女が傍にしていると無意識に遠慮して多少粗暴な態度を控える奴もいる。お蔭で小競り合いが減っていつもより紀律は随分と良い……看護師の影響もあるんだろうがな」

共通目的下といえど、所属の異なる輩が集まれば揉め事は尽きない。あからさまに睨みを飛ばし険悪な雰囲気を漂わせるだけでなく、殴り合いに発展することもしばしば。血の気が多い武人集団、罰則が与えられるとわかつていても引かない輩はいるものだ。

そこへ、いかにも争いとは無縁なのほんとした空気を纏うローズマリーが現れれば血の気を抜かれ、喧嘩を吹っ掛けるのがアホらしくなる。…喧嘩して怪我を負おうものなら、手当てと共に振る舞われる毒舌を覚悟してまで喧嘩しようとする輩がいなかったかもしれないが。

「貴方が規律を気にしてくださいとは思いませんでしたよ。いつもは放置でしょうが。……規律を守らせるだけでは彼女である必要はない。それこそ看護師殿だけでも効果はありますよ」
男装騎士を含めて良いなら、女性は3人もいる。ローズマリーを帰しても十分に賄えるだろう。

反論に構えていたヒースは交えていた視線を外し、顔を斜め下に落とし首を振った。

「まあ待て。ローズマリーの代わりがきかない益もある」

「は？」

「組織編成時、構成員が優秀な者だけだと纏まりが悪いんだ。極短期決戦なら良い結果を出す、長くなるにつれ足の引っ張り合いが始まる。潰しあいの他にも理由はあるが、結局最初の成果のみで、後に続かない。早期解散すんだよな。一方、1人か2人能力が劣る

者、他はてんでダメでも1面だけ優れた能力を持つ者など、異質な者を優秀な者と混ぜて組むとそこそこ纏まってそれなりに長期間成果を出す。得意分野の違いから発想の幅が広がる上に、役割・位置付けがはつきりしてるから互いに補う意識が生まれる。良くも悪くも劣る者がいると弄られ役——格好の生け贄役になったり、ひた向きな働きぶりが同情心を擦って周囲の底力を向上させる。仲間意識を持たせんだな。勿論、人格や場合によって一概には言えんが」

そうだったよな？と語り終えたアレクはヒースに確認をとる。

組織編成時の基本事項。そもそもこの論をアレクに教えたのはヒースだ。知らぬはずもない彼は肯定の意を示すように一度微かに頷き、疑問を口にした。

「その“劣る者”役は彼女しかない？そうは思えませんね……うちの団にゴロゴロいます」

傲慢にならないが、蒼鷹騎士団には劣る者に限らず異質な者も多々在籍している……他国まで噂が広まるほどに。

自分で発言しておいて情けなく思ったのか、ヒースの口調は沈んだものであった。

アレクも反論はないようで、仄かに苦笑をこぼす。

「まゝな。うちにも色んな奴がいる。だが、思わず手助けしたくなる若い女は彼女だけだ。援軍連中にも受けは良いし、良い格好みせたい坊っちゃん育ちは意気込むだろ」

「経験談ですか。それはそれは節操なしな事で。説得力有りますねえ……ヴァンと看護師殿は役者不足ですか」

自信満々に言い切ったアレクに対し、ヒースの返答は冷たい。

公的に見て、国一番の坊っちゃんといえば王子の事であろう。騎士道を尊ぶ貴族連中はあらゆる意味で見栄っ張りだ。間柄関係なく保護欲を掻き立てる女性がいれば、ここぞとばかりに守りたくなるのは必然。と、アレクはお坊っちゃん育ち代表で主張したに等しい。

「…あの2人はどう見ても大人しく守られるたまじやないだろ…とにかく、帝国軍にはラバトニア地方を守るって目的があるが、うちの連中にとっては縁が薄い土地だ。後ろに同郷の保護欲を刺激する者が控えてれば簡単に逃亡を考えないし、士気も上がる」

坊っちゃん達の虚栄心だけでなく、他にも通ずる縁は攻め気を持続させるだろう。性別・能力・外見・性格・出身地。すべて当てはまるのはローズマリーのみ。

「…一役買っただけでしょうね。ですが、問題をお忘れでは？」

問題が残るうちは引くつもりはない。たとえどんな利点を並べられても。

ヒースは、抵抗の意を込めて主の瞳を射ぬく。

暖炉の炎がゆらりと揺れ、ヒースのモノクルに反射した。透明度の高い翠の瞳に奇妙な陰影が踊る。

視線の意を正しく汲み取ったアレクは、柔らかな表情を浮かべながら、口を開いた。

「塩一粒の差目^{オマケ}当てに再来店する客が増えれば損失は帳消しだろ？立派な利益だ。微かすぎて見過ごされるかも知れないが…その一粒が特徴的な塩なら気付き客は多い。“特徴”は使い方次第で益になる」

「…粗悪な特徴を益に？詐欺でも働くおつもりですか…」

「益があるから詐欺じゃないさ。今回、何よりも原因の究明が最優先だ。ランスが厄介を引き寄せてローズマリーが問題の種を芽吹かせんのは、むしろ好都合なんだよ。原因そのものを引き当てるかもしれないからな」

闇雲に万天を倒しているだけでは効率が悪い。帝国軍もある程度討伐した筈だが、いまだに原因が判明していない。ならば、同じ策を施行するより、多少奇策も必要だろうとアレクは判断した。原因そのものから飛び込んでくるなら、儲けものだ。

「…体質を逆手にとりますか」

「ああ。それに、今さらローズマリーを帰すのはなく無理だろ。あの2人が抵抗する。説得は流されるんじゃないか？」

あの2人とは、覆面と看護師を指す。元々気性が合うのだろうが、ローズマリーがロティリアーナに治療術を教わり始めたこともあって、よく2人は一緒に行動している。師弟関係である為、ロティリアーナがローズマリーに指示を出す姿はまるで、女帝と忠実な侍女のようだ。覆面も加わり、女3人の――傍目には女2人に男1人に見えるかもしれないが――固まりは既に名物化しつつある。結束を乱し、引き離そうものなら他2人からの抵抗は必至――当のローズマリーよりも手強い相手だ。

アレクの指摘はヒースも感じていた事実。彼は口を引き締め押し黙り、暫し沈黙が続く。

時折、夜になってから強くなった風が山小屋の壁を撫でる音や、夜営している討伐隊員の声が響いた――そろそろ夜食が配給され始

めたのだろう。いつもこの時ばかりは賑わいをみせる。

（そういえば腹が減ったな…）

沈黙に飽きたアレクの集中が切れ、空腹感を覚えた頃。視線を合わせたままであったヒースがおもむろに目を閉じ、顎を少し引いた。そして、再びスツと開いた瞳からは凧いだ色――先程までの意を込めたものとは違う、いつもの瞳が現れた。

「解りました。もうローズマリー嬢を帰せとは申し上げませんが、1つだけ留意していただきたく事項がございます」

そう言いながらヒースは、アレクの傍まで歩み寄っていく。

「…何だ？」

だんだん近付いてくるヒースを不思議に思いながら、アレクは尋ねた。

小屋の扉とアレクの椅子のほぼ中間地点で足を止めたヒースは、無表情のまま感情の読めない声で言葉を紡ぐ。

「マギーが言っていました、男性が女性を思い通りに動かそうとすると必ず痛い目をするそうですよ」

「……」

「私は男女関係なく共に痛い目を見ると思っていました、今回の結果如何で撤回しようかと思えます。彼女達の行動力にはとても敵いません。主に痛い目を見るのは男達かもしれない」

「……」

ヒースの言にアレクは、沈黙を返すのみ――微動だにしない。

「ましてや、あの3人はあの事件の「ヒーーーーッハーヒーーーーッハ
ヴウオウロヲウローー!!」

「イヤーーーーッ、止まってよーっでああっ!!」

——ガッドツ、バツーン

「!!」 「おつ、任せろ」

奇声と怪音を轟かせながら小屋に突進してきたもの達によって、
門が折られ扉が勢いよく開いた。

音に反応し、素早く振り返ったヒースのもとへ、巨大な袋が飛び
込んでくる。咄嗟に弾かず、受け止めてしまった。

扉を視界の端に捉えていたアレクはヒースよりも早く動けたので、
暴走している元凶——扉を蹴破った反動でフラフラしながら走る口
バのバロの手綱を取り、捕まえる。

「キャー!ごめんなさい!!」

それらを見て——自身は入り口のへりに躓いて転倒し、動けずにい
た——ローズマリーが威勢よく謝った。前のめりで横たわる彼女の姿
は痛々しいが、とりあえず元気そうだ。

バロは目眩がするのか、その場で崩れ落ちた。バロの背には色々
な大きさの樽が括りつけられている。アレクが蓋を開けると、中身
はサラダや未だ湯気が上っている羹等だ。夜食を配給中であつたの

だろう。食欲をそそるいい匂いが周囲に漂う。

ヒースが受け止めた巨大な袋の口からは、パンがニョキッと顔を出している。

「こっちは大丈夫だ、ローズマリー。それより怪我はないか？」

「私は丈夫が取り柄です！此くらいの傷は日常茶飯事ですので、慣れました」

アレクからの問いに、ローズマリーは丈夫さを証明しようと、手のひらを両脇について起き上がるうとしたが…起き上がれなかった。手に木の感触が伝わってこない。

「あれっ？」

起き上がれなかったのは別に、怪我のせいではなく――

「ローズマリー！怪我は？」

と、ローズマリーの後ろから現れた人物に、腰を掴まれヒョイッと、いとも軽々と持ち上げられたからである。

24話 周辺調査報告

「わっ、わわっ…………ヴァン、大丈夫だよ」

ローズマリーは顔を上げ、自分を持ち上げている人物——濃紺の細布で頭部を覆った友人に、慌てて無事を主張する。掴まれた腰を捻り、覆面の顔間際で手のひらを振ってみせた。動作に問題ないから、たいした怪我じゃないと証明できるよう大きく動かす。

「おっ、今日は転倒だけだったか。もっと派手でいいぞ、マリー嬢」
ローズマリーがジタバタしていると、戸外から差し込む星明かりを背に受けた覆面の後から、副団長マイケルがぬつと現れた。彼は、小屋内を一瞥しただけで事態を把握したようだ。

ローズマリーにニツと微笑みかけた後、覆面の脇を通って小屋内に入り、男2人に視線を向けた。

「…おいおい、なんだその手つき。女より飯とロバを受け止めんのに必死だったのかよ、団長。獣に趣旨替えたあゝますますヤベエな」
マイケルが見たものは、パンがはみ出た巨大な袋を抱えるホーリーヒースと床にぐでんと横たわるバロの傍らに膝をつき、腹部を撫で回す団長アレクフォードの姿。

揶揄されたアレクは、バロの腹部をじっと見つめた。

「…この腹は毛深すぎる。グレンの専門分野だ。なかなか良い肌の張り具合だが…。怪我の有無を調べてたんだ」

そう評すとアレクは、撫でていた手を引っこめ立ち上がる。

「…しっかり感触も確かめたんだな。手早いこって」

「怪我の確認だと言っただろう、ついでだ。それより、周辺調査はどうだった。他の連中は？」

山村に到着直後、マイケルは覆面を含めた討伐隊員数名を率いて周辺調査に出た。2人戻ったなら後続もいるはずだ。

「おう。今来ん「うつ。痛そつすね、その傷」

「どうしたんだ嬢ちゃん。またスツこけたのか？」

「そばかすお嬢さん、トゲを生やすとは何て痛々しい…そうか。貴女の祖先に可憐な薔薇の化精がいるんだね？時に美しいものは身を守「ローズマリーは継精者じゃない…どこが“大丈夫”なんだ。痛むだろ」

マイケルの声を遮り、扉付近で慌ただしい声が上がった。ランスロット、バーボート、そして援軍のアウロ。

他にも調査から戻って来た者達は皆、覆面に腰を持ち上げられ足先を床上数cmの位置でブラブラ揺らしているローズマリーの姿に気を引かれたようだ。小屋の入り口に溜まっている。

「全然痛くないよ？ジンジンするけど」

「摩擦熱で痛みが紛れてるんだろ。これだけ木のトゲが刺さってて痛まないわけが無い。転けた拍子に擦って、刺さったんだな…あかぎれ輝もあつたし」

「膝にも擦過傷。細かく筋状に血が滲んでるんすよ」

「顎も打ったか？赤えな」

「蔓薔薇を想わせるね」

「え？」

次々に指摘されたローズマリーは手を振るのを止め、自身の各所

を見た。

手のひらには大小無数のトゲが刺さり、血も滲んでいる。膝や肘も打ちつけた衝撃で赤みが増し、筋状に擦り切れた肌に浮き出た血が、まるで模様のように見える有り様だ。

「何でこんなに？」

「床板が老朽化してるからな…早く抜いて消毒しないと化膿する」
手入れされていない古びた床は、腐蝕し所々ささくれが目立つ。
細かい砂も鏝やすりと化し、両手から滑り込んだローズマリーの柔らかい肌を傷つけるに至ったのだろう。

覆面は治療所へ運ぶために、ローズマリーを抱え直した。

「待って、ヴァン。救急袋をバロの首に下げてるの。手当てなら自分で出来るわ」

治療術を習得中のローズマリーは「正確にはいつも傍に控えるバロが―救急袋を常時携帯している。バロの首もとにある白い袋を指し示すが、僅かな痛みを感じ顔を歪めた。徐々に熱が痛みに変化してきたらしい。

「トゲを抜いた後洗い流さないと駄目だ。ここじゃ出来ない。なるべく魔力の消費は避けたいし……あそこへ行くか」

覆面は一人ごちると、成り行きを静観していたマイケルに体を向ける。

「副団長、さっき見つけた場所を使わせてもらう。誰も近づかせないでくれるか？」

「おゝお任せとけ。行つてこい」

「悪い。頼んだ」

承諾を得た覆面は、ローズマリーを肩に担いだままバロに歩み寄

つていく。

「団長、バロは治療所へ連れていく。救急袋はそのままにして、他を外してくれないか」

「構わないが……どこへ行くんだ」

先程から会話に上がる場所がわからない。未だに意識が戻らず横たわるバロから荷を外しつつ、アレクは問うた。

「報告を訊けば判る……戻りは遅くなるかもしれないが、門は上げておいてくれよ？」

「かける門がない」

くいつと、アレクが顎をしゃくって示す先に、折れて使い物にならなくなった門の残骸がある。ロバー頭の体当たりに耐えられぬほど、老朽化した小屋の建具は脆い。

「……ついでに適当な木材を調達しとく」

「森へ入るのか。他に人手は？」

「いや、私1人で事足りる」

アレクの提案を退けると、覆面はバロの脇に手を差し込み、抱えあげた。右肩にローズマリー、左腰にロバを担ぐ姿は異様の一言に尽きる。総重量200kgを軽く越えているのに、ふらつきもしない。

「ヴァン。私、歩けるよ。降ろして」

「これから行く場所は担いだ方が早く着く。ちょっとだけ我慢してくれ」

“早く着く”の一言にローズマリーはおし黙る。出立初日から今日までの道程で、覆面に任せた方が早く着くのは実証済みであった

——反論できない。ローズマリーの体から力が抜けた。

「じゃ、よろしく」

ローズマリーが思考を巡らせている内に、覆面はアレクに断りをいれると、戸口へ踵を返す。

「そうだ、ヒース。ソレ任せていいか？」

ソレと示されたものは、ヒースが抱えている巨大な袋の中身。つまりはローズマリーお手製、町の親方仕込みのパンだ。

頼まれたヒースは特に異議もないので、軽く頷いてみせる。

覆面も会釈を返すと、戸口に築かれた人垣を掻き分け退出した。その平時と変わらぬ軽い足取りに、男達は呆気にとられつつ、覆面の背を見送る。

団服を着用していても、頭部に巻いた濃紺の覆面のせいでもうしても胡散臭い印象を与える騎士。女性とロバを抱えて闇に紛れる姿は、変装して紛れ込んだ盗賊のようで——男達の胸に、言い様のない焦燥感が過った。このまま行かせて良いのだろうか……今、自分達はみすみす犯行を許してしまったのではないかと。

警邏を兼ねた調査を共にしたうえ、事の一部始終を見ていたのに、疑念を払拭できずなかなか目が離せない。

「……んな所で団子になってないで入れ。報告終わったら飯にするぞ」

ローズマリーの置き土産、羹が入った樽をベシベシ叩いて注意を引く。

アレクの呆れ声と音に反応した男達は我に返り、一斉に動き始める。

周辺調査に出向いていた者達、十余名――蒼鷹騎士団おおたかの深緑、使節団（帝国軍第5部隊）の白、援軍の黒い軍服――3色が混在し、瞬間に殺風景な小屋内が賑やかになった。

「報告が遅れてしまい申し訳ありません、アレクフォード殿下」

「カイルーノ副隊長：貴方もおいででしたか」

色の波から進み出たのは、第5部隊副長エンリル・ライ・カイルーノ。

彼は、アレクの数歩手前で止まると胸下に腕を掲げ、礼の姿勢をとった。

共同作戦を展開するにあたり、両陣の連携を深めるべく、彼はキノード陣営にも度々顔をだす。さすがに見回り後は、自陣に戻りラバトニア卿に報告するだろと踏んでいたので、部下を率いたままこちらに来ると思ってもよらなかった。

（マイケルとヴァンが俺を役職名で呼んでいたのは彼がいたからか……）

アレクは内心秘かに感じていた違和感の解消に至る。口調こそ変えないくせに、妙な所を拘る腐れ縁たちの行動に苦笑を漏らすも、見とがめたヒースから刺さるような視線を感じ、口を強く引き結ぶ。

「村民の証言通りだ。鳥獣の鳴き声1つしない」

「狐狸、野兎、山やぎなど容易に探知可能な動物も視認できません」
マイケルとエンリルが調査結果報告を始めた。

「芋虫すらいねえからな、魚も釣れなかった」

「営巣途中の巣も放棄されていました。放置された卵もあります」
エンリルが懷から卵を3つ取り出し、アレクの目線と同じ高さまで持ち上げる。

大きさや色模様が異なる事から、別種の鳥の卵だと窺い知れた。

「蛇に食われてねえから、同時期になくなった線が濃い」

「足跡から推測して、移動はここ2、3日の間に行われたのかと」

「争った跡もない。何かに怯えて他に目もくれずに逃げたんだろ……前兆があるたあゝ珍しいよな」

「……………」

張り合うように交互に発言していたが、マイケルの見解にエンリルは黙る。持ち上げていた卵を懷にしまった。

「……そうか。予測より万天の発生範囲が広まったようですね？」

アレクはエンリルが先に此方へ来た理由を察する。予め指示されていたのだろう——兆しがあれば警告しておけと。

「……ご推察の通り、既に何時現れてもおかしくない状況です。より一層警戒強化をお願い申し上げます」

「解りました。ラバトニア卿によりしくお伝えください」

「は」

エンリルは辞去の口上を告げ、己の部下達と共に退室した。白い軍服が抜け、残るは深緑と黒……屋内は一気に暗くなり、些かむさ苦しい空気が漂う。

使節団の足音が遠ざかると、アレクは口を開いた——玩具を前にした子供のように目尻を細めながら。

「皆、聴いたな。直ちに夜警の数を増やせ。今耳にした事を全員に通達してこい」

「御意」

アレクの号令により、戸口付近に近い者から動きだす。忍び寄る戦闘の気配に胸を沸き立たせているようだ。動作がキビキビしている。

「おっと、ランス、お前はアレ配つとけ」

「はい？」

流れに身を任せ戸口に向かっていたランスがマイケルの声に振り返ると、マイケルの背後から巨大な袋が近付いてくるのが見えた。

「…やっぱり俺が配るんすね」

「ええ。お願いします」

巨大な袋は喋りながらランスの胸に飛び込んでくる。袋から漂ういい匂いが鼻孔を攪り、ランスの腹がグーキュルルルと音を立てた。

「いいお返事で」

巨大な袋の影からヒースが顔を覗かせる。からかうような口振りだが、表情は真顔だ。余計に羞恥を煽られ、頬が色づく。

「私が盆を持ちましょう。盆の特長は全てを支える包容力。薄く華奢な体で健気に支える姿は、陰日向に寄り添う女性の「俺が樽だな。団長、のけてくんねえべか」

アウロとバーボートは自ら配給係に名乗りをあげた。アウロは盆の美学を語り、バーボートは羹の入った樽にかじりつきそうだ。両者とも己の欲に忠実である。

顔を赤らめていたランスも、彼等の行動を見て、羞恥に喘ぐ心を落着けた。

「人数分配ってくれよ」

バーボートに苦笑を返し、アレクは当初座っていた椅子に戻る。

バーボートが樽をガツチリ抱えると、ローズマリーの代役3人組は退室した。

他報告組も退室し、小屋内は上役3名のみとなる。

「明日以降の予定を確認しましょう。幾つか配置替えが必要です」

「そうだな……」

「そんじゃ先ず、先頭にウチから何人か——」

ヒースの一言を皮切りに、3人は会議を始めた。各々脳の片隅に僅かな引っ掛かりを覚えつつ、目先の懸案に取りかかった——

………

「なあ、ルカイエ」

「はい。副隊長」

自陣に戻る道すがら、エンリルは部下を呼んだ。

「アレクフォード殿下は色関係華やかだって話だったよな」

「そう記憶しております。現に堂々と寝起きを共にしてるみたいですね」

討伐任務中に女性を侍らせるとは、噂に違わぬ所行である。

「……男もイケる口だとはなあ。お前女顔だから気を付けろよ」

「一言余計です。……それって、遂に覆面の下を見たんですか？女顔？誰に似てます？」

出立以降、徹底して顔を見せない覆面の騎士も王子と寝起きを共にしているらしいと噂があったが——先程の会話からして事実と見ていいだろう。

団舎で起きた王女の一件以来、覆面の騎士は注目の的だ。顔も素

性も隠した凄腕の騎士——隠されれば暴きたくなるのが人の世の常というもの。一部の隊員達からさりげなく行動を監視されている。

「さあゝな」

捲き込まれたくないエンリルは、否定を口にし、歩調を速めた——

25話 あったかい泉

山奥に居を構えるにあたり、何より重要な課題は水の確保だ。

そのため山村があれば、近くに川があると見ていい。現在逗留中の山村も例に漏れず、15分ほど歩けば枯れる心配のない水量を有した溪流にぶつかる。

村民達は、生活行動のあらゆる場面でこの川の水を利用するが、ある1場面においては利用しない。

正確には、利用する必要がないのだ。

なぜなら…

「わぁ」「あら…」

淡い星明かりと松明の光を受けて煌めく噴気、しとやかな流水音、じわりと伝わる熱。四方を宵闇が覆い隠すなか、存在感を放つそれを見て、ローズマリーとロティリアーナの口から感嘆の吐息がこぼれた。

「着いたよ。ここが村民の大衆浴場。毎日浸ければ貴女も絹美肌に！効くよ、嫁恋秘湯」だとさ」

岩に囲われた秘湯へ続く一本道のと真ん中に設置された看板の字面を読み上た覆面が、微かに首を振る。

「ここは女湯らしいんだが…妙な切迫感が漂ってるな」

「よめこい？よめこい？」

「美肌を手に入れる頃には望まぬ亭主も押し付けられてそうね。嫁入り…重すぎて入り辛いわ。本末転倒よ。女心がわからない奴ばかりじゃ、道は遠そうね」

お気の毒さま。と、ロティリアーナが目を眇て評した。

寒村唯一の名物、温泉。登山道から少々外れた森を進むと、石がごろごろ転がる岩場に出る。岩場の奥、崖にもたれる奇岩群の中央にひっそりと湧く秘湯。折り重なる巨石の壁と岩岩の隙間から立ち上る噴気は良い目隠しの役を担う。

ごく一般的な泉質で効能も珍しいものではないが、山々を越えた者だけが入れる幻の秘湯として付加価値がついている。村民たちの入浴施設兼村おこしの要所だ。

女性が入りやすいように男湯と女湯は別たれ、森で分岐している。覆面は、見回り中にこの分岐点で立て札を見つけたのだ。

「ま、温泉には違いない。利用させてもらおう」

覆面は看板を避けると、岩壁が作り出す空間へ足を踏み入れた。

岩壁は小さなものでも大人4、5人分ほどあるであろう高さと厚みを有す。岩壁の合間にできた細い道をくねくねと進むと、壁に添うように木造の棚が設置されていた。どうやら脱衣所のようにだ。

「降ろすよ」

そう言つと覆面は、背に担ぐ繭状の物体——ローズマリーとロティリアーナを降ろしながら、2人の体に巻き付けていた細布をシュルシュルとほどいた。布は瞬く間に巻き上がり、覆面の手に収まる。

（だから、その布は何なの）

ロティリアーナは細布をじつと見つめた。

任務開始から3日。隊列からはぐれそうになる度に覆面が何処からともなく取り出し、まるで赤子の抱っこ紐のように使用する布。毎度色は違えど巻き付けられても苦しくないから不思議だ。頭部に巻いている布と同じ生地を使った布のように思える。生地を訊いても“譲り受けたものだから判らない”という答えだった。

ロティリアーナが見つめるなか、覆面は移動中預けていた松明を受け取り、備え付けの灯籠に灯を点けに行く。湯船を囲うように四散する灯籠の数はそれほど多くないが、足元を照らす光が増えて心強い。

だんだん明るくなるうちに、ぼわんと柔らかい灯を映す湯船が視界に入り、ロティリアーナは目的を思い出した。

「さ、汚れを落としてトゲを抜くわよ。入浴はそのあと。痛いから覚悟なさい」

傍らに立つローズマリーに告げると、腰に下げていた荷袋からせつ子ビレンゼットを取り出す。

「でも、やっぱり血が湯に混ざっちゃうし……」

「洗ってからなるべく端にいれば良いのよ。当分利用者はいないわ」
治療所からここに来る道すがら、覆面に周辺調査の結果を聴いた。

危険が迫っているなら村民には避難勧告を出すはず。温泉に入るゆとりは無いだろう。

（まともに考えたら…ね）

事情があるとはいえ、状況を認識しながら温泉を利用しに来た自分達。他に例外がないとは限らない。

ロテイリアーナは内心を押し隠しつつ、渋るローズマリーの手をとる。

「押し流した方がいいのよ。細かいトゲひとつでも残れば化膿するわ。もし、輝の奥に隠れでもしたら…この可愛い指を切断することになるかもね」

ふわりと柔和な笑みを湛えて指を摩るロテイリアーナに、ローズマリーの肩が小さく跳ねた。

きゅっとつり上がった目尻を更に尖らせ、冷笑を浮かべて詰りながら手当てする姿は幾度も見たが、柔和な微笑は初めて目にする。告げられた言葉の方が恐ろしい内容なのに、珍しい表情に気をとられてしまう。

（日向ぼっこしてる猫みたい…ラバトニア卿もこんな風に微笑まれるのかしら）

笑みの理由がわからないローズマリーは当惑し、思考がずれた。猫からラバトニア卿を連想してしまい、ロテイリアーナから視線が外せない。奇妙な沈黙が続く。

「秘湯に入らずんばトゲも出ずってな。入って損はないさ」
覆面は、戻ってくるなりそう言った。2人の視線がぱつと覆面に集まる。

「……………」

「……………」すまん

微笑が嘲笑に変わる瞬間と眉尻がガクツと下がる困惑顔を見た覆面は自分の発言を詫びた――

……………

……………

……………

「その体勢辛くないか？」

「大丈夫。ちょうど段差があるの」

ローズマリーは岩風呂の隅に張り付き、出っ張りに会わせて膝や肘が湯の外に出るよう工夫したようだ。トゲ抜き中に湯をかけられて目に涙を溜めていた彼女は、もう傷口に刺激を与えたくないらしい。必死に波打つ湯を避けている。

「…良い湯ね。熱燗が欲しいわ」

ローズマリーとは対照的に、ロティリアーナは寛いだ様子だ。肌に馴染む柔らかい湯に、汚れも疲労も溶けていく。

「のぼせ…るわけないか。貴女は酒に強そうだ」

覆面の言にロティリアーナはクッと唇を歪ませ、覆面の頭頂から首元を眺めやる。

——頭部に布をぐるぐる巻いたまま入浴する人に、湯中りを心配されたくない。

「私は、花びらを湯船に浮かばせたいな。香りもたつし、岩風呂の景観にも合うよね。…ハーブで代用できるかな？」

「ハーブは香りが強くて酔うんじゃない？花びらを浮かべる日、ハーブティーの日、熱燗の日、ぶどう酒の日…日替わりで楽しめたら女性客も居着くかもね」

「あんな看板より効果はありそうだな」

引き返したくなる看板より、出立を延期したくなるちよつとした心遣いに惹かれるものだ。まずは永住したいと思わせるのが肝要だろう。

「うん…ハーブをお裾分けしていいのかな。挿し芽で殖やせるし、手間もかからないのを」

ローズマリーはぶつぶつとハーブの名を呟き始めた。

「…村民に協力するのも良いけど、恩返しはどうなってるの？」
ロテリアーナの問いかけに、ローズマリーの呟きがピタリと止む。

グググツときこちない動作でローズマリーは顔を伏せた。水面すれすれに保たれた顔は、打ち付けた顎と同色に染まる。

「……………」

ロテリアーナの無言の追及が続く。

岩壁から水滴がピチツと滴る音やこぼこぼと注ぐ湯の優しい音が聞こえる。

暫らくして、ローズマリーは口を開いた。

「…隙がないの」

「隙？」

「ラバトニア卿に近づけないの」

「近づけないって…何度か向こうの陣営に突撃してたわよね？パンを持って」

出立初日に団長からお近づきの印として、パンや食料を第五部隊に届けている。後方支援と伝令を仰せつかったローズマリーは、その際直接顔を会わせる機会もあったはず。

「物理的には近づけるんだけど…お話しする隙がないの」

「会話ができないのか」

覆面の問いに、ローズマリーはこくこくと首を上下に振る。

「いつもお忙しそうで、会話する雰囲気でもなくて…」

「いたたまれなくて退散したのね。もたついていると十分な恩返しなんて出来ないわよ？」

本格的に討伐が開始されたら、それこそ会話する時間などない。恩返しの糸口も掴めないまま任務は終わってしまうだろう。

「うん。だから弱味を訊き回ってみたの」

「？」

ロティリアーナの眉がピクリと上がる。

「使節団の皆さんに、ラバトニア卿の噂とか趣味とか人柄とか……どんな上官なのか訊いてみたの。悩み事と弱味も」

「…前半はともかく、悩みと弱味を聴き出せたのか」

「予想は聴けたよ」

比較的よく顔をあわせる隊員達に軽い調子で訊いてみたのだ。ロズマリーがラバトニア卿に助けられたのは知れ渡っているのので、「お礼がしたいのです」と言えば、訝しみつつも様々な情報を教えてくれた。

「てつきり配膳に行ってるのかと思ってたわ。情報収集のために走り回っていたのね。…で、何か掴めたの？」
救命の恩に値するものなどそうそうない。質は劣れど数をこなしたいところだ。

「皇帝の覚えもめでたい有望株。趣味は仕事。一本気な性格で敵も多いけど味方の方が多い。風魔法を使わせたら右に出るものなし。数ある武功と誠実な人柄、整った顔立ちに惹かれ、言い寄る女性は後をたたず。家族仲も良く、特に妹さんを溺愛してる。悩みや弱味を強いてあげれば、一度引き受けた者なら信じてしまう情の深さと妹さんが結婚するまで自分もしないと明言する兄馬鹿ぶり……だって」
一気に喋り終えたロズマリーは、ノロノロと顔を上げる。

「お手伝いできそうな隙がどこにもないの。順風満帆で……どうしよう」

首をかしげたロズマリーから悲壮感が漂う。

「脚色を真に受けちゃダメよ、ローズマリー」

「え」

「だな。…隙ならあるさ」

「うえ？」

予想外な発言に、ローズマリーは視線を2人の間にさ迷わせ、珍妙な声を上げた。

「お世辞が含まれてるのよ。その手の噂は話半分に聞きなさい」

「あの方は、どうにも隙が多いように思える。視点を変えてみな」

「どういうこと？私にもお手伝いできそうな事があるの？」

ローズマリーの顔が嬉しそうに華やぐ。

期待が滲む問いに、覆面とロティリアーナは互いに顔を見交せた。そして、同時に頷きあうと答えを待つローズマリーの元へロティリアーナが近づいてくる。移動にあわせて湯に波紋が広がった。

（なに？何で来るの）

迫り来るロティリアーナに嫌な予感を覚え、ローズマリーは後ずさるうとする。が、叶わない。

自らの体勢を思い出す。

岩風呂の形にピッタリ嵌まっている状態では逃げ道がなかった。

26話 恩返しの方法は？

ロティリアーナは身を縮めるローズマリーのすぐ傍に来ると、細くしなやかな腕を伸ばしローズマリーの腕に触れる。

「な、何でしょうか…？」

怯えの滲む問いを発するが、応えはない。

ロティリアーナはローズマリーの片腕を湯から持ち上げ、指の先から肩口まで視線を走らせる。

ツルツルした爪の形を指の腹で確かめ、擦り傷・打ち身を避けつつムニムニと前腕を揉む。手首を優しく掴み肘を90度に曲げ無防備な二の腕をつつくと、何かに納得したかのように顎を引く。

「水滴を弾く肌目細かい餅肌、幼すぎないし心労も無し。色気は足りないけど…充分いけそうよ」

ロティリアーナは覆面に視線を投げ、真顔で告げた。その顔つきは診察を終え、診断を下す時の表情を彷彿させる。

報告を受けた覆面はこっくりと相槌を打つと、顔に疑問符を浮かべているローズマリーに問いかけた。

「墮落に誘う（いざなう）悪女と献身を捧げる聖女なら、どっちになりたい？」

「……え？」

問いの意味がわからないローズマリーの表情に疑問符が増える。唇を“え”と発音した形のままで硬直した。

「誇大表現ね。そこまで出来ないし、話が飛んでるわ。先に説明でしょ」

ロティリアーナがやれやれと首を振りつつ、結論から話そうとする覆面をたしなめる。

「そうだった」と覆面は己の非を認め、改めて説明し始めた。

「部下の評から追従や脚色を排すると、ラバトニア卿は使い勝手がいい人物ってことなんだ。上役だけでなく下の者にとっても」

「使い勝手がいい？」

誉めてるようにも貶しているようにも聞こえる言葉に、ローズマリーはきょとんとする。

「要するに、上からすれば人心掌握に役立つ手駒なんだ。若き英雄的存在が活躍するほど民草は活気づき、主君である皇帝の評判も上げる。部下からすれば矛を持った盾といったところだな」

間違いなくイイ人だ。と覆面は感心した風にひとりごちた。

ラバトニア卿は部下と共に戦場を駆ける隊長として名を知られる。自ら先陣を切り拓き、部下を背に庇う姿が人気の所以の一つだ。攻守に優れた風を手足のごとく自在に操り、広範囲での戦闘を得意とするらしい。

「近くに居れば絶対安全って訳ね。彼が成果を上げればおこぼれもいただけるし、理想の上官：身内に甘いなんて、尚更イイ上官だ」と

ロティリアーナがローズマリーの耳元で囁いた。

おずおずとローズマリーが視線を向けると、ロティリアーナは口

を歪めて言葉を放つ。

「誠実と言えば聞こえは良いけど…そういう馬鹿正直な人ほど短命ね。若くして戦場で討ち死につて末路なのよ。遠くない未来、彼もそうなるんじゃないかしら」

「師匠、そんな！…短命だなんて…お強い方なのに」

ローズマリーに小難しい戦略云々は理解できない。けれど単純に考えて、戦闘能力が高いほど生き残る確率が高いはずだ。軍人の寿命は総じて短いなか、彼の強さは生還を保証しているようで、ローズマリーは秘かに安堵していた…のだが。

自分より遥かに生死を見てきた女性に、呆気なく覆され背筋が寒くなる。

湯に浸かりながらも微かに震えるローズマリーに構わず、ロティリアーナは「オッサンくさいから師匠と呼ばないで」と言い、ローズマリーの頬を指でちょんちょん突つく。

「もちろん強さは大事よ？でもね、彼には決定的に足りないものがあるの。能ある鷹は爪を隠すじゃないけど…韜晦要素なし、意地汚さなし、配偶者なしの無い無いずくしじゃあ、生き残るのは難しいと思うわ」

まあ、そういう潔い死に様は男の美学らしいけど…とロティリアーナは付け加えた。

率先して戦闘に身を委ねる武人は己の身を省みない。他者を護る者ほど自己防衛意識は低く、生に無頓着だ。養う家族もいなければ、

上層部も遠慮なく彼を使う——正に使い勝手のイイ捨て駒。

持論を語るロティリアーナの黒目はぼんやりと揺らぎ、焦点を結ばない。幾度か戦地に派遣された経歴を持つ彼女は、何を思い返しているのだろうか。戦場経験者からの言葉は重く、ローズマリーは口を閉ざす。

「…つまり、そんな男に恩返しをするならば、彼の損な性分が狙い目ってことなんだ。命に関わる難点だし、自覚する切っ掛けになれば丁度いいんじゃないか？」

間を見計らって覆面が明るい口調で提案した。重くなりそうな空気を払拭するようあえてさらりと話す。

「性分につけこんで裏切ってみせる…又は、体張って振り回して墮落させる悪女になるか…」

覆面は一言一言ゆっくり発しながらスイスイと湯をかき分け、ロティリアーナとローズマリーに近付く。

ぱっとローズマリーが覆面の方に顔を向けると、つられてロティリアーナも覆面に視線を向ける。

ここ3日で漸く感じ取れるようになった——布越しに放たれる覆面の視線に込められた意図を察し、ロティリアーナは口を開いた。

「ちょっとイタイけど…あらゆるお世話をして、尽くして“あなたが生き甲斐です”と全身で主張する、帰ってきてやらなければと思わせる女、もしくは護りたくなる聖女擬きね…」

ロティリアーナが面白そうに囁く間に、覆面はロティリアーナとは反対側の岩肌に手を着く。ローズマリーを2人で取り囲む位置取りだ。

「アレクを捲き込んで、王子に無体を強いられてるんです、助けてください！とかどうだ？泥々の愛憎劇を演じれば上も使いづらくなるだろ」

「今命があるのはラバトニア卿のお蔭なのよね？助けていただいた命、全てでご奉仕させてくださいってどうかしら。…いつそ押し掛け女房気取ってみる？」

ローズマリーを囲った2人は、口々に提案し始めた。

「…私、恩返しをしたいんだけど…それって恩返しになるの？」

2人の話を聞いてると、理不尽に恩を着せようとしている気がする。ローズマリーは恩を売りたいのではなく、恩を返したいのだ。あくまでローズマリーが納得したいだけの身勝手な行動に恩人であるラバトニア卿を悩ませたり、振り回したくはない。手を煩わせては、本末転倒では…

相談にのってくれる2人には感謝しているし心強いが、ローズマリーはいまいち不安で眉尻を下げ、情けない顔で疑問を口にした。

「あらっ、聴き込み調査までやっておいて今更？立派に噂が流れると思うわよ」

「えっ？」

「少なくともローズマリーが隊員に話した“お礼がしたい”って件は卿にも伝わってるさ。口止めしなかったんだろ？」

「あ…っ うっ…」

初歩的な失敗だ。ローズマリーが近寄る度にラバトニア卿に気を

遣わせてしまいかもしれない。それどころか、泥沼な愛憎劇云々に似た尾ひれがついた噂が流れる可能性もある。控えめな恩返しでは、火に油を注ぐ結果になるかもしれない。

（あれ…今私、恩を仇で返しかけてる？…どうすればいいの？）

答えが出ず、思い悩むローズマリーの視界がぐるぐると回った。

必死に思考を巡らせ目を回す弟子の様子にクスツと微笑み、ロテイリアーナは手を差しのべる。

「時間切れね。湯船に浸かる時間は長くても15分。そろそろ出ましょう？」

ざばつと立ち上がるロテイリアーナと覆面に対し、ローズマリーの体は茹でたタコのようにグニャグニャと力が抜けて湯船に沈む。沈没寸前、覆面に支えられたローズマリーは、介助されつつ湯船から引き上げられた――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4785s/>

覆面の騎士はそうさくちゅう

2011年11月30日23時46分発行